

令和7年度指定

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム

構築支援事業

## 活動報告書

令和8年3月

学校法人 東北工業大学

仙台城南高等学校

## 東北から世界へ、DXが切り拓く豊かな未来への胎動

文部科学省より「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」のカリキュラム開発校として指定を受け、本校が歩んできた三年間の先進的な教育活動が、ここに一つの大きな結実を迎えました。本事業の完遂にあたり、多大なるご支援を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

本事業の狙いは、東北の未来とデジタルトランスフォーメーション（DX）を牽引し、グローバルな視座を持って社会に貢献できる人材を育成することにあります。この三年間、本校はカリキュラム開発校として、探究学習を深化させる科目の新設や、教科の枠を超えた横断的な学び、さらには国際社会で不可欠なコミュニケーション能力を養う学校設定科目の実践など、教育課程の抜本的な改革に取り組んでまいりました。特に、東北工業大学との連携による授業の先取り履修や、全校生徒による海外研修旅行の実施は、生徒たちが既存の枠組みを超えて「本物」に触れる貴重な機会となりました。

また、校内の改革に留まらず、広域的な人材育成ネットワーク「みらい東北 AL ネットワーク」を立ち上げ、台湾、東北各県および石川県の連携協力校と共に歩めたことは、本事業の大きな誇りです。「みらい東北国際サミット」では、各地区の高校生が地域の課題を自ら発見し、解決に向けた実践報告を行いました。企業や研究者の方々からいただいた専門的な助言は、生徒たちの志をより高いものへと昇華させ、その若き力と可能性を世界に向けて発信する絶好の場となりました。

震災や厳しい自然環境を乗り越えてきた東北の人々には、類まれな「粘り強さ」があります。その美德に、DXやAIといった先進テクノロジーの知見、そして他者を思いやる心を掛け合わせることで、二十年後、三十年後の日本や世界を支える資質能力を育むことができたと確信しております。ここで育った人材や地域がコンソーシアムとして繋がり、化学反応を起こすことで、より豊かな未来を創る起爆剤となることを願って止みません。

指定期間は終了いたしますが、本ネットワークの活動は今後も継続してまいります。運営指導に携わっていただいた皆様、そして共に歩んだ各校の先生方に改めて感謝申し上げますとともに、今後も共に「東北の力」を世界へ発信し続けていくことを誓い、巻頭の言葉といたします。

仙台城南高校 校長 伊藤 俊

## 目 次

【1】 本校概要 .....	1
【2】 研究開発概要 .....	2
【3】 概念図 .....	5
【4】 令和7年度活動について .....	6
(1) 探究ミニカレッジ（総合進学コース2学年探究Ⅰ）	
(2) 探究Ⅰ フィールドワーク 第1回	
(3) 第59回 宮城県高等学校 国際理解生徒研修会	
(4) 夏季課外講習の取り組み	
(5) SDGs DAY（2年生）	
(6) SDGs DAY（1年生）	
(7) 第60回 国際理解に関する弁論大会 兼 第72回 国際理解・国際協力のための高校生的主張コンクール宮城県予選	
(8) サステナブル・ブランド国際会議 学生招待プログラム 第5回 SB Student Ambassador 東北ブロック大会	
(9) 探究インターンの活用	
(10) D×フォーラム 2025 への参加	
(11) アメリカ合衆国 デラウェア州 ドーバー高校とのオンライン交流	
(12) 探究Ⅰ フィールドワーク 第2回	
(13) 広瀬川1万人プロジェクト全員参加	
(14) 総合進学コース2学年 研修旅行（台湾）	
(15) WWL 全国高校生フォーラム 参加	
(16) 探究ポスター発表会	
(17) みらい東北高校生国際サミット 開催	
(18) アメリカ合衆国 デラウェア州 スタディツアー 参加	
【5】 GCP（グローバルコンピテンスプログラム）3年間のまとめ .....	2 2
【6】 高大連携公開講座（先取り履修） .....	2 3
【7】 みらい東北ALネットワーク会議 .....	2 5
【8】 生徒実行委員会 .....	3 0
【9】 連携校・拠点校 探究活動報告 .....	3 4
【10】 みらい東北高校生国際サミット .....	1 1 4
【11】 令和7年度 WWL に関するアンケート結果 .....	1 8 1
【12】 WWL 事業3年間の成果 .....	1 8 7
【13】 WWL 事業3年間の総括 .....	1 9 6
【14】 カリキュラムアドバイザーからの報告 .....	1 9 9
【15】 あとがき .....	2 0 0
【16】 御礼 .....	2 0 1

# 1. 本校概要

本校は、昭和 36 年に「東北電子工業高等学校（電子工学科・無線通信科）」として創立されてから 50 有余年、この間に「東北工業大学電子工業高等学校（電子科・普通科）」、「東北工業大学高等学校」と改名し、その伝統を引き継ぎ、平成 25 年度に特進科・探究科（普通科）と科学技術科（工業科）に改編、校名も「仙台城南高等学校」へと改名した。その基本理念は、『大学と接続した新しい学びの創造』。持続可能な社会づくりに対する課題意識と学習動機を喚起し、また個々の学習進度・理解度に応じた学習機会を提供するために、グローバル教育と ICT 教育を推進し、国際競争社会と知識基盤社会を生き抜く人材を育成することを目指す。

## 普通科

- ・特別進学コース（スーパーコース：25 名×1 学級、アクティブコース：25 名×1 学級）

大学入試を意識したハイレベルな授業等で、国公私立の難関大学や国公立大学への現役合格を目指す。スーパーコースでは、平日 7 時間授業を行い、土曜日や夏期・冬期・春期休業中には、1 日 6 時間の授業を実施し進度を早め、3 年次での入試問題演習を豊富に行う。アクティブコースでは、土曜日や休業中には課外講習を実施するが部活動参加を認め、両立を目指す。平日は 7 時間授業を実施。

両コースともに、朝と放課後に小テストを実施し日々知識の定着をはかり、また、定期的な 2 者面談により、一人ひとりの進路実現に向けたきめ細やかな指導を行う。

- ・総合進学コース（35 名×5 学級）

大学進学を目標とした教科指導を行いながら、各教科で学んだ知識・技能を活用し、自ら見つけた社会課題の解決に向けて主体的・協働的に取り組む「探究型学習」に重点を置くコースである。タブレット端末（iPad）を活用した ICT 教育やグローバル教育にも力を入れており、3 年次から選択する「サイエンス系」「生活デザイン系」「健康・福祉系」「教育・地域系」の 4 つの系では大学の学びを先行した授業も展開する。これらを通して「自ら学びに向かう姿勢」「人と人をつなぐ力」「将来への高い志」を育み、世界と未来をイメージしながら、地域でみんなのために活躍できる人材を目指す。

## 科学技術科

工業科として大学への進学に加え、公務員試験や民間就職にも対応している。カリキュラムは、7 年間の学びを意識して組まれており、東北工業大学の教員・施設と接続した多様な教育実践は、最先端の科学技術の基盤となる実力を身に付けられる内容になっている。そして、大学進学後の学びの幅を大きく広げることができる。2 年次から選択する「電子機器」「情報通信」「デザイン」「電気エネルギー」の 4 コースでは、専門的な技術の修得と資格の取得を可能にし、理工系に限らず、幅広い分野の大学進学と就職の両面を支援している。

## 2. 研究開発概要

## (1) イノベーティブなグローバル人材像

今、地球社会では、気候変動に象徴されるように人類の持続可能性が危機に瀕しており、科学技術の発展の成果をいかにして地球社会の持続可能性の回復につなげていけるかが、国家や地域の枠組みを越えた喫緊の共通課題となっている。加えて、私たちの住む東北地方では、東日本大震災からの復興や超高齢社会への対応など、地域レベルにおける持続可能性の危機にも直面している。これらの諸課題に対して、とくに科学技術やデータサイエンスの活用により、それぞれの地域を持続可能な社会へと近づけていくことが、県の枠を超えた東北地方全体に共通する目指すべき方向性となっている。

本事業は、管理機関及び拠点校を中心に、東北地域で持続可能な社会を見据えた先進的な学びを実践している高校や、持続可能性について情報交換できる海外の高校・大学などと連携し、『みらい東北ALネットワーク』を構築し、東北から世界へ、自分なりの持続可能な社会へ向けた考えを発信できる人材の育成を目的とする。また、その人材育成に向けて具体的に以下に掲げた3つの力を養う。

- ① サステナブルな視点から社会の課題を見つけ、解決に向けて協働し、未来の創造者として社会に貢献し続ける力
- ② 人工知能やデータサイエンスの基礎的な素養を身につけ使いこなす力
- ③ 東北に根ざした豊かなアイデンティティとグローバルな視野で新しい価値を創造し、世界に発信する力

## (2) ALネットワークの目的と役割

事業拠点校では、事業協働機関である東北工業大学との連携によって高校段階から生徒にデータサイエンスの基礎に触れさせ、またSDGsと結びつけた探究活動と教科学習の双方により社会の課題改善に対する考察を深めさせたうえで、東北地方の各高校とともに、将来における東北地方の持続可能な発展を担える人材育成を目指す。その際、異なる学校や組織が「サステナブルな東北の実現」というビジョンを共有し、互いに触発し合いながら緩やかなネットワークをつくり、連携の過程を通してつながりを強化していく Social Capital（社会資本）の理念を基盤にしたい。

以上の目的から、以下の3つのネットワークで構成される『みらい東北ALネットワーク』を構築したい。

### (2) -1 東北地方の高等学校との連携 (School Social Capital)

【目的：探究成果報告会による連携校の探究活動の充実】

「みらい東北のサステナビリティ」をテーマとして設定し、各連携校と共有したうえで、連携校それぞれの地域性や特色を生かした課題設定と持続可能な解決に向けた探究学習を進める。その際、とくにデータサイエンスの成果を東北地方の諸課題の改善につなげていけるようなアイデアを生かした探究活動も追究する。さらに、各校の探究活動の成果をプレゼンテーションする機会として、県内・県外の連携校との合同による探究成果報告会を実施する。

## (2)－2 海外の高校・大学との連携 (Global Social Capital)

### 【目的1：オンラインでの意見交流】

D Xが推進されている台湾の高校生との議論を通し、探究活動の成果を深める。

### 【目的2：高校生国際会議『みらい東北高校生国際サミット』の開催】

3年後を目標として、研究成果を意見交換する『みらい東北高校生国際サミット』を開催する。拠点校からは課題解決のアプローチとして、D Xの視点を重視したアイデアを提言し、全参加校による共同宣言の発信を目指す。

## (2)－3 地域社会（企業、行政等）との連携 (Local Social Capital)

### 【目的1：先進的な企業・大学等からの探究活動への助言】

県内においてすでに持続可能性やD Xを追究している企業や大学、行政機関等から、『SDGs DAY』の企画や探究活動発表会において直接指導を受ける。また、探究のフィールドワークにおける取材を通して、生徒に先進的な取り組みを直接学ばせる。

### 【目的2：高校生国際会議『みらい東北高校生国際サミット』への参加】

連携する地域企業にも『みらい東北高校生国際サミット』への参加を依頼し、学校と企業がともに持続可能な社会を目指す「Local Social Capital」の形成を目指す。

## (3) 短期的、中期的及び長期的な目標

『みらい東北ALネットワーク』の形成と管理運営、カリキュラム開発等に関する事業期間(3年間)の主な計画と短期・中期・長期的な目標は以下の通りである。

### (3)－1 事業期間の主な計画と短期的目標

1年目	2年目	3年目
連携校との『みらい東北高校生国際サミット』の準備	『みらい東北高校生国際サミット』のプレ開催	『みらい東北高校生国際サミット』の開催
連携校間の探究成果報告会の準備とプレ実施	連携校間の探究成果報告会の実施	連携校間の探究成果報告会の定期化
企業・大学との連携づくり	企業・大学との連携事業開始	企業・大学との連携の強化
D X & G X 教育開講科目受講システムの構築	拠点校内での開講科目受講システムの実施	受講システムを連携校間で共有
海外留学と海外大学進学システムの構築	拠点校内での海外留学と海外大学進学システムの実施	海外留学と海外大学進学システムを連携校間で共有

### (3)－2 中期的目標 (3～5年)

3年目に開催する『みらい東北高校生国際サミット』を充実させ、連携校・大学・企業・海外団体が全てそろった開催を5年後までに目指す。加えて連携校間のカリキュラム・マネジメント報告会を企画し、教員間の連携も強めていきたい。

### (3)-3 長期的目標（5～10年）

『みらい東北ALネットワーク』の各 Social Capital の実践を東北全域に発信し、連携校以外の学校にも共有していきたい。また、『みらい東北ALネットワーク』と他地域のALネットワークが連携したワークショップの開催を目指したい。

本事業1年目は、AL ネットワーク作りを目標に行った。5月のオンラインによるキックオフミーティングで拠点校と連携校の担当者、検証委員、運営委員、カリキュラム委員との顔合わせを行った。その後6月に対面での会議を行った。年間を通して、オンライン会議を3回、対面での会議を2回開催し、主に3年後に開催する『みらい東北高校生国際サミット』を見据えた「みらい東北高校生プレサミット」開催に向けて話し合った。連携校によって探究活動の進捗や扱うテーマが異なっているため3月に予定している今年度のプレサミットでは、DXについての研究発表がやや弱いという印象である。次年度以降は、プレサミットテーマを早めに設定しテーマに沿った発表を行う準備を進めたい。

### 3. 概念図

# 仙台城南高校 WWLコンソーシアム 構想概要

## みらい東北のサステナビリテイとDXを牽引する人材育成ネットワーク

### 管理機関の構想

#### 短期目標 【1～3年】

- 「みらい東北高校生国際サミット」の開催
- 連携校内のDX&GX教育関係科目受講システムの構築
- 連携校間の研究結果報告会の定期実施
- 各企業・大学との連携の明確化
- 海外研修とオンライン交流の定期実施
- 海外留学と海外大学進学システムの構築

#### 中期目標 【3～5年】

- 連携校・大学・企業・海外団体がそろった「みらい東北高校生国際サミット」の開催
- 連携校間のカリキュラム・マネジメントの報告会を実施
- それぞれのSocial Capitalの高さを東北全域に発信

#### 長期目標 【10年】

- みらい東北ALネットワークの実践を東北全域で共有
- みらい東北ALネットワークと他地域のALネットワークが連携したワークショップの開催

### 拠点校のこれまでの取り組み

- 文理融合型カリキュラムの実施
- SDGs DAYによる教科横断型授業
- 地域と連携した探究活動
- KJ協議会による高大連携（テクノフォーラム、サマースクール、アカデミック・インタラクションシップ）
- 仙台市立大附属高校との姉妹校交流
- 国立台南大学附属高専とオンライン交流
- 台湾研修旅行

### 拠点校のカリキュラム開発構想

#### 仙台城南高校

#### 探究 フィールドワーク

#### 教科横断型授業 学校設定科目 課外活動

#### 高大連携

#### 1年生

「自己と多文化社会を見つめる」

#### ライフデザイン プログラム

#### 「グローバルコンピテンシスⅠ」 SDGs DAY「プラスチックスマート」

テクノフォーラム（大学見学＋特別講座）  
サマースクール（大学での研究を一日体験）

#### 2年生

「グローバル社会と学びをなげろ」

#### SDGs 地域リサーチ プロジェクト

#### 「グローバルコンピテンシスⅡ」 SDGs DAY「フードドライブ」 台湾研修旅行

探究  
ミニレレッジ  
（年間分時別  
出前講座）

#### 3年生

「サステナブル社会へ踏み出す」

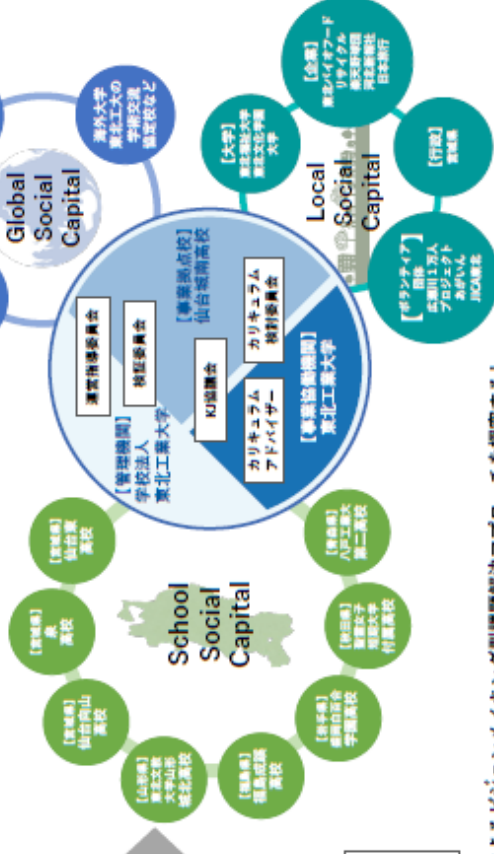
#### SDGs 地域アイデア プロジェクト

#### 「グローバルコンピテンシスⅢ」 情報演習（AIプログラミング入門） みらい東北高校生国際サミット

教科「探究」（大学の学びを先取り）  
DX&GX連携授業  
（人工知能講座）  
DX&GX連携授業  
（MATLAB実習）

### みらい東北ALネットワーク

※ Social Capitalとは、「信頼」「規範」「規範」【ネットワーク】といった社会関係の総称であり、共通の目的に向かって協働行動を促すものを指す。



「私たちは未来を変えられる！」

## 4. 令和7年度活動内容

今年度のWWLとしての活動は以下の通りである。

	月	活動内容
(1)	5	探究ミニ・カレッジ（総合進学コース2学年探究I）
(2)	5	探究I フィールドワーク 第1回
(3)	7	第59回 宮城県高等学校 国際理解生徒研修会
(4)	7	夏季課外講習の取り組み
(5)	8	SDGs DAY（2年生）
(6)	8	SDGs DAY（1年生）
(7)	9	第60回 国際理解に関する弁論大会 兼 第72回 国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール宮城県予選
(8)	10	サステナブル・ブランド国際会議 学生招待プログラム 第5回 SB Student Ambassador 東北ブロック大会
(9)	10	探究インターンの活用
(10)	10	DXフォーラム2025への参加
(11)	10	アメリカ合衆国 デラウェア州 ドーバー高校とのオンライン交流
(12)	11	探究I フィールドワーク 第2回
(13)	11	広瀬川1万人プロジェクト全員参加
(14)	11	総合進学コース2学年 研修旅行（台湾）
(15)	12	WWL 全国高校生フォーラム 参加
(16)	3	探究ポスター発表会
(17)	3	みらい東北高校生国際サミット 開催
(18)	3	アメリカ合衆国 デラウェア州 スタディツアー 参加

### (1) 探究ミニ・カレッジ（総合進学コース2学年探究I前期）

- ①実施日：毎週（金）5校時・6校時
- ②場 所：仙台城南高等学校
- ③参加者：仙台城南高校普通科総合進学コース2年
- ④内 容：大学の先生方からさまざまな学問分野の講義を聞くことにより、各学問分野における最先端の状況や学問分野と社会とのつながりについて考察させる。また、レポート作成を通して、小論文や総合型入試に対応できる要約力を鍛え、小論文作成の基礎を養う。5校時に講義（50分）を受講し、6校時にレポートを作成する。



図1：講義の様子



表1 講師・講義内容



図2：受講の様子



	実施日	学問分野	大学・学部・学科	講 師	講義テーマ
1	4/18 (金)	医工学・バイオ	東北工業大学 電気電子工学課程	辛島 彰洋	医療や健康福祉に役立つ生態を調べる研究の紹介
2	4/25 (金)	ネット・デバイス	東北工業大学 情報通信工学課程	鈴木 健一	コンピュータ メモリシステム キャッシュメモリ
3	5/16 (金)	建築	東北工業大学 建築学科	そう びょう 曹 森	人工知能技術を活用した 建築パースの作成
4	5/23 (金)	環境・化学	東北工業大学 環境応用化学課程	丸尾 容子	化学のおもしろさ
5	5/30 (金)	産業デザイン	東北工業大学 産業デザイン学科	梅田 弘樹	産業デザイン分野の学び
6	6/ 6 (金)	チーム医療	東北文化学園大学 リハビリテーション学科	藤澤 宏幸	医療に関わる職種と働きがい
7	6/13 (金)	地域包括ケア システム	東北文化学園大学 看護学科	結城 美智子	地域包括ケアシステムと看護
8	6/27 (金)	都市・まちづくり	東北工業大学 都市工学課程	近藤 祐一郎	都市と環境
9	7/ 4 (金)	経済・経営	東北福祉大学 共生まちづくり学科	品田 誠司	アニメでまちづくり
10	7/11 (金)	教育	東北福祉大学 教育学科	和 史朗	教育の世界
11	8/29 (金)	国際・インバウンド	東北工業大学 経営デザイン学科	亀井 あかね	国際インバウンド 経済・政策の視点から
12	9/12 (金)	健康・スポーツ	東北工業大学 総合教育センター	高野 淳司 本田 春彦	ポッチャの実技
13	9/26 (金)	住環境デザイン	東北工業大学 生活デザイン学科	谷本 裕香子	住まいとまちのユニバーサルデザイン

### ⑤振り返り

今年度3年目の企画になり、今年も東北工業大学関係者の多大なるご支援と迅速な対応をいただき、現代世界の諸課題に多彩な視点からアプローチする連続講義を受講させることができた。次年度以降も継続的に実施することにより、今後の探究活動や進路選択の基盤となる「学問や世界に対する知的好奇心」を育てていきたい。

## (2) 探究Ⅰ フィールドワーク 第1回

①実施日：5月21日（水）

②場 所：NPO 法人団体・地域団体

（八木山市民センター、のびすく泉中央、八木山児童館、スペシャルオリンピックなど）

③参加者：普通科総合進学コース2年

④内 容：「社会貢献はなぜするの？」というテーマのもと、実際に地域の課題に対して主体的に活動している団体の取り組みやその意義を理解するため、自らが選んだNPO 法人団体・地域団体の活動場所にフィールドワークを行った。この活動を通して、生徒たちは無償で他人に貢献することや社会での自分の存在意義について他者の考えに触れ、社会貢献と働くこととのつながりについて深く考え、自発的に社会に参画していこうとする態度を身につけることができた。また後日、このフィールドワークで得たことをまとめ、ポスター発表を実施した。



図3：読み聞かせボランティア活動を体験する生徒の様子

## (3) アメリカ デラウェア州 ポリテック高校とのオンライン交流

①実施日：5月18日（土）

②場 所：仙台城南高等学校 1年2組教室

③参加者：普通科総合進学コース2年15名手・教員1名

Polytech 高校生徒6名・教員3名

④内 容：互いの自己紹介から始まり、次にポリテック高校からの質問に本校生徒が答えるかたちで進めた。参加生徒からは「少しずつ英語を話すことに慣れてきた」「相手が話す英語が少し聞き取れた」との感想があった。



図4：オンライン交流の様子



図5：オンライン交流の様子

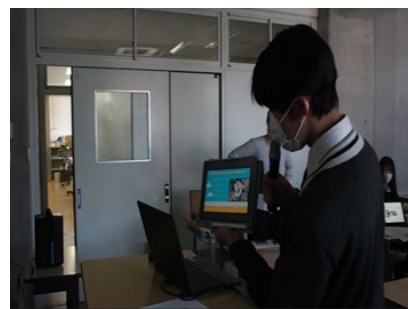


図6：オンライン交流の様子

#### (4) 第 59 回 宮城県高等学校 国際理解生徒研修会

- ①日時：7月19日（土）
- ②場所：聖和学園高等学校
- ③参加者：普通科総合進学コース1年1名・2年2名 宮城県内高校生
- ④内容：県内13校から56名の高校生が参加した。本校からは、普通科総合進学コース1年1名、総合進学コース2年2名が参加した。第1部は、富谷高校の卒業生で現在秋田大学国際資源学部4年の高橋渚生氏による「英語、世界、そして“自分らしさ”へ」と題しての講演があった。第2部は、模擬国際会議のワークショップが行われ、生徒たちは各国のリーダーとなり、国際情勢を踏まえた貿易や協力などの国家間交渉を体験した。

#### (5) 夏季課外講習での取り組み

- ①実施日：7月22日（火）～ 25日（金）
- ②場 所：仙台城南高等学校会議室
- ③企業訪問場所：東京エレクトロン宮城・ラピスセミコンダクタ宮城
- ④参加者：普通科総合進学コース1年64名・2年20名
- ⑤内 容：株式会社マイナビ、経済産業省東北経済産業局にご協力いただき、講演・企業訪問、プレゼンテーション資料作成・大学の先生へのアイデア発表という「探究活動」に特化した4日間の夏季課外講習を企画・実施した。

テーマは「業界探究～半導体から学ぶ～」とし、半導体の基本知識や今後の展望や課題について触れ、企業がどのような社会課題を背景に仕事に取り組んでいるのか、社員が今の企業で働くまでにどのような進路を進んできたのかなど、実施に働いている大人の仕事への向き合い方について知る機会となった。また、半導体の今後の活用アイデアをまとめ、金沢工業大学情報理工学部情報工学科の中沢実先生にオンラインで発表し、アドバイスをいただいた。



図7：プレゼン資料を作る様子



図8：オンラインで大学の先生から助言をいただいている様子

## (6) SDGs DAY

< 2 学年 >

「SDGs DAY」特別授業+講演

- ①実施日：8月28日（木）
- ②場 所：仙台城南高等学校  
各教室 アリーナ
- ③参加者：普通科総合進学コース2年
- ④内 容：

- A 共通SDGsの目標を題材に各教科で学習する。
- B 東北工大の先生や外部の専門家からの共通のSDGsの目標を題材とした講話を聴講する。
- C 高大7年間を通した学びの可視化につなげる。



**フードドライブ**  
 世界と日本のフードロスの現状  
 世界と日本の貧困の現状  
 フードドライブの取り組み  
 子ども食堂等への寄付について など

図9：共通SDGsの目標

表2：8月28日普通科総合進学コース2年 時間割

	2-4	2-5	2-6	2-7	2-8
1校時	論理国語	家庭基礎	体育	数学Ⅱ	数学Ⅱ
2校時	英語CⅡA	英語CⅡA	数学Ⅱ	家庭基礎	化学基礎
3校時	数学B	数学Ⅱ	英語CⅡA	化学基礎	英語CⅡA
4校時	物理/生物/日本史探究			GP	文学国語
5校時	宮城大学 食産業学群 丹治朋子 准教授 講話 「海外と日本のフードロスの現状とフードドライブの取り組み事例」				
6校時	ふうどばんく東北あがいん 理事 高橋尚子さん 講話 「ふうどばんく東北あがいんの活動とこれから」				
7校時	フードバンク作成 + 感想文「SDGs DAYを通して学んだこと」				



図10：授業風景（物理）



図11：宮城大学丹野朋子氏による講演



図12：食品回収ボックス作成体験実施

## (7) SDGs DAY

< 1 学年 >

「SDGs DAY」特別授業+講演

- ①実施日：8月30日（金）
- ②場 所：仙台城南高等学校  
各教室 アリーナ
- ③参加者：普通科総合進学コース1年
- ④内 容：

- A 共通SDGsの目標を題材に各教科で学習する。
- B 東北工大の先生や外部の専門家からの共通のSDGsの目標を題材とした講話を聴講する。
- C 木のストロー作成を体験する。



14 海の豊かさを守ろう



6 安全な水とトイレを世界中に



12 つくる責任 つかう責任

**海洋プラスチック・マイクロプラスチック**  
 海洋プラスチックの原因や現状  
 プラスチックごみの削減  
 プラスチックリサイクル  
 プラスチックを利用したサービス見直し など

図 13：共通SDGsの目標

表 3：8月30日普通科総合進学コース1年 時間割

	1-2	1-3	1-4	1-5	1-6
1校時	生物基礎	物理基礎	GCP	情報I	公共
2校時	英語CIA	数学A	現代の国語	公共	英語CIA
3校時	現代の国語	英語CIA	保健	生物基礎	生物基礎
4校時	東北工業大学 工学部 環境応用学科 山田教授 講話 「海洋プラスチック問題と私たちの行動 ～水環境保全の視点から～」				
5校時	広瀬川1万人プロジェクト 事務局 谷田貝さん 講話 「広瀬川1万人プロジェクトの取り組みと広瀬川の生態系」				
6校時	木のストロー作成体験 + 感想文「SDGs DAYを通して学んだこと」				



図 14：授業の様子



図 15：木のストロー作成体験

## (8) 第 60 回 国際理解に関する弁論大会 兼

### 第 72 回 国際理解・国際協力のための高校生の主張コンクール宮城県予選

- ①日時：9月2日（火）
- ②場所：富谷高等学校 人文講義室
- ③参加者：普通科総合進学コース2年生1名・宮城県内高校生
- ④内容：本校からは、総合進学コース2年新沼恵瑠さんが参加し「あなたが国連の総会議場で自由にスピーチすることができるとしたら、何を訴えるか。一心を整えること―」というテーマで発表し、公益財団法人仙台観光国際協会賞を受賞した。スピーチでは、「履き物を揃えれば心も揃う」ということわざを取り上げ、人それぞれの価値観や違いを尊重し、周囲と調和しようとする姿勢につながることを述べた。また、1月のシンガポール研修や生徒会での活動を例に、多様な人々が集まる社会においても、お互いを思いやり、心を揃えることで温かいつながりが生まれると訴えた。



図 16：大会参加生徒の様子

## (9) サステナブル・ブランド国際会議 学生招待プログラム

### 第 5 回 SB Student Ambassador 東北ブロック大会

- ①実施日：10月4日（土） 9:30～17:30
- ②場 所：東北工業大学 9号館
- ③参加者：宮城県・青森県・岩手県・秋田県・山形県・福島県の計 22 校から 123 人が参加
- ④内 容：基調講演として、ヘラルボニーの ISAI PARK 店長である大田雄之介さんから障害を「異彩」とポジティブに定義し、福祉を起点とした新たな文化の創造を目指す取り組みを紹介していただき、独自のアイデアと活発な取り組みで持続可能な社会づくりを牽引している人物の考えに触れた。また、昨年度の同大会に参加した古川学園高等学校の生徒2名からこの1年間の「文房具バンク」の取り組みについて成果報告を聞き、高校生の立場からでもサステナブルな活動を通して社会に発信できることを学んだ。その後、テーマ別プログラムでは「地域のサステナビリティ推進に向けて、私たちにできること」「高校生が将来にわたり地元で暮らしたくなくなる地域づくり」「地域の魅力を再発見し、その魅力を伝える方法」の3テーマに分かれ、各協力企業からの講演後、学校混合の4人グループになってディスカッションを行った。ディスカッション内容をテーマ別で各グループ発表を行った後、全体で集まって各テーマのグループ代表が発表することで各テーマの内容を共有した。



図 17：テーマ別に作業する参加生徒の様子



図 18：サステナブル・ブランド国際会議 参加生徒

### (10) 探究インターンの活用

- ①実施日：10月中旬 ～ 11月初旬
- ②場 所：仙台城南高校
- ③参加者：普通科総合進学コース2年5名
- ④内 容：朝日新聞社と博報堂が企業や団体と連携して探究学習を支援するサービス「探究インターン」を本校2年生の「探究Ⅰ」のゼミ活動内で試行実施した。この「探究インターン」というプログラムはオンラインで企業と生徒を結び、双方向的に学ぶ機会を提供するものである。また、企業から提供される社会貢献の事例などをもとに、その企業の持つ価値や長所から考えられる生徒たちなりの新たな社会貢献アイデアを提案し、そのアイデアを他校の生徒とも共有することができる。これにより、生徒は教室にいながら、学校外の様々な考えに触れることができ、体験的にDXを学ぶことも可能である。今回は通信トラブル等もあり、双方向でのやり取りはできなかったものの、企業からアイデアへの丁寧なアドバイスをいただき、とても有意義な機会となった。

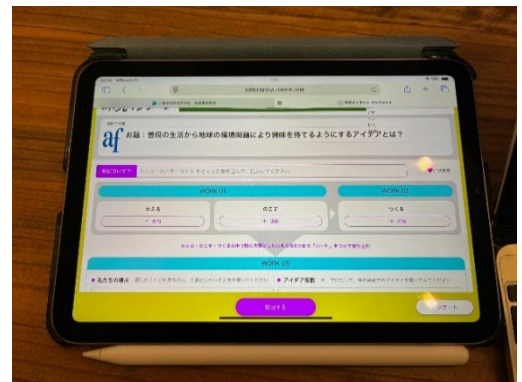


図 19：探究インターンのソフト画面

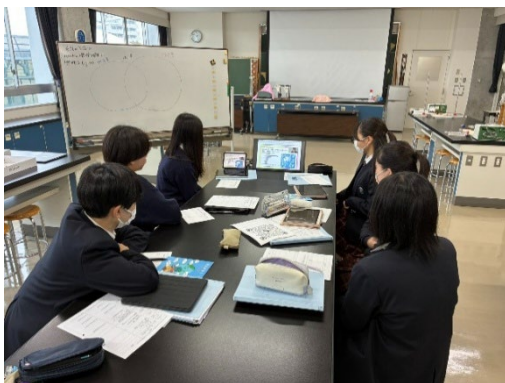


図 20：企業の事例紹介を聞く生徒の様子

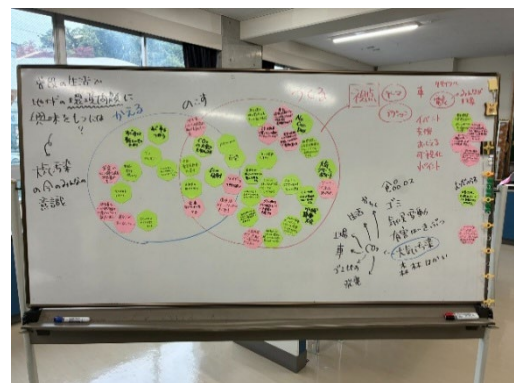


図 21：生徒のアイデアをまとめたホワイトボードの様子

## (11) DXフォーラム 2025 への参加

- ①実施日：10月23日（木） 10:00～17:00
- ②場 所：フォレスト仙台
- ③参加者：普通科総合進学コース2年生10名
- ④内 容：各企業が提供している先進的なAIソリューションの体験を通して、DXへの理解を深め、今後の社会課題解決のきっかけとするイベントに本校生徒が参加した。様々な業界のDX化を推進する事例の紹介や実施にAIソリューションに触れ、体験することで科学技術の先端に触れ、今後のDX化のイメージを膨らませる良い機会となった。

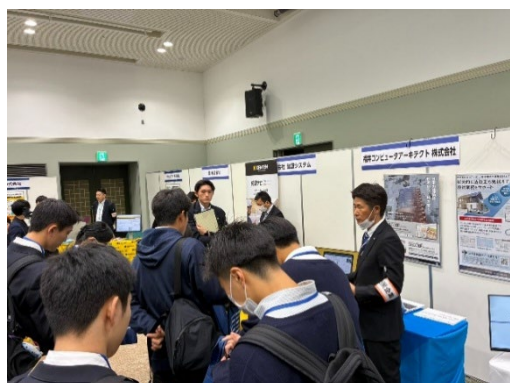


図 22：最新AI技術の説明を受ける生徒の様子



図 23：最新の電子黒板に触れる生徒の様子

## (12) アメリカ デラウェア州ドーバー高校とのオンライン交流（角田高校と合同実施）

- ①実施日：10月25日（土）
- ②場 所：仙台城南高校1年2組教室
- ③参加者：普通科総合進学コース1年2名 2年4名
- ④内 容：一昨年から継続しているアメリカ デラウェア州ドーバー高校とのオンライン交流を実施した。

交流の冒頭では、ドーバー高校の生徒から現地の文化紹介に関するプレゼンテーションが行われ、本校の生徒たちはその内容について英語で熱心に質問を投げかけた。特にファッションやゲーム、アニメといった共通の話題で大きな盛り上がりを見せ、開始直後は緊張していた本校の生徒たちも、次第に打ち解けていく様子が見て取れた。交流の終盤には、自分の伝えたいことを何とか相手に届けようと、学んだ英語を駆使して懸命にコミュニケーションを図る姿が印象的だった。このような草の根の交流が、生徒たちの国際感覚と発信力を養う貴重な機会となっている。



図 24：交流時の生徒の様子

### (13) 探究Ⅰ フィールドワーク 第2回

- ①実施日：11月7日（金）～ 2月下旬
- ②場 所：企業・専門学校・大学
- ③参加者：普通科総合進学コース2年
- ④内 容：今の大学で行っている学問別の研究や企業での取り組みにも触れながら、自分だったらこんな地域貢献・社会貢献をしてみたいというアイデアを考えてみる。この経験を通して、卒業後の進路でも主体的に地域貢献・社会貢献を提案し、実行していく姿勢を身につける。

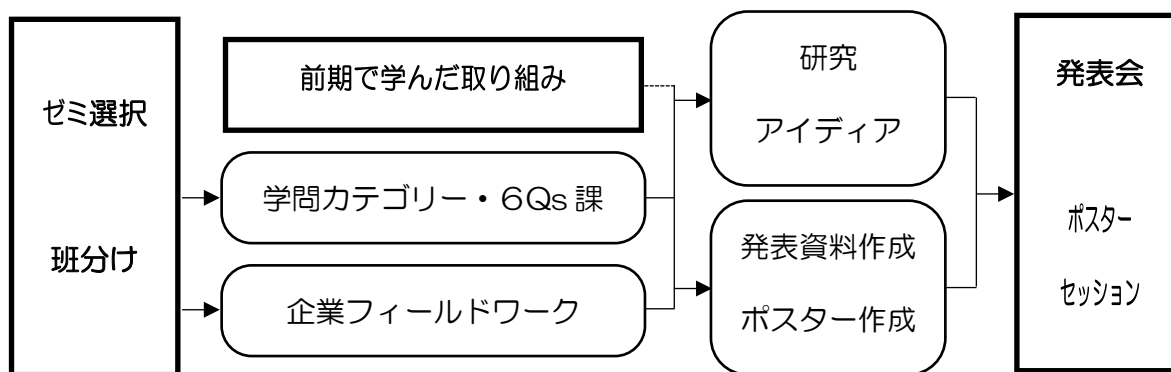


図 25：地域アイデアプロジェクトの流れ

### (14) 広瀬川1万人プロジェクト全員参加

- ①実施日：11月8日（土）
- ②場 所：広瀬川広瀬橋付近
- ③参加者：普通科総合進学コース1年
- ④内 容：
  - A SDGs 達成に向けた行動の実践（ゴミ拾い）を通して広瀬川付近のまちや自然の様子を観察する。
  - B ボランティアと一緒に参加している地域の方々と協力して作業する。



図 26：広瀬川1万人プロジェクト参加の様子

### (15) 総合進学コース2学年 研修旅行

- ①実施日：11月26日（水）～ 11月30日（日）
- ②場 所：台湾
- ③参加者：普通科総合進学コース2年
- ④内 容：班別自主研修・SDGs学習・市内視察・自主研修学校交流（国立台北科技大学）  
本校生徒33名と台北科技大学生13名がアイスブレイクやジェスチャーゲーム・インタビューなどで1時間程度の時間を過ごし、英語でコミュニケーションを取った。



図 27：SDGs 学習の様子



図 28：学校交流の様子



図 29：九份観光での観光の様子

### (16) WWL 事業 全国高校生フォーラム

- ①実施日：12月21日（土）
- ②場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター
- ③参加者：普通科特別進学コース1年2名・総合進学コース1年2名
- ④内 容：WWL及びSGHネットワークに参加する高校生が一同に会し、日ごろ取り組んでいるグローバルな社会課題の解決方法や提案等を英語でプレゼンテーションするとともに、生徒交流会にて英語でディスカッションを行った。本校は、「インクルーシブ教育」について発表した。ポスター作成に向けて、生徒たちは教師や生徒へのインタビューを通して課題を探った。生徒自身で「ピクトグラム」を作成し、互いの違いを受け入れながら共に成長できる学級づくりや学校文化の形成へ向けて提案を行った。

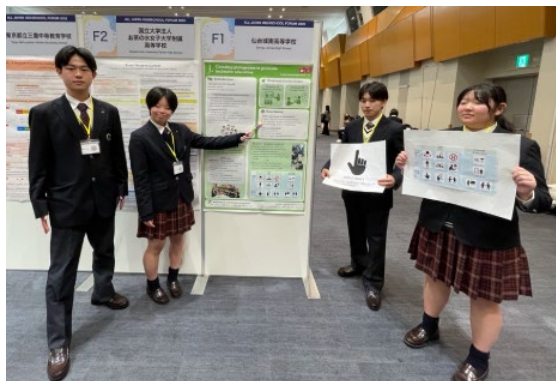


図 30：生徒の発表の様子

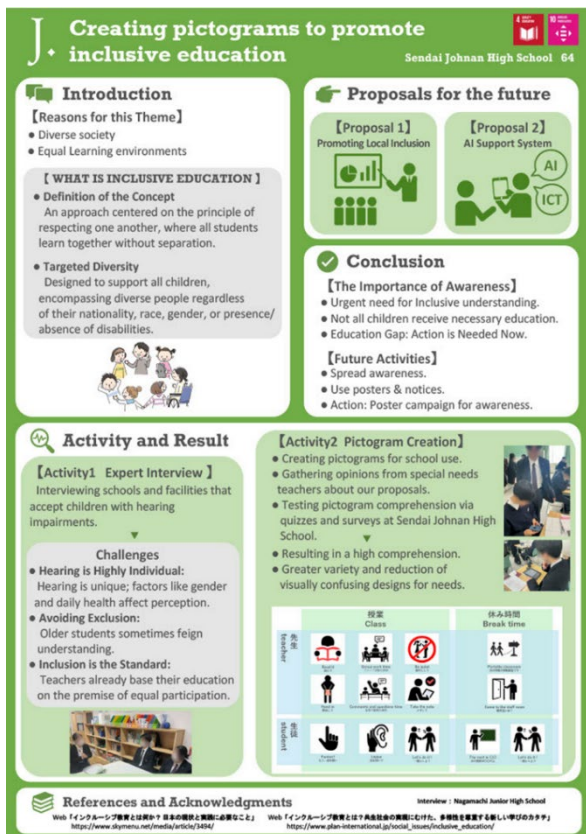


図 31：本校生徒の発表ポスター

### インクルーシブ教育

現在、学校現場では障がいのある生徒や外国にルーツを持つ生徒が、十分に学びに参加できない場面もあります。そうした課題を解決するために、誰もが安心して意見を言い合い、互いの違いを理解できる学習環境を目指します。私たちは、教師や生徒へのインタビューを通して、課題を探り、実際の声を反映した ICT 教材を提案し、互いの違いを受け入れながら共に成長できる学級づくりや学校文化の形成へとつなげていきます。

### Inclusive Education

Currently, in many schools, students with disabilities or those from foreign backgrounds sometimes face barriers that prevent them from fully participating in learning activities. To address these challenges, we aim to create an inclusive environment where everyone feels safe to express opinions, share ideas, and appreciate each other's differences. Through interviews with teachers and students, we will identify real issues in classrooms and use these findings to develop ICT-based teaching materials that reflect diverse voices. Through these efforts, we hope to foster understanding, cooperation, and a positive school culture in which all students can learn and grow together.

図 32：本校生徒の発表概要

## (17) 探究ポスター発表会

- ①実施日：3月12日（木）2～4校時
- ②場 所：仙台城南高等学校アリーナ
- ③参加者：普通科総合進学コース1年生167名・2年生160名/助言をいただいた先生（敬称略）

東北工業大学 情報通信工学課程	木戸 博 教授
東北工業大学 環境応用化学課程	多田 美香 准教授
東北工業大学 生活デザイン学科	中井 周作 講師
東北工業大学 経営デザイン学科	亀井 あかね 准教授
東北工業大学 建築学科	福屋 粧子 教授
東北工業大学 総合教育センター	小川 和久 教授
東北工業大学 総合教育センター	加藤 順一 教授
東北文化学園大学 リハビリテーション学科	鈴木 誠 教授
東北文化学園大学 看護学科	佐藤 大輔 講師

### ④内 容：

#### A 目的

「探究基礎」「探究Ⅰ」で調査してきたことをプレゼンテーション、ポスターセッション形式で発表し、様々な意見を交換することで、多面的に物事を見る力を養い、調査してきたことをより深く考える機会を作る。

## B ポスターセッションの流れ

各班の探究活動の内容をポスターにまとめ、アリーナに掲示した。発表・質疑応答・講評込み各班 10 分程度で進めた。質疑応答では、大学教員・担当教員から講評を頂いた。参加生徒は、適宜質疑応答を行いながら、疑問点や感想等を記した付箋を発表したポスターに張り付ける形でフィードバックし、今後の深まりにつながるようにした。加えて、生徒には他の班の発表を聞いて気になったことやよかったところなどを記入するワークシートを配布し、他者の発表から今後生かすことができる内容を記録させた。

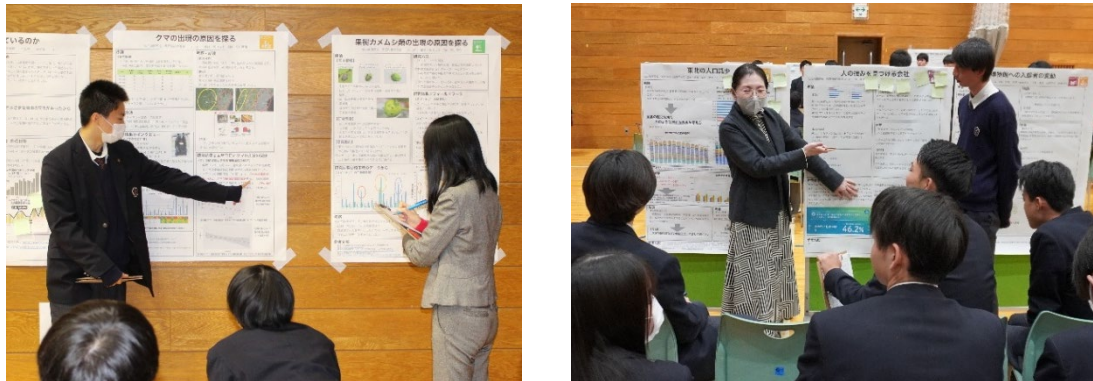


図 33：探究ポスター発表の様子

### (18) みらい東北高校生国際サミット開催

- ①実施日：3月13日（金）・14日（土）
- ②場 所：東北工業大学 八木山キャンパス 9号館（探究活動成果発表/ワークショップ）  
10号館（ポスター展示/各高校紹介）
- ③参加者：八戸工大第二高校・盛岡白百合学園高校・聖霊学園高校  
東北文教大学山形城北高校・福島成蹊高校・仙台向山高校・仙台東高校・泉高校  
仙台二華高校・金沢大学附属高校  
国立台南高級商業職業学校・台北市立大理高級中学校  
仙台城南高校（計13校）
- ④内 容：  
テーマ：未完成レール ～正解のない未来へ走る～  
実施方法：対面/オンライン  
全体司会：生徒実行委員会 副実行委員1名  
活 動：

1日目
2日目

 開会行事・生徒実行委員成果発表・探究成果発表  
ワークショップ・各学校紹介・ワークショップ代表発表・閉会行事



図 34：実行委員長の挨拶の様子



図 35：全体会の様子



図 36：台湾との高校とのやり取りの様子



図 37：分科会の様子

令和7年度  
みらい東北高校生国際サミット

日時 令和8年 3月13日(金) 13:00~16:00  
14日(土) 9:20~15:00

場所 東北工業大学 八木山キャンパス

**未完成レール**  
~正解のない未来へ走る~

**プログラム**

【1日目】  
開会式  
全国高校生フォーラム成果発表・情報交換  
仙台城高高等学校  
八戸工業大学第二高等学校  
盛岡白百合学園高等学校  
自衛隊立大津高専  
参加校の探究発表  
仙台城高高等学校、WWL参加校  
盛岡白百合学園高等学校、高等学校  
国立青森高専職業実践学校

【2日目】  
ワークショップ  
グループ発表  
閉会式

**WWL参加校**

仙台城高高等学校(青森) 八戸工業大学第二高等学校(青森) 盛岡白百合学園高等学校(岩手)  
盛岡白百合学園高等学校(岩手) 盛岡白百合学園高等学校(岩手) 盛岡白百合学園高等学校(岩手)  
盛岡白百合学園高等学校(岩手) 盛岡白百合学園高等学校(岩手) 盛岡白百合学園高等学校(岩手)

**協力**

東北工業大学 株式会社北新報 株式会社日本銀行東北  
JICA東北 株式会社東北バイオフードリサイクル

**問い合わせ**

仙台城南高等学校 グローバル教育推進部 022(305)2175

図 38：生徒作成のポスター

令和7年度  
みらい東北  
高校生国際サミット  
2026 3/13 (Fri) 13:00~16:00  
14 (Sat) 9:20~15:00

@東北工業大学  
八木山キャンパス

**未完成レール**  
~正解のない未来へ走る~

**プログラム**

【1日目】  
開会式  
全国高校生フォーラム成果発表・情報交換  
仙台城高高等学校  
八戸工業大学第二高等学校  
盛岡白百合学園高等学校  
自衛隊立大津高専  
参加校の探究発表  
仙台城高高等学校、WWL参加校  
盛岡白百合学園高等学校、高等学校  
国立青森高専職業実践学校

【2日目】  
ワークショップ  
グループ発表  
閉会式

**WWL参加校**

仙台城高高等学校(青森) 八戸工業大学第二高等学校(青森) 盛岡白百合学園高等学校(岩手)  
盛岡白百合学園高等学校(岩手) 盛岡白百合学園高等学校(岩手) 盛岡白百合学園高等学校(岩手)  
盛岡白百合学園高等学校(岩手) 盛岡白百合学園高等学校(岩手) 盛岡白百合学園高等学校(岩手)

**協力**

東北工業大学 株式会社北新報 株式会社日本銀行東北  
JICA東北 株式会社東北バイオフードリサイクル

**問い合わせ**

仙台城南高等学校 グローバル教育推進部 022(305)2175

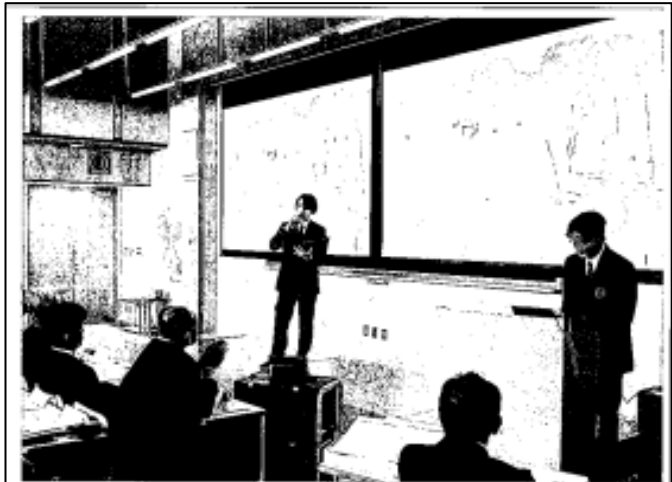
図 39：生徒作成のポスター

※みらい東北高校生国際サミット開催について、河北新報朝刊（3月14日付）に掲載されました。

**仙台で「東北高校生国際サミット」 22**



「みらい東北高校生国際サミット」が、仙台市の東北工大で始まった。仙台城南高が呼びかけ、東北6県や台湾の高校生らが環境問題など各校の探究の成果を報告した。



探究活動の成果を発表する高校生

# 高校生 環境問題を探究

## 仙台「国際サミット」で成果報告

高校生が社会の課題について意見を交わす「みらい東北高校生国際サミット」が13日、2日間の日程で仙台市太白区の東北工大で始まった。東北6県や台湾の高校生ら約170人が参加し、各校の探究活動を報告した。

八戸工大「高や盛岡白百合学園高、仙台城南高は、環境問題や外来種駆除などについて英語で成果を発表した。

八戸工大「高は、海洋汚染の要因のマイクロプラスチックをテーマに選んだ。地元海岸で採取した砂の分析や、マイクロプラスチックを海水から除去する取り組みを説明。2年の阿部楓磨さんは「八戸市は漁業や観光で海の恩恵を受けており、海洋汚染の解決が急務だ」と訴えた。

14日は科学、文化・教育、国際理解、まちづくりのテーマごとに、ワークショップを聞く。各グループで出された課題解決のアイデアを発表し合い、サミットの成果をまとめる。

仙台城南高は2023年度に文部科学省の「ワールド・ワイド・ラーニングコンソーシアム構築支援事

業」の拠点校に選ばれた。未来を担う人材の育成を目指し、24年から東北や海外の高校生に呼びかけてサミットを開いている。

（長門 紀穂子）

**(19) アメリカ合衆国 デラウェア州 スタディツアー**

- ①実施日：3月9日（月）～ 20日（金）
- ②場 所：アメリカ合衆国 デラウェア州
- ③参加者：普通科 特別進学コース 2年1名・総合進学コース 2年1名  
科学技術科 1年2名
- ④内 容：ホームステイ、大学訪問（デラウェア大学、デラウェア州立大学）  
高校訪問（Polytech High School、Early college high school）  
English Language of Institute 訪問（語学授業体験）  
表敬訪問（ドーバー空軍基地訪問、デラウェア州知事訪問、ドーバー市長訪問）  
Washington, D.C.、New York 観光  
各校にてプレゼンテーション（学校紹介、日本の文化紹介）



図 40：表敬訪問の様子



図 41：Washington, D.C. 観光の様子



図 42：プレゼンテーションの様子



図 43：学校交流の様子

## 5. G C P (グローバルコンピテンスプログラム)

### 3年間のまとめ

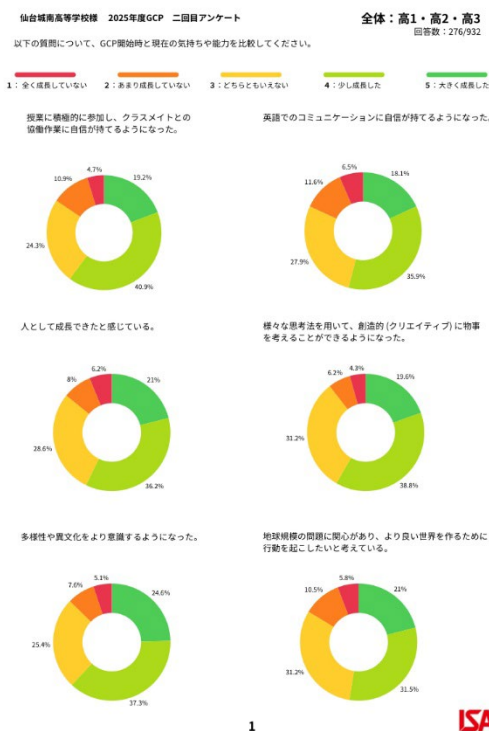
## グローバル・コンピテンツ・プログラム (GP) について

WVL 事業の開始と同時に、GP（英語による授業）を立ち上げた。開始前は、本校生徒が英語での学習活動に十分対応できるか懸念もあったが、授業開始後は各科・コースの実態に応じた反応の違いは見られつつも、概ね円滑に授業を展開し、生徒は継続的に活動へ参加することができた。

その背景には、ISA 派遣の GCP 外国人講師による計画的かつ丁寧な指導と、使用教材（Climb 1～3）が目指す学習観が、本事業の目標「Connect to the World」と整合していたことが挙げられる。なお、初年度に使用した Climbe 1 は内容面で学年実態に比して平易な単元が一部あったため、3 年目以降は 1 年次から Climbe 2 を使用している。来年度（4 年目）からは、学習到達の蓄積を踏まえ、普通科は Climbe 3 から開始する。

授業は、GCP 外国人講師（T1）が主にファシリテートし、英語科教員（T2）が学習活動の成立を支える体制で実施した。導入当初は T2 の支援範囲（説明量、介入のタイミング等）の調整に課題があったが、授業観察と振り返りを重ねる中で、生徒の主体的な発話・協働が最大化されるよう、支援の在り方を改善した。

本授業は英語運用を目的化するのではなく、英語を媒介として「世界と自分をつないで考える」力を育成することを主眼としている。授業後アンケート等からは、生徒がコミュニケーション面での成長を実感するとともに、国際的な課題や他者の視点へ関心を広げたことが窺える。今後も GP を通じて「世界の一員としての私」という自覚を促し、世界で活躍できる人材育成につなげていく。



## 5. 高大連携公開講座 (先取り履修)

## 高大連携公開講座（先取り履修）

- ①対 象：WWL コンソーシアム構築支援事業 連携校
- ②科 目 名：グリーンテクノロジー（開講大学：東北工業大学）
- ③開講時期：令和7（2025）年度 後期（令和8年1月～令和8年2月）
- ④修得単位：1単位
- ⑤授業構成：全8回 メディア講義 各100分（21人の教員によるオムニバス形式）
- ⑥授業内容：

### ◆授業の達成目標・概要

カーボンニュートラルの実現にはどうすべきか？東北工業大学で何をどのように学ぶべきか？など、3学部8学科の教員がすべての学生に、成長が期待される産業分野における「グリーンテクノロジー」について講義し、学生の視野を広げそれぞれの専門の学びとの連続性や連携についての理解を促す。講義では産業分野毎に、どのような取り組みがなされてきたか、またその分野での問題点は何かを述べたのち、世界および日本における省エネ、省資源およびカーボンニュートラルへの最新の取り組みを概説する。さらに、その分野で本学が関わっている研究を紹介する。

### ◆教科書等

「グリーンテクノロジー（グリーンテクノロジー編集委員会【編】共立出版）を使用する。一部は学習支援システム(LMS)等で資料配布する。なお、学習に使用するインターネット環境やPC等は各自準備すること。

### ◆成績評価方法・基準

学習支援システム(LMS)で実施される動画を視聴後、確認テストにおいて2/3以上「正解」することでその回の講義を「合格」とする。全8回の講義において6回以上「合格」することで単位修得を認める。

### ◆授業計画（各回の学習内容等）

学習支援システム(LMS)に掲載される資料や動画視聴により学習し、確認テストを行うことで学力の定着を図る。

開講回	学習内容	授業時間（目安）
第1回	講義の概要 洋上風力産業	各授業 約100分
第2回	自動車・蓄電池産業	
第3回	半導体・情報通信産業	
第4回	住宅・建築物産業	
第5回	資源循環産業	
第6回	カーボンリサイクル・水素産業	
第7回	食料・農林水産業	
第8回	ライフスタイル産業	

表1：高大連携講座 授業計画

⑦単位認定：全8回の講義において6回以上「合格」することで単位修得を認め、単位修得証明書を交付する。

単位修得証明書は全講義終了後、高校を通じて合格者に交付する。

合格者は東北工業大学進学後、教養教育科目「グリーンテクノロジー（1単位）」として、大学卒業に必要な単位に加えることができる。

6. みらい東北

AL ネットワーク会議

**(1) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業**

**第1回「みらい東北ALネットワーク」連絡協議会**

①日時：令和7年5月16日（金）

②場所：仙台城南高等学校 会議室

③出席者（敬称略）：千葉忠幸・山内民・中澤宏一・中島夏子

佐々木良彦・早坂晴子・斎藤貴弘・渡邊哲・佐藤匠・横橋裕介・田代誠・久保圭慧

菅原浩・成田奈穂・工藤啓之・阿部那津子・山村美和・伊豆田亮爾・水谷 朋之

伊藤俊・水戸良広・遠藤吉夫・尾上智宏・鈴木理恵・藤井久美・佐藤悠・表潤一・高橋和輝

大學麻子・伊藤まり子・佐藤ひなた

④内容：

拠点校、連携校が今年度初めて一堂に会する会議となった。拠点校より、WWL事業の目的、内容についての説明と今年度の活動予定について説明した。その後、拠点校事務室より今年度の予算についての話があり、最後に拠点校から、今年度の国際サミットの日程提案があった。

**(2) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業**

**第2回「みらい東北ALネットワーク会議」連絡協議会**

①日時：令和7年11月19日（水）13：05～15：15

②場所：仙台城南高等学校本館1階小会議室よりオンライン配信

③出席者（敬称略）：千葉忠幸・中島夏子

渡邊哲・佐藤匠・横橋裕介・田代誠・久保圭慧・成田奈穂・工藤啓之・山村美和

伊豆田亮爾 ・水谷朋之

伊藤俊・水戸良広・遠藤吉夫・尾上智宏・脇坂晴久・鈴木理恵・千葉俊哉・藤井久美

表潤一・高橋和輝・佐藤 悠・大學麻子・伊藤まり子・佐藤ひなた

④内容：

8/8・9/17・10/27の3回にわたって行われた「令和7年度みらい東北高校生国際サミット」へ向けた生徒実行委員会の様子を、本校教員鈴木から報告した。その後、国際サミットでの探究活動発表・ワークショップ時のカテゴリーを【科学】・【環境】【文化/教育】・【まちづくり】・

【国際理解】の5テーマで行うことを確認した。またワークショップの内容について方向性が示された。次に12/26開催予定「令和7年度みらい東北高校生国際サミット」第6回生徒実行委員会の詳細について話し合い、最後に「令和7年度WWL事業 活動報告書」内容について共有し、WWL事業指定期間終了後の活動の仕組みにおけるアンケートについて確認した。

### (3) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業

#### 第3回「みらい東北ALネットワーク」連絡協議会

①日時：令和8年2月12日（木）15:0～15:30

②場所：仙台城南高等学校本館1階小会議室からオンライン配信

③出席者（敬称略）：千葉忠幸・北島みどり

齋藤貴弘・渡邊哲・佐藤匠・横橋裕介・田代誠・久保圭慧・成田奈穂

工藤啓之・阿部那津子・山村美和・伊豆田亮爾・水谷 朋之・塚田章裕

水戸良広・遠藤吉夫・尾上智宏・鈴木理恵・藤井久美・表潤一・高橋和輝

④内容：

12/26・1/12の2回にわたって行われた「令和7年度みらい東北高校生国際サミット」へ向けた生徒実行委員会の様子を、本校教員鈴木から報告した。次に、国際サミットのプログラム、そして今年度初めて実施する探究活動発表・ワークショップの他に、各学校の紹介と探究活動のポスター展示についての詳細を説明した。次に、次年度以降のWWL事業の運営、先取り履修の状況、令和7年度 運営委員会・検証委員会の日時について確認した。

### (4) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業

#### 第1回 カリキュラム委員会

①日時：令和7年5月8日（木）

②場所：仙台城南高等学校 小会議室

③出席者（敬称略）：中島夏子・遠藤吉夫・鈴木理恵・相澤茂紀・千葉俊哉・藤井久美・佐藤悠・表潤一・高橋和輝

④内容：初めに本校教員高橋から、生徒実行委員会において探究活動を実施するに至った経緯およびその意義について説明がなされた。また、生徒実行委員会で実施する探究活動における課題設定の方向性について共有があった。さらに、探究活動の成果を具体的なアクションへどのように結び付けていくかというビジョンについて説明が行われた。加えて、現時点で感じられている違和感や疑問点についても提示された。

その後、カリキュラムアドバイザーの中島先生より、中島先生より、国際課題をテーマとした探究活動の実施については困難が伴うとの指摘があった。特に、海外に赴いて課題を調査することは現実的ではなく、内容が抽象的になりやすいため、課題設定と具体的なアクションとの間に乖離が生じる可能性があるとの助言がなされた。また、課題設定の曖昧さについても指摘があり、地域ごとに探究活動を行う構想があるにもかかわらず、テーマが国際課題である点には整合性の面で違和感があるとの見解が示された。さらに、発信する情報については一次資料であるべきであるとの指摘があった。その場で実際に起きている事象や現在行われている取組にこそ価値があり、高校生が既存の施策を調査して発表するのみでは二次資料にとどまるため、より主体的な情報発信が求められるとされた。加えて、高校生の当事者意識の低さについても言及があった。「社会を変える」「社会に貢献する」という主体的な姿勢が十分に感じられ

ない場合があるため、提言を行うのであれば、未来の担い手としての自覚を持った発信となるよう意識づける必要があるとの助言がなされた。その後、探究活動にラフ案についての提示と進め方、当日のプログラムについての助言があった。

#### (5) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業

##### 第2回 カリキュラム委員会

①日時：令和7年5月22日（木）

②場所：仙台城南高等学校 小会議室

③出席者（敬称略）：中島夏子・遠藤吉夫・鈴木理恵・相澤茂紀・千葉俊哉・藤井久美・佐藤悠・表潤一・高橋和輝

④内容：最初に第1回生徒実行委員会に向けて話し合い、WWL事業の意義および目的、本実行委員会ならびに探究活動の狙いを説明する資料を作成することとした。また、昨年度の実行委員会の活動状況を紹介する資料および年間計画についても提示することとした。

次に、生徒実行委員会年間計画を立てた。6月25日に実施する第1回委員会（オンライン）では、WWL事業および生徒実行委員会の概要説明、探究活動の説明、生徒同士の自己紹介を行う。また、事例収集に関する説明として、必要事項および具体例の提示を行うことにした。8月8日には対面形式でワークショップを実施し、収集した事例の共有を行うとともに、Webサイト作成へつなげるための議論を行う。その際、適切な役割分担についても検討し、運営体制の構築を図る。その後、9月および10月にはオンラインでの委員会を開催し、進捗状況の確認および課題の共有を行う。12月には対面での委員会を実施し、試行的な運用開始を目指すとともに、今後の運用方法について検討することにした。

国際サミット2日目のワークショップでは、分野別に高校生の社会貢献活動の事例を整理し、参加者同士で共有することとする。これにより、各自が取り組む社会貢献活動についての具体的な構想を促す。また、従来と同様に地域課題について議論を行い、その解決に向けたアイデアを検討する。さらに、これらの成果については実行委員会のWebサイト上に投稿できる仕組みを整備し、全体で共有することを想定した。

## (6) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業

### 運営指導委員会及び検証委員会

①日時：令和8年3月17日（火）13:30～14:30

②場所：仙台城南高等学校 小会議室よりオンライン配信

③出席者：千葉忠幸・山内民・中澤宏一・中島夏子

伊藤俊・水戸良広・遠藤吉夫・鈴木理恵・相澤茂紀・藤井久美・表潤一・高橋和輝

④内容：

#### 1. 事業の成果と概要

冒頭、拠点校校長より本事業の3年間にわたる成果が報告された。具体的な成果として、拠点校における進学実績の向上、英検合格者の増加が挙げられ、生徒たちの探究的な学びが着実に成果として表れていることが共有された。

その後、事務局より3月13・14日に開催された「みらい東北高校生国際サミット」の振り返りが行われ、次年度以降への課題と今年度の工夫点が報告された。

#### 2. 今後の課題と改善の方向性

事務局から、運営面および内容面において、以下の3点を課題として挙げた。

- 海外校とのオンライン接続：昨年度の課題を受け、早期準備に努めたものの、実際の調整には想定以上の時間を要した。一方で、分科会における台南との交流は質疑応答を含め非常にスムーズであり、一定の手応えを得る結果となった。
- 探究成果発表のカテゴリー再編：今年度は「科学」「環境」「文化・教育」「まちづくり」「国際理解」の5枠で予定したが、提出されたテーマの中に「環境」に該当するものがなかった。生徒たちの探究テーマの傾向に合わせ、枠組み自体の見直しを検討する必要がある。
- 国際性を深める取り組みの継続：地域団体との連携や講話の実施が本年度は実現に至らなかったため、国際色をさらに高めるための方策として引き続き取り組んでいく方針である。

#### 3. 本年度の成果と創意工夫

生徒たちの主体性を引き出し、本事業のビジョンを具体化するために以下の工夫を凝らした。

まず、初対面の生徒同士が打ち解けられるよう、生徒実行委員によるアイスブレイクを導入した。これにより、その後のブレインストーミングや議論が非常にスムーズに進行した。また、DX（デジタルトランスフォーメーション）への意識付けとして、ワークショップのスライド案に「ICT・デジタル機器を活用してできること」という項目を新設した。この工夫により、生徒たちが解決策を考える際、意識的にデジタル技術を取り入れられるよう促した。

最後に、WWL 指定最終年度を見据えた取り組みとして、生徒実行委員自らの探究活動と発信を強化した。彼らが「社会課題を自分ごと化し、アクションを起こし続ける」という決意をサミットの集大成として発表した姿は、本事業の目指す人材育成の象徴となった。

#### 4. 運営委員等による指導助言

各委員の先生方からは、本事業の意義を高く評価する声とともに、次年度の自走化に向けた具体的なアドバイスをいただいた。

- 探究活動の目標設定と評価の在り方  
高校生の専門性には限界があることを踏まえ、生徒が混乱しないよう適切な目標設定を行う必要がある。各校が「何をもちて成果とするか」についてのコンセンサスを形成し、評価指標を明確にすることが求められる。
- 教員の指導体制とカリキュラムの深化  
探究活動のカリキュラム作成に、より注力すべきとの指摘があった。教員間での情報共有やディスカッションを活発化させ、教員の指導の在り方について共通認識を持つことで、より「生徒主体」の探究活動を構築していくことが重要である。
- グローカルからグローバルへの成長と発信  
本事業の目的である「イノベティブなグローバル人材」の育成が、地域（ローカル）の視点から世界（グローバル）へと着実に展開されている。年を追うごとに生徒の発表は堂々としたものになっており、その成長は顕著である。公立・私立の枠を超えて社会課題に挑むこの素晴らしい取り組みを、今後も継続し、広く発信していくべきとの評価をいただいた。
- アイデアの継続的な発展  
国際サミットのワークショップで生まれたアイデアを単年度で終わらせず、次年度以降に積み上げ、どのように発展させていくかという視点を持つことが不可欠である。

#### 5. 次年度以降の自走化に向けた展望

本事業は次年度より、これまでの成果を基盤とした「自走」フェーズへと移行する。持続可能な運営体制を構築するため、以下のスケジュールで活動を展開していく予定である。

- 会議体の運営：  
連絡協議会をオンラインで年3回開催し、事業全体の進行管理を行う。生徒実行委員会については、7月にキックオフミーティングを実施し、8月以降は2ヶ月に1度のペースでオンライン開催を継続する。
- 国際サミットの開催：  
3月中旬に、1日の日程で「対面形式」による開催を予定している。

オンラインによる日常的な連携と、対面での集大成の場を効果的に組み合わせることで、生徒たちの活動をさらに活性化させていく。あわせて、本事業で構築した学校間ネットワークを基盤として、連携の輪を一層広げていきたい。

## 6. みらい東北高校生国際サミット 生徒実行委員会の取り組み

## (1) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業

### 「令和7年度みらい東北高校生国際サミット」生徒実行委員会キックオフミーティング

- ①日時：令和7年6月25日(水) 16:00~17:00
- ②場所：仙台城南高等学校 小会議室よりオンライン配信
- ③対象者【生徒実行委員】：

八戸工大第二高等学校	佐々木快成・中城快斗・三津谷能
聖霊学園高等学校	高橋紅羽・藤本眞生・岩崎知奈
盛岡白百合学園高等学校	若生莉央・三浦舞子・石川咲妃
東北文教大学山形城北高等学校	阿達聖奈・大久保柚歩・黒澤理子
福島成蹊高等学校	岡崎雄斗・佐藤大世・戸田裕綺
金沢大学附属高等学校	喜多輝
仙台向山高等学校	吉田光輝・渡部貴裕・穴戸勇斗
仙台東高等学校	鈴木あさひ・星はるか・伊藤舞花
泉高等学校	兼下花・杉翠月・渡部ひなの
仙台城南高等学校	草薙奏・中村太誠・佐藤凜

- ④内容：各高校から3名の生徒実行委員が参加し、自己紹介を行った。その後、WWLの説明と昨年度のプレサミットの様子について、写真を入れながら説明した。今年度の生徒実行委員会探究活動について、県や学校の枠を超えた、未知への挑戦となる。活動の方向性として、高校生の社会貢献活動を外部に向けて発信するためのプラットフォームづくりを軸に据えることを決めた。今後の各学校での活動内容と7月のオンラインミーティングまでに取り組んでほしいことについて、身近な社会貢献活動の例を調べてくること、プラットフォームを作成するにあたりどのようなコンテンツを盛り込めばよいかを考えてくることを確認した。最後に今後の予定と次回の会議は7/30にあることについて共有した。

## (2) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業

### 「令和7年度みらい東北高校生国際サミット」第1回生徒実行委員会

- ①日時：令和7年7月30日(水) 15:30:~16:30
- ②場所：仙台城南高等学校 小会議室よりオンライン配信
- ③内容：6月のオンラインキックオフミーティングを経ての開催であったため、初対面でもスムーズに進行が進んだ。生徒実行委員会で行う探究活動について、拠点校の仙台城南高等学校より例示を行い、それを踏まえた上で8/8(金)に行われる対面での情報交換に向け、準備を行うことの確認をした。合わせて、当日の係分担についての話も行った。最後に、8/8(金)に行われる対面での議事内容について確認した。

### (3) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業

#### 「令和7年度みらい東北高校生国際サミット」第2回生徒実行委員会

- ①日時：令和7年8月8日（金）10:30～15:00
- ②場所：仙台城南高等学校 会議室
- ③内容：生徒実行委員長の草薙奏の司会進行で行った。3/13・14開催の「令和7年度みらい東北高校生国際サミット」プログラム内容の確認を行った。休憩をはさんで、アイスブレイクを行いながら各委員の交流を深め、そののちに今年度行う生徒実行委員会の探究活動についての説明を改めて行った。その後、各学校から探究活動について持ち寄り、ワールドカフェ方式で意見交換を行った。午後は東北大学の中島教授に来ていただき、生成AIの活用に関する講義を行ってもらいながら、実際に高校生の活動を外部に発信していくための方策について話し合い、意見共有を行った。

### (4) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業

#### 「令和7年度みらい東北高校生国際サミット」第3回生徒実行委員会

- ①日時：令和7年9月17日（水）15:30～16:30
- ②場所：仙台城南高等学校 小会議室よりオンライン配信
- ③内容：仙台城南高校実行委員の中村太誠の司会進行で行った。生徒実行委員会の探究活動について、この内容を整理して今後の取り組みを4つに集約したい。
  - 4つの取り組みとは以下のもの
    - 1) Webサイトの制作
    - 2) SNSの運用
    - 3) 連携校ごとに活動内容を母校で発信
    - 4) 連携校イベントを企画
  - 探究係が中心となって、各校で話し合ってきてほしい。話し合った内容をまとめて、パワポなどにまとめてほしい。という旨の話がされた。

### (5) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業

#### 「令和7年度みらい東北高校生国際サミット」第4回生徒実行委員会

- ①日時：令和7年10月27日（月）15:30～16:30
- ②場所：仙台城南高等学校 小会議室よりオンライン配信
- ③内容：仙台城南高等学校生徒実行委員の佐藤凜の司会進行で行った。前回の振り返り及び各校探究活動の進捗状況と今後の活動（具体的にA Webサイトの制作について B SNS運用について C 母校での発信について D 連携校イベントの企画について）の各校からの報告・提案がなされた。報告内容が多岐にわたったため、次回会議までに集まった提案を整理し、各校へ共有することを確認した。また、その提案内容に関する各校の意見集約と各校での発信の進捗状況報告を11/19（水）のオンライン会議と12/26（金）の対面会議で進めていくことを確認した。また、東北工業大学の高大連携講座の先取履修についての報告を行った。

## (6) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業

### 「令和7年度みらい東北高校生国際サミット」第5回生徒実行委員会

- ①日時：令和7年11月19日（水）15:00～16:40
- ②場所：仙台城南高等学校 小会議室よりオンライン配信
- ③内容：生徒実行委員長の草薙奏の司会進行で行った。最初に、今年初めて行う東北工業大学10号館での学校紹介・ポスター見学の概要について共有した。またそれに伴って、各校で当日までに準備してもらうものについて、確認した。次に前回までの振り返りとして、提案内容に関する各校の意見と各校での発信の進捗状況の発表を行い、意見交換した。意見交換した内容を踏まえ、生徒実行委員会による探究活動をまとめ、次回の12/26(水)の生徒実行委員会で整理した資料を提出することを確認した。最後に、令和7年度みらい東北高校生国際サミットのタイムテーブルの大枠について共有した。

## (7) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業

### 「令和7年度みらい東北高校生国際サミット」第6回生徒実行委員会

- ①日時：令和7年12月26日（金）9:30～15:00
- ②場所：東北工業大学 八木山キャンパス1号館2階122教室
- ③内容：仙台城南高等学校生徒実行委員の中村太誠の司会進行で行った。まず、午前中には東北工業大学 工学部 都市工学課程 准教授 菅原 景一氏より「しあわせってなんだ？～青年海外協力隊で見たタンザニアの生活から考える～」をテーマにした講話をいただいた。幸せの定義について問いを与えられ、生徒たちはその意味を真剣に考えながら、講話を聴いていた姿が印象的だった。グローバルな視点を取り入れるという点においても大いに参考になった。その後、修正された令和7年度みらい東北高校生国際サミットのプログラム内容の確認と令和7年度みらい東北高校生国際サミットのポスター披露が行われた。今年度は仙台東高校の鈴木あさひさん、八戸工大第二高校の三津谷能さんの二人がそれぞれポスターの製作を担当し、2つのデザインが披露された。次に、生徒実行委員会の探究活動についての確認を行った。今後の流れやそれぞれの学校の進捗状況についての発表が行われた。昼食をはさんで、午後の時間を使って令和7年度みらい東北高校生国際サミットのテーマづくりが行われた。ワールドカフェ形式にてディスカッションを行い、今年度の国際サミットのテーマが「未完成レール ～正解のない未来へ走る～」に決定した。最後に、国際サミットに向け各担当の打ち合わせを行い、今後3か月の動きについて確認が行われた。

## (8) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業

### 「令和7年度みらい東北高校生国際サミット」第7回生徒実行委員会

- ①日時：令和8年1月21日（水）15:30～16:30
- ②場所：仙台城南高等学校 小会議室よりオンライン配信
- ③内容：仙台城南高等学校生徒実行委員長の草薙奏の司会進行で行った。前回の振り返りとして、テーマの確認などが行われた。その後、各校探究活動の進捗状況と今後の活動について各

校からの報告（具体的にA Webサイトの制作について B SNS運用について C 母校での発信について D 連携校イベントの企画について）がされた。また、国際サミット当日までに行うこととして、分科会の司会担当がアイズブレイクを考えてくること、連携校教員に向けては各種提出の締め切り・提出方法の確認などが行われた。サミット当日について、探究グループ数を増やすことが可能であるということ、連携校以外の学校の申し込み状況についての共有、台湾の学校の参加についてもそれぞれ共有が行われた。

#### (9) 令和7年度 WWLコンソーシアム構築支援事業

##### 「令和7年度みらい東北高校生国際サミット」第8回生徒実行委員会

- ①日時：令和8年2月12日（木）15:00～16:40
- ②場所：仙台城南高等学校 小会議室より zoom 配信
- ③内容：仙台城南高等学校実行委員の中村太誠の司会進行で行われた。内容として前回の振り返りとして、各校から様々な提案があったものについて確認を行い、それをまとめた資料を共有した。令和7年度みらい東北高校生国際サミットの準備の確認について、各担当で準備すべきことについての確認を行った。また、連絡協議会でも協議が行われた10号館でのポスター展示についての確認を行い、合わせて生徒実行委員の動きについても説明を行った。生徒実行委員会の探究活動について、当日までにSNSの発信を行うことを報告した。それに伴い、各学校で動画の撮影を行い、公式SNSで発信していくことを共有した。また、#みらい東北の活用に関して、各学校で行われている探究活動や社会貢献活動に関することを#みらい東北で発信することで、探究の輪を広げていくことを目的とすることを共有した。

# 11. 連携校・拠点校の 探究活動報告

(1) 探究学習年間計画

月	活 動 内 容
4	ブロックを用いたトイドローン操作①
5	ブロックを用いたトイドローン操作②
6	ブロックを用いたトイドローン操作③
7	ブロックを用いたトイドローン操作④
8	Anaconda・Pythonについて①
9	Python基本プログラム①
10	Python基本プログラム②
11	Python基本プログラム③
12	Python基本プログラム④
1	Pythonでトイドローン操作①
2	Pythonでトイドローン操作②
3	Pythonでトイドローン操作③ → 次年度に向けて課題設定

(2) 探究課題設定

プログラミングによるドローン操作を通して、「条件分岐・くり返し・関数作成などの基本操作」を習得し、物体認識を試す。

その上で、社会課題(身のまわりの課題)解決のためにドローンを活用するプログラム作成を目指す。

(3) 指導過程

1) ブロックを用いたトイドローン操作

アプリ「TELLO EDU」をタブレットにインストールし、次の①～④のプログラムを作成する。

- |            |        |
|------------|--------|
| ①条件分岐・くり返し | ②関数を作成 |
| ③空間で図形を描く  | ④画像認識  |



図1 くり返し処理



図2 関数作成

## 2) Anaconda・Python について 作成したテキストから抜粋

0. Python (パイソン) とは

Python とはプログラミング言語の一つです。基本、コンピュータが判断できるのは1か0です。それに、人間が「あれやって、これやって」と伝えることは非常に難しい。

なので、人間が理解しやすくしてコンピュータに仕事を伝えやすい「ことば」が必要な訳です。それが、プログラミング言語。

用途に合わせていっぱい種類がありますが、ごく一部を紹介すると、

プログラミング言語	備 考	
FORTRAN (フォートラン)	科学技術向け計算	
COBOL (コボル)	事務処理計算	コンパイラ型
C 言語	各種業務システム(汎用性が高い)組込システム	
JAVA (ジャバ)	Web アプリ/業務システム/組込システム/ゲーム	インタプリタ型
Visual Basic	Web アプリ/スマホアプリ/Windows アプリ	
Python	Web アプリ/AI 開発	

図3 Python とは

1. Python の使用環境

Python はプログラミング言語です。これに、いろんなライブラリ(拡張キット)がついていると、いろんなことが可能になります。例えて言うと、Python 自体は電話機能とインターネット接続だけできるスマホという感じです。これに、様々なアプリを入れることで、スマホを便利に活用できる訳です。

では、「Python + いろんなライブラリ」がセットになったものは何か。それが、Anaconda(アナコンダ)です。そして、その中に入っている統合開発環境(IDE: integrated development environment)のSpyder(スパイダー)でPythonを練習していきます。

図4 Anaconda とは

## 3) Python 基本プログラム

Windows タブレットに Anaconda をインストール。エディタとして Spyder を使用し、次の①～④のプログラムを作成する。

①変数の利用

②分岐処理

### ③ 繰り返し処理

### ④ 関数作成

```
1 # -*- coding: utf-8 -*-
2 """
3 Spyder Editor
4
5 This is a temporary script file.
6 """
7 #入力値を結合します
8 x = input('xの値を入力してください → ')
9 y = input('yの値を入力してください → ')
10 print(x + y)
11
12 #入力値の合計を求めます
13 a = input('aの値を入力してください → ')
14 b = input('bの値を入力してください → ')
15 print(int(a) + int(b))
16
```

図5 変数の利用

```
7 #整数を指定する
8 num = int(input('整数を入力してください : '))
9 dnum = 1 #dnumは約数の意味。はじめに約数1と入力しておきます。
10
11 #条件を指定して繰り返し
12 while dnum <= num / 2: #約数が、入力した整数値の半分より
13     #約数であれば出力
14     if num % dnum == 0: #%は割ったときのあまり。==は比較
15         div = dnum #割り切れたらdnumの値をdivという変
16         if div == 100:
17             break #約数に100があったらループを抜ける
18         dnum +=1 #約数を1増やして次の処理へ
19     print(div)
20
21 #素数かどうか判定
22 if div == 1:
23     print(f'{num}は素数です')
24 elif div == 100:
25     print(f'{num}は素数ではなく、約数に100があります')
26 else:
```

図6 繰り返し処理

### 4) Python でドローン操作

```
1 # -*- coding: utf-8 -*-
2 """
3 Spyder Editor
4
5 This is a temporary script file.
6 """
7 import tello
8 import time
9
10 tello.Send('command')
11 tello.Send('takeoff')
12 time.sleep(4)
13 tello.Send('cw 180')
14 tello.Send('Land')
```

図7 基本動作

```
1 import cv2
2 from djitellopy import Tello
3
4 tello = Tello()
5 tello.connect()
6
7 tello.streamon()
8 frame_read = tello.get_frame_read()
9
10 tello.takeoff()
11 cv2.imwrite("picture.png", frame_read.frame)
12
13 tello.land()
```

図8 写真撮影



### (4) 次年度への展望

Pythonによるドローン操作に慣れてきたところで、社会課題(日常生活ないでの課題)解決のためにドローンをどのように活用するかを考察させ、プログラムを作成する。

みらい東北高校生国際ミット成果報告資料 1 八戸工業大学第二高等学校

みらい東北高校生国際サミット

## 鬼ごっこwith Drone ~青森県考案のために~

八戸工業大学第二高等学校

### アクション

ドローンと人が楽しく鬼ごっこできるようにプログラムを作る。


※人それぞれに合わせた  
スピード、運動量などをカスタマイズ

実際にPythonを使用し作成開始

みらい東北高校生国際サミット

### なぜドローンを追いかける必要があるのか？

1. 「ドローンを追いかける」という遊びの要素が加わっているため運動がしやすい  
スポーツ・トレーニングくく鬼ごっこ
2. ドローンのスピードに合わせればいため  
無理なく運動を続けることができる



みらい東北高校生国際サミット

### ドローンの動作イメージ

パターン2



みらい東北高校生国際サミット

### 今後の活動

1. ドローンを飛ばすプログラムと物体認識を組み合わせたプログラムを作り安全性を確認する
2. ドローンを使った運動で効果が表れるのかを確認する
3. 「鬼ごっこ」をより科学的に分析しプログラムに反映させる


みらい東北高校生国際サミット

### AI × Drone

超少子高齢化社会  
1983年 約153万人  
2016年 約130万人  
2022年 約120万人  
2040年 約91万人  
※青森県の人口推移

社会をどうやって支えるのか

「青森県DX推進プラン」  
2024年策定



※参考文献

人工知能社会における

子どものためのヘルスケアコンテンツとしての鬼ごっこに関する考察

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/pjsai/JSAI2019/0/JSAI2019\\_2K40S16a01/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/pjsai/JSAI2019/0/JSAI2019_2K40S16a01/_pdf/-char/ja)



**連携校 2 盛岡白百合学園高等学校 ～探究活動について～**

**(1) 探究学習年間計画**

本学園では、総合探究の実施体制を見直し、今年度より教科担任制を導入した。週二単位で実施するコースがあることから、年間計画は最大単位数を基準として作成した。さらに、次年度以降の教材選定を見据え、複数の教材を試験的に活用しながら計画を立案した。

表 1 2025 年度高校一・二年生探究活動テーマ年間計画表（概略）※IH:インスパイアハイ, RE:リクルート

月	高一	高二
4	[IH]自分らしさをどう見つける？ [RE]興味・好きを知る将来勉強したいことは？	[IH]チームワークをどうつくる？ [RE]探究とは/問題を見つける
5	[IH]チームワークをどうつくる？ [RE]変化の問い、仕組みの問い	[IH]学校の意味ってなんだろう？ [RE]問題の発見 1~3・問題の自分ごと化
6	[IH]インクルーシブな社会ってなんだろう？ [IH]失敗って怖いもの？	[IH]学ぶって大事なこと？ [RE]オープンキャンパス参加ガイダンス
7	[IH]個人探究プロジェクト実施	[IH]事業アイデアはどう生まれる？
8	[IH]目標とどう向き合う？	[IH]没頭するってどういうこと？
9	[IH]個人探究プロジェクト実施 [IH]争いはなぜ終わらない？	[IH]無駄なものってある？ [IH]戦争のない未来をどうつくる？
10	[IH]個人探究プロジェクト実施	修学旅行関連探究（平和活動・歴史探究）
11	[IH]学ぶって大事なこと？	修学旅行関連探究（平和活動・歴史探究）
12	[IH]想いをどう伝える？/他者をどう理解する？	[IH]平和ってどんなもの？
1	[IH]ルールはなぜ必要？ [IH]まちの魅力をどう見つける？	[RE]探究スキルアップワークシート取組 活字のススメと志望理由書への接続
2	[RE]リクルートガイダンス	[RE]リクルートガイダンス
3	まとめ	まとめ

**(2) 探究課題設定**

基本課題を「自己理解から他者理解、そして社会へ」と定め、クラスの実態に応じた探究活動を行った。個人探究にはインスパイアハイを、グループ探究にはリクルートを主に使用し、興味・関心を起点とした集団的な学びの場を設定した。加えて、外部団体との協働事業を年間通して実施し、多角的な視点の獲得や知識・経験の深化を図った。

**(3) 指導過程**

高校一年次は自己理解と課題意識の形成を、高校二年次は他者・社会との関わりを通じた探究の深化を主軸とした。月ごとに問いを設定し、ワークショップや発表、外部連携を段階的に配置す

ることで、探究の視点が個人から社会へと展開する指導過程を設計した。

表2 2025年度高校一・二年生探究活動実施テーマ（概略）

月	高一	高二	外部関連事業
4	[IH]自分らしさどう見つける？ [RE]探究とは/興味・好きを知る	[IH]チームワークをどう作る？(WS)マシュマロチャレンジ/地元・地域の目標	
5	[IH]人と違うって？/自分をどう発信する？	[IH]学校の意味？未来の教育とは[発表]	・西崎憲さん講演会(高一)
6	[IH]インクルーシブ社会って？/失敗ってこわいもの？(WS)文献収集	[[RE]問題発見ワークシート [WS]夢の修学旅行を考える[発表]	・[RE]OC参加ガイダンス(高二)
7	[IH]プロジェクト実施 [RE]変化の問い、仕組みの問い	[IH]事業アイデアはどう生まれる？	・Anna Da' Puzzoさん講演会(高二) ・蟻ヶ崎高校 zoom 交流会(4名)
8	[IH]目標とどう向き合う？	[IH]没頭するってどういうこと？[発表]	
9	[IH]個人PJ実施/争いはなぜ終わらない？	[IH]無駄はある？/戦争のない未来？[発表]	・擬似喪失体験(高一)
10	[IH]個人PJ実施/言葉ってなんだろう？	[IH]"I love you."をどう訳す？(修養会) [WS]環境問題解決策提案合戦[発表] ・高校生Ring実施(ME/MEA)	・MORIOKA MEET UP PG(高二) ・もりおか座映画祭 Volunteer(25名) ・SB Student Ambassador(12名)
11	[IH]学んで大事なこと？	・修学旅行探究(広島・奈良探究[発表])	・高校生議会参加(6名)
12	[IH]想いをどう伝える？/他者理解とは？ ・個人PJ提出	[IH]核兵器のない未来を作るには？[発表] ・個人PJ提出	・蟻ヶ崎高校 zoom 交流会(3名) ・全国高校生国際フォーラム(1名) ・SDGs Quest みらい甲子園(1名)
1	[IH]地域の課題をどう解決する？/ルールはなぜ必要？/まちの魅力をどう見つける？	・活字のススメと志望理由書への接続 [RE]探究スキルアップワークシート実施	
2	[RE]リクルートガイダンス	[RE]進路ガイダンス/進路接続	・朝日新聞社復興シンポジウム(2名)

指導にあたっては、生徒の関心を起点とした問いを尊重し、教材やワークショップを通して思考を言語化する機会を多く設けた。発表活動を重ねることで他者の視点に触れ、自身の問いを見直しながら探究を深める過程を重視した。また、各学年で外部団体との協働活動を行うとともに、希望者を対象に外部イベントへの参加機会を設定した。探究活動との接続を意識した働きかけに

より、生徒が自ら学びを広げる場として主体的に参加する姿が見られた。

#### (4) WWL 活動 3年間のまとめ

本学園における探究活動は、必ずしも全ての生徒に十分浸透したとは言い切れない。しかし、総合型選抜をはじめとする大学入試への対応という実践的側面に加え、生徒一人ひとりの可能性を広げる学びとして、その意義は大きいと考えている。この三年間の実践を通して、教科の授業では見えにくかった生徒の思考力や関心、主体性に触れる機会が数多くあった。生徒自身の興味を起点に問いを深める過程は、学習への向き合い方を変える契機となり得るものであった。一方で、探究の進め方に戸惑う生徒への支援や、指導体制・運営面での課題も明らかとなった。これらの課題を踏まえつつ、探究活動を一過性の取り組みに終わらせることなく、今後も本学園の教育の柱の一つとして継続・発展させていきたい。

「How Does a Willingness to Communicate Help People Overcome Language Barriers in Intercultural Interactions?」 安部花音

## 1. Background



【My Early-life Environment】	【My Values Regarding Cultural Differences】
<ul style="list-style-type: none"><li>●Grew up with English</li><li>●My Mother is a Cross Cultural Understanding Coordinator</li><li>●International topics were part of my daily life</li><li>●In particular, I had frequent opportunities to interact with individuals from Thailand and Canada.</li><li>●Despite my limited English proficiency, I gained a natural understanding of diverse cultures through shared meals and activities.</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>●Enjoyed English through movies and animation.</li><li>●Communicated with people from different countries.</li><li>●Cultural differences felt exciting, not frightening.</li></ul>

3

## 2. My Experience

~Exchange Program in Canada Victoria~



- Participated in an exchange program in junior high school.
- Faced difficulty expressing my thoughts clearly.
- I became aware of new possibilities within myself.

4



### 3. Key Question

**How Does a Willingness to Communicate Help People Overcome Language Barriers in Intercultural Interactions?**



### 4. Key Awareness

- ✦ Perfection often led to silence.
- ✦ Willingness led to communication.
- ✦ Intentions mattered more than grammar.



7



### 5. Current Conclusion

- Communication starts with willingness.
- Attitude builds trust and understanding
- This creates a foundation for intercultural understanding.





**連携校 3 聖霊女子短期大学附属高等学校 ～探究活動について～**

**1. 探究学習年間計画**

(1) 2年生

月	内容		備考
4	オリエンテーション・課題研究・グループ決め	学年	探究係
5	探究ガイダンス	学年	秋田銀行の方からのガイダンス
6	課題設定・情報収集	各学級	
7	夏休みの活動計画	各学級	
8	夏休みの活動まとめ・共有	各学級	
9・10	情報収集	各学級	
11	中間発表	各学級	外部講師による講評・アドバイス
12	まとめ・クラス予選	各学級	
1	学年発表	学年	外部講師による審査・講評
2・3	振り返り・WWL 発表準備	各学級	

表 1 高校 2 年年間計画

(2) 3年生

月	国際・総進コース	特進コース
4・5	課題設定（最終）	
6	探究活動	
7	探究活動	
8	プレゼン作成	
9	プレゼン作成・総探合同発表会	
10	論文作成	
11	論文作成	
12	論文作成・分かち合い	
1	今年度のまとめ	

表 2 高校 3 年年間計画

**2. 探究課題設定**

1年生は4月から夏季休業前までの「総合的な探究の時間」において礼法を実施し、探究活動は夏季休業以降に行っている。今年度から新たに『7つの習慣』というプログラムに沿って探究活動を実施した。

2年生は、今年度は「社会と自分とのつながり」の中から課題を設定し、探究活動を行った。課題設定にあたって、社会や地域にとって重要なものであることに加え、自分自身が興

味・関心をもち、主体的に関われる内容であることを重視した。5月には、昨年度に引き続き秋田銀行の方よりガイダンスを実施していただき、「自分たちの目指す姿と現状のギャップから出てくる問題を課題にする」という助言をいただいた。テーマとしては地域活性化、防災、子育て支援、国際理解、美容、動物愛護など多岐にわたり、生徒たちは自身の興味・関心に基づいた課題に取り組んだ。

3年生は昨年度に取り組んだ探究テーマをさらに深化させることを目標に活動を進めた。

### 3. 指導過程

2年生は4月に学年全体でガイダンスを実施した後、課題設定、グループ編成、探究活動へと進んだ。各グループには担当教員1名がつき、適宜助言を行った。

探究活動においては、インタビューやフィールドワークを実施するなど外部との連携を積極的に図った。例えば、教育機関のフードロスを経験したグループは、附属こども園で給食の様子を見学し、栄養士へのインタビューを実施したうえで、食べ残しをなくすためのカルタを制作した。また、子育て支援を経験したグループは助産師へのインタビューを通して課題を深め、育児不安の軽減を目的としたパンフレットを作成した。このように、専門家の方から得た知見をもとに、自分たちでできる具体的な提案へと発展させる姿が多くみられた。

今年度は、学校行事や講師との都合の関係で例年より遅くなったが、11月に中間発表を各クラスで実施した。外部講師からの助言や講評を受け、内容をさらにブラッシュアップし、まとめへとつなげた。12月にはクラス内で最終発表を行い、1月には各クラス代表によるグループによる学年発表会を実施した。その際も、秋田銀行の方とノースアジア大学の方より講評をいただき、教員だけでは得られない視点からの助言が生徒のさらなる意欲向上にもつながった。

### 4. WWL 活動 3年間のまとめ

- (1) 3年間 WWL に参加させていただき、対面やオンラインで他校の生徒と交流して意見交換する機会を得たことは生徒にとって大きな刺激となり、社会への興味を高め、自分の意見を持ち発信する力を高めることができたと感じる。教員にとっても他校の先生と交流をもち、生徒の探究活動の様子を知ることは、自校の探究活動についても改めて見直す貴重な機会となった。また、WWL コンソーシアムの構想として「サステナビリティとDXを牽引する人材育成」とあるが、DX対応においてはまだ課題

が残る。生徒たちにはAIやICTを必要に応じて有効に使ったり、データから社会課題を読み取ったりする力を、探究活動を通して伸ばしていきたい。また、教員自身もICTを有効に活用しながら、生徒がより主体的に取り組めるようなファシリテーション力を

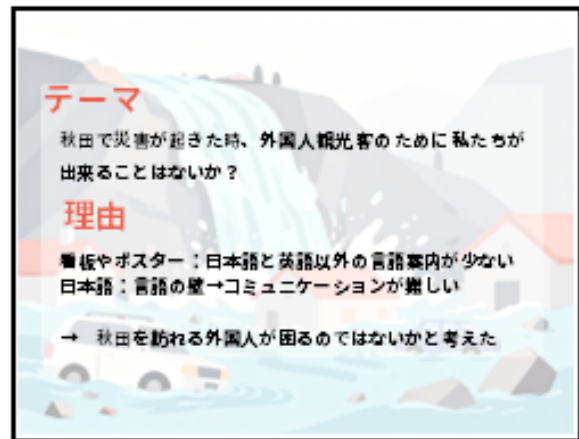


高めていきたい。

みらい東北高校生国際サミット成果報告資料3 聖霊学園高等学校（一部抜粋）



1



2



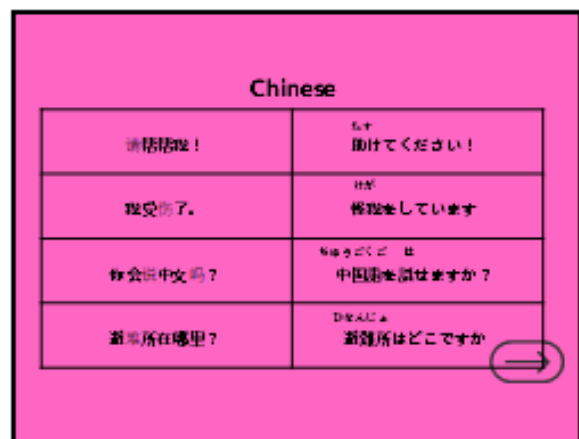
3



4



5



6

Korean	
도외주세요!	ち 助けてください!
다천어요.	お 知らせしています
한국어 할 수 있어요?	かんこく は 韓国語を話しますか?
대피소는 어디예요?	たいぱい 避難所はどこですか

7

### アンケート

秋田県にいるALTOの先生方にWebサイトを使ってもらい、アンケートを実施した  
・ Google Form

### 質問内容

- ①日本にいて災害が起きたときに困ったことはありますか？
- ②具体的にどんなことですか？
- ③Webサイトを見た感想を教えてください。
- ④このWebサイトは災害時に役立つと思いますか？
- ⑤Noと答えた人はアドバイスをお願いします。

8

### よかった点・改善点

- ✓ 簡単で分かりやすい
- ✓ 日本を訪れる外国人が最も多く話す言語が収録されている

- ❑ ローマ字を追加する
- ❑ スマートフォンの画面に連応させる。
- ❑ 津波、地震、洪水など様々な種類の災害言葉を分ける。
- ❑ 緊急電話番号を記載する
- ❑ 避難経路の標識を記載する
- ❑ 色覚異常のある方のために背景の色を工夫する

9

### クマ・ポスター作成

→ お店に貼ってあるクマのポスターは日本語表記のみ  
→ 外国人の方が困っていた!!!

↓

緊急事態が起こると他の言葉で書くという考えに行きつかない(日本語表記のみ)

↓

英語表記のポスターを作成し、学校周辺のお店にプレゼントした。

10

【クマ・ポスター作成】

11

### 今後の活動

- ・ アンケートで出た問題点を改善する。
- ・ より多くの外国人の方々にWebサイトを知ってもらう。

12

**連携校 4 東北文教大学山形城北高等学校 ～探究活動について～**

**(1) 探究学習年間計画**

**【1年次 探究の導入と問いの基礎づくり】**

- ・身近な地域課題から探究の基礎を学ぶ
- ・業界を知り、企業から問いの立て方を学ぶ
- ・地域や企業が取り組む課題を学び、イノベーションのアイデアを考える

**【2年次 社会との接続と構想力の育成】**

- ・志望分野と学問を繋げて考えられるよう、具体的な課題解決ビジョンを学ぶ
- ・地域の産業を知り、業界知識の幅を広げる
- ・地域の課題について考え、学問と結び付けて解決方法を探る

**【3年次 進路と結びついた個人探究の実践】**

- ・1、2年次で培った力をもとに、進路希望に即したテーマで実際に探究活動を行い、学びと将来像を明確にする
- ・個別に進路対策を行う

月	1年	2年	3年
4月	オリエンテーション	自己分析 グループ探究（～9月）	個人探究 （前年度の続き）
5月	自己理解	地域の課題について考える	〃
6月	地域理解（グループワーク） プレゼンテーション	地域の産業を知る	〃
7月	業界を知る 企業事例から学ぶ	地域の課題に学問でアプローチする	〃
8・9月	問いの立て方を知る 課題を特定する視野を得る 課題解決方法を知る	学問や産業と、行政の連携について	〃
10月	フィールドスタディ（準備）	個人探究準備（～2月）	個人探究発表
11・12月	フィールドスタディ （実施・まとめ）	地域の未来と自分の未来を考える	学年発表・振り返り
1・2月	フィールドスタディ（発表）	発表資料準備 クラス発表・学年発表	進路対策

## (2) 探究課題設定

### 1) 1年生

地域や企業について学び、理解を深めることで、自分の視野を広げた。その中で地域や企業がどんな課題を抱えているのかを知り、「問い」の立て方を学んだ。

### 2) 2年生

前期は昨年度「学校を良くしよう」というテーマから出発し、それを学校のみならず地域の問題や産業など多角的な視点でさらに広げて課題を設定し、グループ探究を行った。後期は個人の興味関心・問題意識に応じて課題を設定し、個人探究を行った。

### 3) 3年生

2年次後半からスタートした個人探究活動をさらに深めるために、探究のサイクルを繰り返した。自分の進路に関わる分野を中心に課題を深く掘り下げたことにより、自分事として強くとらえることができ、進路意識の向上にもつながった。

## (3) 指導過程

### 1) 1年生

マイナビの探究学習・キャリア支援のオンラインツール「Locus」を、探究活動における「問いの設定」や「振り返り」に活用した。

- ① 自己理解を深め、自分の興味・関心を知る。
- ② 地域理解から社会課題の探究、将来の進路選択までを体系的に学び、さらに、考える・話し合う・表現するという一連の活動を効果的に行う。地域・社会・進路と結びついたテーマを通して、生徒が「問いを立てる力」と「自分の学びの意味」を見出すことを目指す。
- ③ 業界の基礎知識を学び、業界に関わる企業や学校の取り組みを通じて視野を広げ、「問い」を立てる練習を行う。
- ④ 「フィールドスタディ」を通して、企業の担当者から事業内容や社会課題への取り組みを直接聞き取る。現場での学びを通して主体的な姿勢を育て、事後の発表では、得た情報を整理し、自分の言葉で伝える力を養



図 1.1 学年フィールドスタディ



図 2.2 学年ポスターセッション

う。

## 2) 2年生

昨年度に引き続き、同じグループでテーマごとに分かれ、ゼミ形式で探究活動を実施した。まとめとして学年全体でポスターセッションを行った。また、「Locus」を活用し、地域の課題や地域の未来に目を向けさせるとともに、進路希望や学問と結び付けて個人探究へとつなげた。

## 3) 3年生

1クラスに2～3名の教員を割り当て、担当する生徒を決めて指導にあたった。少人数を担当することにより、きめ細やかな指導を行うことが出来た。成果物としてスライドにまとめ、クラスごとに発表した。また、各クラスの代表者は学年全体で発表した。

### (4) WWL活動 3年間のまとめ

これまでの本校の実践を全体的に振り返ると、「問いの設定」が浅く、既存の情報を集めるだけで探究が終わってしまうケースが多く見られた。特に「調べただけで終わる」「既存の答えに依存する」といった探究のあり方は、生徒の主体的な思考を十分に引き出すことができず、改善すべき重要な課題であると認識している。また、教員の関わり方や指導スキルに差があることも課題であった。

過去2年間、このWWL活動に参加し、代表者は、ジェンダーフリーをテーマに自ら企業に協力を求め、商品開発のアイデアを形にしたり、環境をテーマにごみを減らし、循環型社会にするためのアイデアを実践したりする探究の成果を発表してきた。さらに今年度は、「もっと地域とつながり、活性化させるために学生がどのように関わっていくべきか」、「バリアフリーは誰のために必要なのか」をテーマに探究活動を行ってきた2グループが代表となった。身近な疑問や問題から課題を設定し、自ら赴きインタビューや調査・実験などを行い、その中でアイデアや解決策を提案する、ただ調べるだけで終わらない探究活動を行うことができた。

連携校として3年間のWWL活動を通して、他校の実践や活動内容を学ぶことができ、関わることであった生徒・教員にとって得るものは大きかったと考える。このサミットで発表することが生徒の励みになったり、探究の内容を一層深めたりすることにもつながり、成果物の目標も具体的になった。また、他校の先生方と情報交換する中で、教員も試行錯誤していた探究活動の指導を見直すことができ、指導力の向上にもつながった。

また、生徒実行委員の活躍も目覚ましかった。実行委員会や当日の運営、ワークショップ等を通して、生徒が主体的に活動し、貴重な経験となり、一人ひとりの成長につながったと感じた。

この活動の内容や他校の実践、生徒の発表などは学校に持ち帰り、校内での連絡ツールで報告を行っている。全体で共有することで生徒も教員も学ぶことが多く、さらにこれらの活動を広めていくことが必要であると考えます。そして、生徒の自走を促すためにも、自ら課題を発見し、社会と自己をつなげる「問い」を立てる力の育成と、主体的・対話的で深い学びの実現を目指していきたい。

学生と地域との関わり みんなで作る子ども文化祭 ～地域の人と絆を深めよう～

垂石華亜音 石川直桜 荒川知歩里

**1. テーマ設定の背景**

①地域行事の減少  
②人との関わりの希薄化

- ・地域の人同士が顔を合わせる機会が少なくなっている
- ・子供と大人、学生と地域住民の交流が減ってきている
- ・世代を超えた関わりの場が不足している
- ・地域の中で学生が役割を持つ場が少ない

**各自治体の課題**

- ・町内会は役員が頑張っている場合がほとんどである。  
役員の高齢化、40～50代の忙しさ、負担感などから、担い手がいない。
- ・市の中心部では隣近所との関わりが希薄。
- ・子どもの数も減っており、子供会の運営も厳しい地域がある。

⇒ **町内会存続の危機**

町内会がなくなると・・・  
災害が発生したときの安否確認、いざというときの助け合いが難しい。

**課題**

**理想と現実のギャップ：参加を阻む「3つの壁」**

**時間の壁**

- ・共働き世帯の増加
- ・週末も仕事がある
- ・部活動や習い事との両立

**心理的負担**

- ・「めんどくさい」
- ・人間関係の煩わしさ
- ・役員などの責任の重さ

**強制的壁**

- ・参加への同調圧力
- ・断りにくい雰囲気
- ・持ち回りの役職制度

「メリットは助け合い、デメリットは精神的負担と時間の拘束」

**住民が感じるメリット：安心・安全から心の健康まで**

**Level 3：活力とつながり**

- ・会話で元気をもらえる・昔の話を開ける・異年齢間交流

**Level 2：生活と育児を支える**

- ・子どもを見守る・悩み相談・孤立を防ぐ

**Level 1：命と安全を守る**

- ・災害時の連絡・いざという時の助け合い・安否確認・防犯面

↑  
基本的欲求から  
情緒的価値へ

**未活用の地域資源：高校生への期待**

**労働・環境**

- ・雪かき
- ・花壇づくり・除草
- ・清掃
- ・老人介護の手伝い

**教育・活動**

- ・子供会の寺子屋  
(勉強の指導)
- ・子どもと一緒に運動  
(体育館等で)
- ・高校生が考えた遊び

**活性化・情緒**

- ・若者の「ことば」「遊び」を聞く
- ・おしゃべり・脳トレ  
(高齢者いきいきサロン等)

楽しんでいっしょに 子どもが保護者の方と楽しむ『子ども文化祭』の内容として

**子ども文化祭**

- ・縁日（射的・ボーリング風ゲーム）
- ・折り紙、ぬりえ
- ・鬼ごっこ
- ・サッカー（ボール遊び）など

みんなで楽しめるように各ブースを設置。  
左のようなポスターを作り近隣の幼稚園や保育園に配布。商店等に掲示を依頼。

日時：2月8日（日）10時～12時

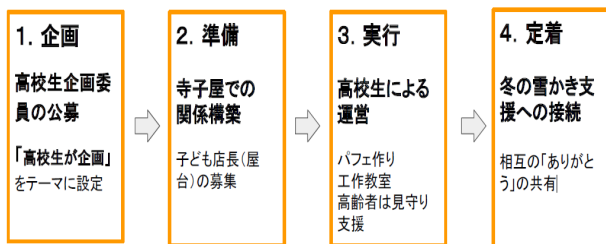
場所：山形城北高校 小体育館

対象者：幼稚園児、保育園児とその保護者の方

持ち物：動きやすい服装、タオル、水筒

お母さん達も子どもが遊んでいるところを見られるようにカフェスペースを設置。

ロードマップ:「子ども文化祭」を起点とした改革



「義務」の地域活動から、「参加したい」コミュニティへ

挨拶で元気が生まれ、  
困った時に助け合える町へ

強制的な負担を減らし、高校生の力と子どもたちの好奇心を地域の中心に据えることで、地域は持続可

## **連携校5 福島成蹊高等学校 ～探究活動について～**

### **(1) 探究学習年間計画**

本校は「普通コース」「文理選抜コース」「特進コース」「一貫コース」という4つのコースがあり、それぞれのコースがある程度の独自性をもって探究活動を実施している。本報告では「普通コース」で実施している探究活動における年間計画を報告する。1年生の普通コースについては、年度の最後に「自分の興味のある分野に対する探究発表」を行うことをふまえて年間計画を作成した。

#### **1) 探究基礎①(7月)**

株式会社エナジードの教材である「エナジード・コア」のボリューム1を用いて探究活動を実施するための基本的なマインドセットを学んだ。

#### **2) 探究基礎②(12月)**

株式会社エナジードの教材である「エナジード・コア」のボリューム2を用いて探究活動を実施するための基本的なマインドセットを学んだ。

#### **3) キャリア探究「社会人対話」(12月)**

社会人62名を本校に招き、「これまでにどのような人生の選択を行ってきたか」「どのような価値観を大切にしているのか、それを選択したのか」についての対話を行った。

#### **4) 探究演習(12月～3月)**

「自己の探究」を深めるとともに、「どのような社会課題に取り組んでいきたいのか」ということに関するまとめ・発表を行った。

### **(2) 探究課題設定**

探究課題については「自己探究」および「どのような社会課題に取り組んでいきたいのか」というものを大テーマとし、各個人の興味・関心のなかでそれぞれに課題を設定していった。一年次においては「自分自身が抱える身近な課題」について、その課題をどのように解決すればよいか、これまでの自分にはなかった視点を取り入れつつ、一人ひとりがそれぞれに課題を設定した。また、二年次には、研修旅行などを通じて見ることができた様々な社会課題に対して、「どのように自分に関わっていくのか」という観点で、自分自身の進路をふまえつつ、一人ひとりがそれぞれに課題を設定した。

### (3) 指導過程

#### 1) 探究基礎について

株式会社エナジードが提供している「エナジード・コア」を、探究活動に対するマインドセットをつくることを目的として取り組んだ。ボリューム1においては、「次の時代に求められる人の力」をいうテーマで「感覚的に気づく力」「原因から発案する力」「巻き込み実現する力」について、ボリューム2では「描いた未来を実現する力」をテーマに、「捉え方を変える力」「ゴールを決め、逆算する力」「動く力」について指導を行った。新しい取り組みに対する負担感が反省としてあがっていたことから、指導ではクラス担任等をお願いするのではなく、学年に配属されている「探究・ICT推進部」のメンバーが学年全体を指導する体制をあえて取って実施した。

#### 2) キャリア探究「社会人対話」について

生徒たちが「自己の探究」を深め、さまざまな社会課題についての実際の取り組みに、自分の五感で触れることを目的として、社会人62名・生徒512名で対話を行った。具体的には、社会人1名に対して生徒8名ほどの小グループを62個作成し、それぞれの対話者が「これまでの人生において、どんな選択をしたのか」「どのような価値観をもとに、その選択を行ったのか」について、60分程度で対話する場とした。今回の主眼を「選択と価値観」とし、職業そのものにはあまりフォーカスしない対話を、対話者にはお願いをした。「講話」ではなく「大人との対話」を行うことで、生徒たちには今までの人生で触れたことのない新しい視点を得ることにつながり、その後の探究活動に生きる取り組みとなった。

#### 3) 探究演習について

「自己の課題探究」「社会課題に関する探究」を行った。一年次においては、「自分自身の課題」として興味・関心のある分野に留まらず、学業やクラブ活動についての「課題」を一人ひとりが設定した。それに対して「これまででない新しい視点」における「解決のための仮説」を立て、実際にそれを行ってみたいの振り返りをまとめ・発表することを行った。二年時においては、具体的な社会課題に対して、自分の進路をふまえて「どのように関わっていくか」について探究を行った。

### (4) 今後の課題と次年度への展望

株式会社エナジードが提供する「エナジード・コア」などを用いて、探究活動における基礎作りを行ったが、そのほかの学校行事との兼ね合いで十分な指導が行えなかったとともに、実際に生徒が「探究」する時間も圧迫してしまう状況が生まれていた。これを受け、探究活動の基礎作りとなる活動は「総合的探究の時間」とは別に設定することで、生徒が実際に「探究」する時間をしっかりと確保するよう、次年度の年間計画について整理を行った。

～日本とスイスの共通課題～

1年 5組 11番 氏名小池 智香子

①興味のある国とSDGs、その国を選んだきっかけ

スイス連邦



前回の探求ではスイスの「貧困をなくそう」というSDGsの目標達成率が99.5%ということが分かった。今回は、問題点を中心に探求したいと考えた。結果、ごみの排出量について挙がり、日本と共通している課題があったため調べようと思った。

②その国の現状（問題点）と仮説（どうすれば問題点が解決、よりよくなるのか）

スイスで最も課題となっているSDGsを調べたところ、12番の「つくる責任 つかう責任」ということが分かった。

現状として、スイスのごみの排出量は非常に高い。2020年には、一人当たり年間約703kgの都市ごみを排出し、欧州でもトップクラス。

（具体例）

- ・フードロス—家庭でのフードロスは年間約100万トンに達している
- ・過剰梱包
- ・使い捨ての分化が完全にはなくなっていない

仮説

- ・フードロスは消費者の意識から変える
- スイスの消費者は「必要以上に買い物をする経済的な余裕がある」ため、食べきれない食品を購入する傾向がある。
- ・過剰梱包、使い捨ての文化が完全にはなくなっていない
- 企業、メーカー側、消費者側、社会制度の3つの面から厳重な対策をたてる

③実験・検証

- ・フードロス
- 各家庭で、食べれる分だけ計画的に購入するよう政府が呼びかけ、そこにキャンペーンなどの要素も加える。また、企業側も売れ残りの商品を値引きして販売するなどの売側の工夫も必要。
- ・過剰梱包
- 企業側は、再利用可能な素材に変える。消費者側は、再利用バッグや容器を使う。有料レジ袋の値段をもっと上げる。社会制度は、規則や罰則を作る（家庭から出たごみの量に応じて税金を付けるなど）

#### ④ 考察・結論

日本と共通する理由としては

消費社会による資源の大量使用

両国とも生活水準が高く、消費量が多い。

今回考えた問題を解決する鍵としては、「企業側、消費者側、社会制度」の3つの面でそれぞれ考えていくことが重要だ。そして、これらはスイスに限ったことではない。もちろん日本との共通する課題もあったため、同じ解決策を取り入れるべきだと思う。国単位で考えることはとても難しく、自分たちにできることは限られているが、まずはこのように課題を知ることが大切だと感じたため、これからも一つ一つ細かい部分まで考えていきたい。

#### ⑤ 自分の進路に向けて

私は将来の夢が明確ではないが、世界規模で働くなら、このように日本と他国を比較して、共通点や相違点を見つけることは重要だと思った。環境的な面からくる課題と、人の心理的な面からくる課題があるため、将来どのような職業についても、心理的な面からくる課題は自分事として捉えて考え続けていきたいと思う。

#### キャンペーンについて

##### スーパーなどの企業側

- ・レシートに「あなたは今週〇gの食品ロスを防ぎました」と表示
- ・政府ロゴ付きで信頼感を担保

##### 各家庭の消費者側

- ・捨てなかった食材量、節約できた金額、CO<sub>2</sub>削減量を簡単に記録（アプリ or 紙）する。
- 一定基準を達成すると報酬制度

##### 社会制度

義務教👉で、献立計画、保存方法、消費期限の理解を教える

##### まとめ

- + 「買うな」「捨てるな」
- 「賢い」「誇らしい」「得する」「地域に貢献」

引き算ではなく足し算！！

**連携校 6 仙台向山高等学校 ～「向陵 Plearning (プラーニング)」について～**

**(1) 探究活動「向陵 Research (リサーチ)」年間計画 (3年計画)**

「向陵 Plearning」は本校の総合的な探究の時間の呼称である。「向陵」(本校の所在地)の地で未来に向かって主体的に計画「plan」し、学び続ける「learning」の意が込められている。「探究×キャリア教育」を二つの軸に据え、体験的・協働的な学びを大切にしており、2年次にグループで大学・研究機関を体験する「アカデミックインターンシップ」を中軸に探究活動「向陵 Research (リサーチ)」を組み立てている。

1年次：向陵 Research 入門：自分の興味関心と出会い、互いに伝え合う。「ビブリオバトル」

向陵 Research 基礎：自分の興味関心を互いに伝え合い、深める「ブックトーク I」

2年次：向陵 Research：興味関心を育て、学問とつながる。

「ブックトーク II (グループ)」「アカデミック・インターンシップ」

3年次：向陵 Research 完成：育んだ興味・関心をもとに未来への一歩を踏み出す。

**「Personal Presentation」(個人探究・プレゼン)**

1年		2年		3年	
回	内容	回	内容	回	内容
1	向陵Plearningオリエンテーション	1	向陵Plearningオリエンテーション	1	向陵Plearningオリエンテーション
2	キャリアプランニング：学問の分類を知る	2	向Research:向陵ブックトークII (グループ探究)	2	向陵Research : personal presentation
3		3		3	
4		4		4	
5		5		5	
6	6	6			
7	プレゼンレッスン	7	CP:世界を広げる講座	7	
8	向陵research入門：ビブリオバトル	8	向陵Research: AI・プランニング (グループ探究)	8	
9		9		9	
10		10		10	
11	キャリアプランニング:オータムセミナー	11	向陵Research:中間報告会 発表会	11	
12		12		12	
13		13		12	向陵オープンセミナー
14	向陵research基礎:ライティングレッスン	14	向陵Research:中間報告会に向けて (グループ探究)		
15	向Research基礎:向陵ブックトーク	15	向陵Research:中間発表会・フラッシュアップ		
16		16		17	
17		17	18		
18		18	19		
19		19	20		
20		20	21		
21	向陵オープンセミナー	21	向陵Research:中間報告会 学年発表会		
22		22		22	
23	向陵Research: 向陵ブックトークII (グループ探究)	23	3年次向陵Plearningオリエンテーション		
24		24		23	
25		25		24	
26		26		25	
27		27		26	

## (2) 探究課題設定

探究課題（テーマ）は、1年次後半に結成するグループ毎に設定する。

### テーマ設定の流れ

- ① 興味関心を共にする者同士をグルーピングする。例)「国際政治」「工学（機械）」
- ② グループ内で共通の興味関心探しをし、グループテーマを決める。
- ③ グループテーマに見合った新書を各自が読み、グループブックトークを行う。
- ④ テーマを深めるためのクエスチョン（リサーチクエスチョン）をあげる。
- ⑤ テーマを深めるために大学・研究室体験をし、研究者にインタビューする。  
(アカデミック・インターンシップ)
- ⑥ テーマを再確認し、グループ毎に成果をまとめ、発表する。(中間発表)

## (3) 指導過程

(1)の「探究学習年間計画」のプログラムに沿って、教師は各活動が円滑に進むように支援を行う。

- ① 各活動ごとに目標、方法を生徒と共有する。
- ② 各活動に要する時間、期限を生徒と共有し、促す。
- ③ テーマを深めるために訪問する(アカデミック・インターンシップ)大学・研究室候補を選定し、依頼する。
- ④ 生徒が深めたいテーマと連携先とをコーディネートし、アカデミック・インターンシップの内容を決定する。
- ⑤ 生徒スタッフ(向陵 Plearning 委員)が中間発表会を運営できるように、場の設定、および進行の支援を行う。
- ⑥ 発表内容をアカデミック・インターンシップで連携先と共有する機会を提供する。
- ⑦ 全校探究学習発表会「向陵オープンセミナー」の設定と運営補助を行う。  
今回、参加した五つの班は、全校発表会「向陵オープンセミナー」での発表を経た代表班である。

## (4) WWL 活動3年間のまとめ

3年間、「みらい東北高校生国際サミット」への参加、発表活動を軸に活動することができた。生徒実行委員、および発表班として参加した本校生は仙台城南高校をはじめ東北六県から参加するメンバーと交流することで大きな力を得ることができた。

各校の多様な探究活動に刺激をいただき、次年度からはこれまでの本校の「キャリア×グ

ループ探究」に加え、「生徒の好き・興味を究める個人探究」の充実を図るべく、年に4回の「向陵探究 DAY」を取り入れる予定である。

」

代表班：思春期とネガティブ思考はどう付き合うべきか？

【メンバー】小松澤飛雲、猪股楓佳、相澤結衣、小林常葉、佐々木勇真

【発表内容】

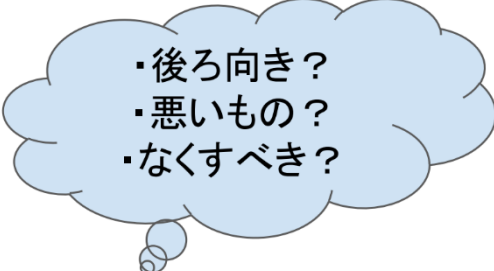
ネガティブと聞くと「無くすべきもの」「悪いもの」といったイメージが強いと思います。しかし、それは正しい知識なのでしょうか？私達はネガティブ感情について探究する間に、ネガティブそのものは無くす必要がないものだ気付きました。大事なのは「ネガティブの無くし方」ではなく、「ネガティブとの付き合い方」である、と。この結論に至った経緯と、これからの私達がネガティブとどのように付き合うかを考えます。

向陵Research 報告発表
思春期とネガティブ思考はどう付き合うべきか？
仙南向山高校 AI4班
2114 小松澤 飛雲
2206 猪股 楓佳
2101 相澤 結衣
2113 小林 常葉
2320 佐々木 勇真

まず最初に・・・

ネガティブのイメージは？

ポジティブの逆だから・・・



- ・後ろ向き？
- ・悪いもの？
- ・なくすべき？

～なぜこのテーマに？～

自分たちもネガティブ

↓

現在進行形で思春期

## ～文献から分かったこと～

- ・ネガティブ思考は悪くない
- ・思春期はネガティブになって当然

## ～グループブックトーク～



## 文献紹介①

著名：子どもの心はどう育つのか  
 著者：佐々木正美  
 発行者：ポプラ社  
 発行年：2019  
 ページ数：158



画像引用  
<https://www.poplar.co.jp...>

## グループブックトーク①

書名：『子どもの心はどう育つのか』

P72.73より作成

時期	心理的課題	危機
乳児期(出生～1歳未満)	信頼	不信
幼児期初期(1～3歳)	自律性	恥と疑念
学童期(3～6歳)	積極性	罪悪感
青年期(6～13歳)	勤勉性	劣等感
成人期(13～22歳)	自我同一性	役割の混乱
青年期(22～40歳)	親密性	孤立
壮年期(40～65歳)	世代性	停滞
老年期(65歳以上)	統合性	絶望

## グループブックトーク①

P72.73より作成

時期	心理的課題	危機
乳児期(出生～1歳未満)	信頼	不信
幼児期初期(1～3歳)	自律性	恥と疑念
学童期(3～6歳)	積極性	罪悪感
青年期(6～13歳)	勤勉性	劣等感
成人期(13～22歳)	自我同一性	役割の混乱
青年期(22～40歳)	親密性	孤立
壮年期(40～65歳)	世代性	停滞
老年期(65歳以上)	統合性	絶望

## 文献紹介②

著名：ようこそ、心理学部へ  
 著者：同志社大学心理学部  
 発行者：筑摩書房  
 発行年：2022  
 ページ数：208



画像引用  
<https://www.chikumashobo.co.jp...>

## グループブックトーク②

書名：『ようこそ、心理学部へ』

対象

はっきりしている

恐怖

はっきりしてない

不安

## みんなのセミナー in 東北大学

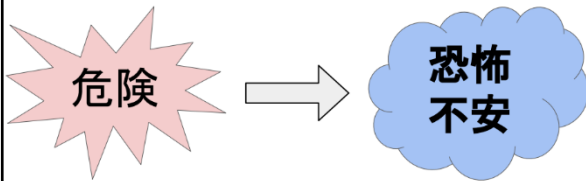
日時：5月19日  
 場所：東北大学  
 講師：菊地舞衣さん  
 東北大学教育学研究科

〈授業テーマ〉

おたくと見る心理学



ネガティブが持つ役割とは？



⇒ **警鐘としての役割**

～ここまでわかったこと～

エリクソンの学説 – **発達理論**

⇒ ネガティブに陥るのは当たり前

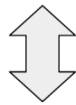
菊地さんの授業

⇒ ネガティブは悪いことじゃない

↳ **どう付き合うべきか？**

～新たな疑問～

ネガティブへの対処法は？



ネガティブな人とどう付き合う？

**アカデミック・インターンシップ**

日時: 7月30日

場所: 東北福祉大学

講師: 吉田綾乃 教授

東北福祉大社会心理学

〈授業テーマ〉

思春期の

アイデンティティを考

える



SNSとアイデンティティ

・ **自己呈示**: 自分のイメージを操作すること



**SNS上で演じた自分**



**アイデンティティ構築に悪影響？**

～まとめ～

・ 自分を見つめ直そう

・ ネガティブ思考は悪じゃない

⇒ **どう付き合うのか？**

・ ネガティブな人への思いやりを

## ～考察～

### どのようにネガティブ思考と付き合う？

- |        |                   |
|--------|-------------------|
| 小松澤 飛雲 | ・ネガティブな時に自分を見つめ直す |
| 猪股 楓佳  | ・比較対象を減らして自分に向き合う |
| 相澤 結衣  | ・信頼できる人に相談する      |
| 小林 常葉  | ・自分の思考パターンをよく理解する |
| 佐々木 勇真 | ・自分の思考を第三者的に観察する  |

### 参考文献・参考Web

#### 【参考資料】

- ①佐々木 正美 (2019) 『子どもの心はどう育つのか』ポプラ社
- ②同志社大学心理学部 (2022) 『ようこそ、心理学部へ』筑摩書房
- ③岡田 尊司 (2017) 『過敏で傷つきやすい人たち HSPの真実と克服への道』幻冬舎
- ④菊地 舞衣 (2025) 『おたくと見る心理学部』東北大インターンシップ
- ⑤吉田 綾乃 (2025) 『思春期のアイデンティティを考える』東北福祉大AI

#### 【対応スライド】

- ①7.8.11.12.17.22 画像引用-<https://www.poplar.co.jp...>(10/25)
- ②7.9.13.22 画像引用-<https://www.chikumashobo.co.jp...>(10/25)
- ③7 画像引用-<https://www.gentosha.jp...>(10/25)
- ④14.15.17.22
- ⑤19.20.21.22



連携校 7 宮城県仙台東高等学校 ～探究活動について～

(1) 探究学習年間計画

令和7年度 総合的な探究の時間 年間予定表								
	日	曜日	時数	1 学年	時数	2 学年	時数	3 学年
4	15	火	1	ガイダンス (年間計画説明等)	1	ガイダンス (年間計画説明等)	1	ガイダンス (年間計画説明等)
	22	火	1	キャリアセミナー	1	学問研究	1	探究活動まとめ①2年生の探究の振り返り
5	13	火	2	国際連携探究①全編座(探究活動の進め方)	1	社会貢献プログラム① 課題発見 I	1	探究活動まとめ②仮説設定+情報収集 I
	27	火			1	社会貢献プログラム② 課題発見 II	1	探究活動まとめ③ 情報収集 II
6	3	火	1	国際連携探究② 国際的視点からの講演	1	社会貢献プログラム② 課題発見 III	1	探究活動まとめ④ 情報収集 III
	17	火	1	国際連携探究③ 課題発見 I	1	社会貢献プログラム③テーマ設定+仮説 I	1	探究活動まとめ⑤ 情報整理分析
7	1	火	1	国際連携探究④ 課題発見 II	1	社会貢献プログラム④テーマ設定+仮説 II	1	探究活動まとめ⑥ 課題解決
	8	火	1	国際連携探究⑤ 課題発見 III+テーマ設定	2	社会貢献プログラム⑤テーマ発表 講演	1	探究活動まとめ⑦ 発表準備
	15	火	1	国際連携探究⑥ 課題発見 III+仮説 I	1	社会貢献プログラム⑦ 調査活動 I	1	探究活動まとめ⑧ クラス発表
	22	火	1	国際連携探究⑦ 課題発見 III+仮説 II	1	社会貢献プログラム⑧ 調査活動 II	1	探究活動まとめ⑨ 自己評価
夏季休業				調査活動		調査活動		
8	26	火	1	3年生の発表会への参加	1	3年生の発表会への参加	1	探究活動まとめ⑩ 全体発表
9	2	火	1	国際連携探究⑧ 発表	1	社会貢献プログラム⑨調査活動	1	社会課題事例研究① 振り返り
	9	火	1	国際連携探究⑨テーマの見直し、調査活動	1	社会貢献プログラム⑩情報整理	1	社会課題事例研究② 先行研究調査 I
	16	火	1	国際連携探究⑩ 全体講座	1	社会貢献プログラム⑪情報整理	1	社会課題事例研究③ 先行研究調査 II
	30	火	1	国際連携探究⑪ 調査活動	1	社会貢献プログラム⑫課題解決	1	社会課題事例研究④ 事例調査 I
10	7	火	1	国際連携探究⑫ 情報整理分析	1	社会貢献プログラム⑬発表準備	1	社会課題事例研究⑤ 事例調査 II
	14	火	1	国際連携探究⑬ 情報整理分析	1	社会貢献プログラム⑭クラス発表 I	1	社会課題事例研究⑥ 発表準備 I
	21	火	1	国際連携探究⑭ 課題解決	1	社会貢献プログラム⑮ クラス発表 II	1	社会課題事例研究⑦ 発表準備 II
	28	火	1	2年生の発表会への参加	2	社会貢献プログラム⑯全体発表会	1	社会課題事例研究⑧ クラス発表
11	7	火	2	国際講演会	2	国際講演会	2	国際講演会
	11	火	1	国際連携探究⑯ 発表準備 I	1	社会貢献プログラム⑰振り返り	1	ライフプランセミナー I
	18	火	1	国際連携探究⑰ 発表準備 II	1	進路探究まとめ①志望校書・自己PR作成	1	ライフプランセミナー II
12	2	火	1	国際連携探究⑱ 発表準備 III	1	進路探究まとめ②志望校書・自己PR作成	1	総復習まとめ (自己評価・キャリアサポート)
	8	火	2	キャリアセミナー		修学旅行		
	16	火	1	国際連携探究⑲ クラス発表	2	進路探究まとめ③志望校書・自己PR作成		
1	13	火	2	国際連携探究⑳ 全体発表	2	1年生の発表会への参加		
	20	火	1	国際連携探究㉑ 振り返り	1	進路探究まとめ④ 志望先・受験科目調査		
2	3	火	1	総復習のまとめ①	1	総復習のまとめ①		
	10	火	1	総復習のまとめ②(自己評価・キャリアサポート)	1	総復習のまとめ②(自己評価・キャリアサポート)		

## (2) 探究課題設定

### 1) 1年「国際的な視点から、社会が抱える課題の解決に取り組む探究活動」

国際的な視点を意識しながら、社会が抱える課題の解決に取り組み、探究活動の基礎を習得する。

### 2) 2年「社会貢献を意識しつつ、地域社会が抱える課題の解決を目指す探究活動」

1年で身につけた探究活動の手法を踏まえて、自分にとって関わりの深い地域社会の課題を発見し、その解決策を考えることで社会参画の意識を養う。

### 3) 3年「内容の高度化・自律化を目指した総括的な探究活動」

1・2年での探究活動を踏まえて、様々な視点から探究内容の高度化を図り、自律的に探究活動を進めることで探究する力をさらに深化させる。

## (3) 指導過程

### 1) 1年《グループによる探究活動》

年度はじめにガイダンスを実施するとともに、テキストを活用しながら探究活動の方法について基礎的な知識を身に付けさせる。また講演会などの機会を設け、生徒が自ら考えるようになるきっかけを用意する。さらに生徒には数名ずつのグループを作らせ、そのグループごとによる探究活動として、課題発見から調査、情報整理分析およびプレゼンテーション・ソフトを用いた発表まで行わせる。

### 2) 2年《個人の探究活動》

年度はじめにガイダンスを実施するとともに、テキストを活用しながら探究活動の在り方について広範な知識を身に付けさせる。1学年で身に付けた探究活動の手法を踏まえて、個人で行う探究活動として、自分が将来関わる社会に関して課題を設定し、その解決策を探究する。発表に際しては、プレゼンテーション・ソフトを用いたスライドショーによって、より効果的な発表方法を工夫させる。

### 3) 3年《個人の探究活動をさらに深化・発展させる探究活動》

1・2学年での探究活動を踏まえて、さらに様々な視点から論理的・批判的に問題を分析することを意識して探究活動を行わせる。夏休み前までに、課題発見から調査分析、考察までの流れを完成させ、そこで得た気づきや学びをもとにして、夏休み後に再度、課題発見から調査分析、考察まで行わせる。

#### (4) WWL活動3年間のまとめ

本校の探究活動の特色として、1学年は「国際理解」、2学年は「社会貢献」をキーワードとしていることが挙げられるが、これまで、探究活動そのものに対する理解が足りず、いわゆる「調べ学習」にとどまっている生徒も見受けられたため、年度途中に振り返りの機会を設け、全ての生徒が本当の意味での探究活動を行えるよう目指した。

また、校外で探究活動の成果を発表する機会をいただけるということで、参加を目指そうと、生徒たちのモチベーションも高まっていった。発表を通して、他校の生徒や参加者と互いの意見を交換することができ、自分たちだけでは気づかなかった視点を得ることができた。このような場は、自分たちの探究の内容を客観的に見直し、課題点を見出すことができる点で非常に意義のあるものと思われる。生徒実行委員にも毎年有志が自ら手を挙げ、意欲的に取り組んだ。

「みんなが平等な教育を受けられるにはどうしたらよいのだろうか」

## 『全ての子供が平等に**教育**を受けられるようにするにはどうすれば良いか』



The image shows a grid of the 17 Sustainable Development Goals (SDGs) from the United Nations. The goals are arranged in three rows and seven columns. The first row contains goals 1 through 6, the second row contains goals 7 through 12, and the third row contains goals 13 through 17. Each goal is represented by a colored square with a white icon and a number. The text 'SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS' is written at the top of the grid. The goal of Quality Education (Goal 4) is highlighted in orange.

## 今問題になっていること

『**教育**を十分に受けることのできない子供たちの人がとても多い』

世界で小学校に通えない子どもの数 **7,100万人**      世界で中学校に通えない子どもの数 **5,700万人**



The illustration shows a cartoon child with orange hair reading a red book. A thought bubble above the child's head contains a yellow school building with a red roof and a bell tower. The background is a light blue gradient.

# この数字は多い・少ないですか？

世界で小学校に通えない子どもの数      世界で中学校に通えない子どもの数

**7,100万人**

**5,700万人**



## 教育格差と教育の重要性について

日本はインドに既に  
経済で負けてしまっている

※GDP(国内総生産)  
→これが高いほど経済は潤っている



## 原因

- ・ 貧困
- ・ 労働
- ・ 自然災害
- ・ 紛争
- ・ 学校、教員不足
- ・ 性別



## 国際問題と関連するポイント

SDGsの「質の高い教育をみんなに」と関連している

SDGsの目標として

「誰一人取り残さない」

と制定してるため

今後、早急に解決しなければならない

4 質の高い教育を  
みんなに



## 解決策とアイデア

- ・ ボランティア活動の参加や呼びかけ
- ・ 教育支援団体への寄付(UNESCO, NPO法人など)



支援活動の必要性を知ってもらう

## まとめ

原因をしっかり探究する



自分自身では何ができるのか  
と考えるのが**重要**





**連携校 8 宮城県泉高等学校 ～探究活動について～**

**(1) 探究学習年間計画**

令和5年度までの反省点として、3年間での系統性が乏しく学習の見通しが立てにくいということが挙げられていた。これを受けて令和6年度に探究学習の年間計画を立て直し、本年はその移行2年目にあたる。

			1年生	2年生	3年生
前期中	4月	3	・オリエンテーション ・探究の基礎を学ぶ	・学術分野別研究基礎	・レポート提出 ・進路探究
	5月	3	・地域探究Ⅰ	・学術分野別研究	・進路探究
	6月	3	・地域探究Ⅱ	・学術分野別研究	・進路探究 評価
前期末	6月 7月	3	・地域探究Ⅱ	・学術分野別研究	・志望理由書
				研究発表会	
	8月		・フィールドワーク①(夏休み) ・地域探究Ⅱ	・フィールドワーク①(夏休み) ・学術分野別研究(中間発表①)	
後期中	9月	3	・地域探究Ⅱ(まとめ・発表)	・学術分野別研究	・進路、キャリア探究
	10月	4	・地域探究Ⅲ	・学術分野別研究	・進路、キャリア探究
	11月	6	・地域探究Ⅲ ・フィールドワーク②(半日)	・学術分野別研究 ・フィールドワーク②(半日)	・進路、キャリア探究
後期末	12月	4	・地域探究Ⅲ(まとめ・発表)	・学術分野別研究(中間発表②)	
	1月	3	・学術分野別研究(基礎)	研究発表会	・研究振り返り 評 ・レポート作成
	2月	3	・学術分野別研究(基礎)	・レポート作成	
	3月		(春休み) ・フィールドワーク③	(春休み)	

表1 令和7年度宮城県泉高等学校総合的な探究の時間年間指導計画

**(2) 探究課題設定**

1) 1学年

地域探究として「中学生に泉高校の良さを伝えるためにできることを考えよう」「学校がある泉区を活性化するためにできることを、高校生の視点から考えよう」という課題を設定しグループを編成して探究活動に当たった。合わせて、大学から講師を招き、探究活動の基礎や進め方に関する講義を行った。

2) 2学年

学術探究として自らの興味、関心、及び希望進路に応じて各自の課題を設定し個人による探究活動を行った。全部で7つの大分野に分かれそれぞれの分野に指導教員を配置するゼミ形式で活動に当たった。

3) 3学年

進路探究として2年次に取り組んだ課題を深化・発展させるとともにレポートを作成する活動に当たった。レポート提出後は各自の探究活動を大学での学びと関連付け、自らの進路につなげていく活動を行った。

### (3) 指導過程

#### 1) 1学年

入学後に探究の基礎を身に付け、それを活用して学校PRのプレゼンテーションを作成して学校説明会で披露した。また、地域の活性化に向けた課題を生徒自身が設定し、探究活動を計画・実践（夏休みの期間を利用した地域でのフィールドワークを含む）し、発表を行った。

#### 2) 2学年

ゼミ形式による個別指導を中心に指導を行った。生徒は課題設定、調査、発表、振り返りのサイクルを年間で複数回繰り返すことで探究を深め、1月には1年生へ向けて全員が探究活動の成果を発表した。また、外部のプロジェクトやコンテストへの応募も奨励しており、本年度はSDGs QUEST みらい甲子園南東北エリア大会にファイナリストとして選出されたり、月間「宣伝会議」が主催する第63回宣伝会議賞において協賛企業賞を受賞したりするなどの成果を挙げた。



図1 1学年探究講話の様子



図2 2学年探究成果発表会の様子

#### 3) 3学年

3年生では進路探究として、2年生で行った学術探究活動をレポートにまとめて提出するとともに、自らの関心と社会の問題を大学での学びと関連付けて自己のキャリアについて探究活動を行った。

#### (4) WWL 活動3年間のまとめ

3年間の活動を通して本校生徒は探究活動により意欲的に取り組むような成長がみられた。初年度である令和5年度には「抵抗力のある海岸林の形成に向けて」というテーマで、令和6年度には「震災の記憶と教訓を風化させないためには」というテーマでそれぞれプレサミットにおいて発表を行い、さらには学校外で震災関連活動に励むなど、課題解決力や積極性を含めた様々な力を伸長させた。また、直接参加していない生徒も参加生徒の活躍や発表を見て探究活動に対する意欲を高めている。

#### 高校生の社会貢献活動まとめ③



タイトル	アルティメット普及活動	
活動時期	2025年8月7日	
人数	企画1人、コーチ依頼1人、参加人数5人	
活動内容	東北地区の競技人数を増やすこと、知名度を上げることを目的として、七北田公園でアルティメット体験会を行いスロー練習や実践形式行った	

図3 生徒探究活動内容1

#### 内容④：連携校イベントの企画について

- オンライン上での意見交換
- 泉三校(泉館山、泉松陵) 昔からのつながりで連携をとりやすい
- ・各学校で発表者を決めてもらい、スライドなどで発表し合う
- ★SDGsに関連した発表のもの
- ・他校の発表を国際議会に出せば興味関心を持ってもらえる



図4 生徒探究活動内容2

## 連携校 9 金沢大学附属高等学校 ～探究活動について～

### 1. 本校の探究学習について

本校の総合的な探究の時間は、教員が開講する様々なテーマのゼミに生徒が所属し、高校1年生から3年生までが一斉に参加する形式（ゼミ形式と呼ぶ）で実施している。授業は校長と副校長と養護教諭を除く19名の教員がそれぞれ、自身の専門性や問題意識に応じて授業を展開し、生徒は各教員が掲げるテーマやビジョンをもとに、自身が3年間所属するゼミを1年次に選択する。

この制度は2022年度から開始し、本年は4年目となる。今年度の開講ゼミは下記の通りである（以下は2025年4月に1年生に配布した資料である）。

#### (1) 探究ゼミ一覧

文学ゼミ	<p>人文に関わることであればどのようなことでも可能で、文学に関することや読書推進、図書館の有効利用などに関わることがしたい人は特に大歓迎です。また、短歌や詩、小説などの創作活動などにも、積極的な支援をしていきたいと考えています。週に一時間くらいは様々な文献を読みたい方、創作意欲がある方、何かを変えてみたい方、戦争について思いを馳せたい方などを募集します！</p> <p>1年次は図書館の使い方や金沢と文学の関わりなどを学ぶ機会を作りながら「探究とは」を考え、2年次は1年生のフォローをしながらやりたいことを決め、3年次は自分の探究を進めていくような形で進めていきます。</p>
教育ゼミ	<p>教育に関わる内容ならなんでも可。広義の教育にかすっているだけでも可です。教員志望、教育学に興味がある人、現状の教育に不満がある人歓迎。担当教員は現在ボードゲーム・カードゲームの教育的効果について関心を持っているため、ボードゲームやカードゲームを活用したアイスブレイクやゼミ生同士の交流を行うことがあります。また、ゼミ生が作成したボードゲームやカードゲームのテストプレイもゼミ内で行いたいと考えています。キーワード：エデュケーション2030、OECDラーニングコンパス、学校教育のニューノーマル、リカレント教育、ゲーミフィケーション、教育工学、ゲーム制作</p>
地理・歴史ゼミ	<p>地域の地理・歴史に関わるテーマ（関係人口、地域活性化や地域おこし、地域の歴史、地域の伝統文化など）を中心としたゼミです。地域の切り口からグローバルな課題に視野を広げ、考察を深めていきます。はじめは基本的な文献を読み、その後、それぞれテーマを立てて、対話をしながら進めていきます。</p>

<p>社会科学 ゼミ</p>	<p>【社会学研究】メディアの変容が社会に与える影響など社会科学を中心とした探究（社会の進展発達の中で生まれてくる日常生活の変化，利便性や弊害について）グループ，または個人でテーマ設定しドキュメンタリー作成または個人研究活動。初月はメディア論について探る。</p> <p>発言しなければ意味はないので，本ゼミはこのテーマで探究したいという熱意と，ツッコミ力のある人が来てください。</p> <p>1年次：研究基礎（指定リストから図書を購入または貸出してもらいます。），研究テーマ設定，研究設計</p> <p>2年次：研究調査，データ収集</p> <p>3年次：論文（他ゼミからの移籍でかつ校外発表や論文にできない研究の場合は，発表成果物の作成）</p>
<p>実験体験 数学ゼミ</p>	<p>実験体験数学ゼミ。数学には，人類が「既に分かっていること」と「まだ分かっていないこと」があります。このゼミでは，いわゆる未解決問題を体験したり，近年解決した問題，全世界協働のプログラムについて学びます。「プリンキピア」や「ユークリッド原論」などの原本に触れ，学びの成果を金沢市の算数・数学チャレンジクラブで小中学生に伝えていきます。</p>
<p>人と数学 ゼミ</p>	<p>人と数学をテーマに探究する。</p> <p>例えば，渋滞の具体的な解決の提案，最適な資産運営の方法とは？過疎地域における未来への可能性，金沢の井戸に関する調査とアイデア，もてなしドーム解体計画など，人や社会を対象に，数学的な手法を用いて，探究を進めていくゼミです。</p> <p>以下，メンターが興味あるテーマです。やってみたい人はぜひ。</p> <p>ゆるめテーマ：【選挙をグローバルに考える：1人】，【プログラミングと社会：1人】</p> <p>以下，引継ぎテーマ探究として掲げます。やってみたい人はぜひ。</p> <p>強めテーマ：【平和町プロジェクト：1人】，【部分的インクルーシブ教育（特別支援との協働探究）：1人】</p> <p>【食の観点で見直す金沢観光：1人】</p>

<p>数理科学 自由探究 ゼミ</p>	<p>【数理科学自由探究ゼミ】</p> <p>教員が面倒を見ることができる範囲（主に数学，物理，化学）で自由にテーマを設定し，探究します。</p> <p>日本数学 A-lympiad の過去問探究，現実事象を統計的な手法で解析して探究を深めるデータサイエンス探究，Python などでのプログラミングを活用して物理現象をシミュレーションする計算物理学探究などが考えられます。</p> <p>グループ単位（3～4人）での探究を推奨します。</p>
<p>数学教育 探究ゼミ</p>	<p>「共通テストの数学の問題を当てよう！」…ただただ問題を解いていても，問題を“当てる”ことはできません。“高校生にどんな力が求められているのか”，“数学教育を通してどんな力をつけさせたいのか”を考え，分析していく必要があるでしょう。共通テスト，センター試験，海外の入試問題，A-lympiad，数学オリンピックなどを題材に，探究を進めていきます。</p>
<p>自然科学 ゼミ</p>	<p>物理・地学，AI，データサイエンス，3D-CAD 等に関係することなら何でも可能（今年度，化学の研究は募集しない）。ゼミ参加者は自分で取得したデータから何かを発見したり，新しいモノを生み出すことを目標とする。個人でもグループでも可能。</p> <p>その他にも，人工衛星設計コンテストへの参加，理工系科目のジェンダー・ギャップの調査や分析，金沢城下町や用水の研究，バレーボールの運動生理学的，戦術的な研究なども可能。探究の成果を外部で発表することを求める。</p>
<p>生物ゼミ</p>	<p>○『生物』に関係するテーマを1人1つ設定し，主体的に探究活動をおこなう。（原則，教員からのテーマ提示はしない。グループ探究ではなく個人探究を求める。）</p> <p>○探究テーマは，「倫理的問題がなく，高度な施設設備等を必要とせず，安全に探究できるもの」に限る。また，自身の探究活動の成果を積極的に発表しようとする姿勢を求める。</p>
<p>スポーツ 探究ゼミ</p>	<p>スポーツの楽しみ方は「する」だけではない！「みる」「支える」「知る」という多角的な観点から関心のある分野について探求しよう！ex）○食事と運動の関わりや体づくり：スポーツ栄養学○治療や予防，リハビリなど医療の観点：スポーツ医学○心の側面から見るスポーツ：スポーツ心理学○経済経営をスポーツ分野に応用：スポーツ経済・経営学など。自他や社会に与える影響などについてチームを組んで仲間と協働し考察，実践，検証を進める。スポーツについて関心や疑問がある人は</p>

	<p>「なに」を探求するかでなく、「なぜ」探求したいのか目的を見出して追及しよう！</p>
スポーツ科学ゼミ	<p>基本的にはスポーツ科学(特にスポーツバイオメカニクスってやつ)をやってるんだけど、それ以外にもスポーツに関することならなんでもいいよ～(°ω°)ノ。今年度からはスポーツ以外に心理学にも力を入れたいんだよね。人の気持ちは行動に現れるから面白そうだよ(´▽`*) ヲフみんなの気持ちを操れるかも！？</p> <p>これまではグループで活動してたんだけど、この際、個人でもやっちゃえ！ということでもOKです(*^*)v</p> <p>参考までにこれまでは「バレーボールのサーブ動作の研究」「e-sportsは体育の授業で行えるのか」などをやってたよん。このテーマやっていいかなあと迷ってるなら相談してみてねっ(´っ・ω・)っ</p>
スポーツ・健康ゼミ	<p>主に『スポーツ』や『健康』に関する探究を行います。</p> <p>WHOは「健康とは、身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態であり、たんに病気や虚弱でないことではない」と定義しています。また、健康にまつわる学問には、健康科学はもちろん、健康心理学、栄養学、スポーツ健康学など様々です。老若男女問わずさまざまな年代に向けたヘルスケアサービスの提供や自分の健康について考えたいなど、健康について多面的に探究します。</p> <p>その他、自分の興味のある分野についての探究も可能です。</p>
言語探究ゼミ	<p>社会的問題に対して国際的に考える自由探究ゼミになります。</p> <p>最終的に英語での発表ならびに英語でのレポート作成が義務になります。</p> <p>もしかしたらシンガポールの学校との協働研究になる可能性があります。その場合には、ゼミにいる人でグループ(2～3人)を組んで取り組んでもらうこととなります。</p> <p>NJCとの協働研究になった際には、2～3か月に一度の英語でのオンライン会議も上記の義務に加算されます。</p>
文化比較探究ゼミ	<p>『観光』『暮らし』を主なキーワードに、日本と世界の間にあるズレに注目して探究を行います。テーマは自分の経験、身近なコミュニティから見つけ、自らの力で調査・実践・検証を進めます。たとえスケールが小さくても、「具体的な誰か」の幸せに貢献できる探究をしたいと思う人に加わってほしいです。</p>

文系 SCHOLA ゼ ミ	【SCHOLA 探究ゼミ】SCHOLA 活動を通じて、探究を深めていこう！というゼミ。昨年度は「模擬裁判選手権」と「エコノミクス甲子園」に挑戦し、今年度も卒業生のバックアップ体制あり！裁判の傍聴といった課外活動も実施予定！今年度は「模擬国連」や「言語学オリンピック」その他、各種コンクール・コンテストに挑戦予定！異学年ゼミの強味を生かしてノウハウを継承し、附属の文化にしていきたいと思います！「こんなのやってみたい！」という人は気軽に相談してみてください！
---------------------	--

## (2) 探究ゼミの変遷

かつて本校は、学年ごとに担当者が探究のカリキュラムを考え、担任団を中心とする複数名の教員で授業を担当していた。SGH 事業では、4～5名程度のグループを組んで任意の研究に取り組む「地域課題研究」と「グローバル課題研究」、国連大使として国や地域の利害対立を認識しつつ“合意”形成を目指す「模擬国連」、自身の高校生活と卒業後の進路を考える「グローバル・キャリアパス」などがあった。これらは一定の成果を収めた一方で、担当者に過度な負担が生じたことや、探究のテーマが担当者の教科や分野に偏ったことなどに対して課題があった。こうした課題を解消する方策として、6年前から前述のようなゼミ形式の探究に切り替えた。生徒は自身の探究に対して責任を持つように伝え、各教員は自らの専門性を活かし、幅広い探究指導が可能となるようにした。

## (3) 研究企画部の役割

研究企画部は本校における研究関係の行事・企画を担当する部署であるが、総合探究などの授業も統括している。総合探究については、年度ごとにゼミ運営の指針やゼミ分けなどを行い、それ以降は各ゼミの担当者にお任せしている。本日の中間発表会も、通常のゼミ活動を行うか、中間発表に参加するかはゼミに裁量がある。2月に行われる「学びの共有の日」では、すべてのゼミが発表を行うようにしている。

本校では、探究は教員全員が行うものであるため、探究を担当する特定の先生 or 特定の部署というものがない。これはSGH やWWL 事業を経てたどり着いた結果であるが、現状制度の課題もある。今年度は、ゼミの変更について制度の変更を検討し、1年次から2年次に上がる段階でゼミ変更を可能とする条件を整備している。研究企画部はそういった課題の修正や改善も担う部署である。



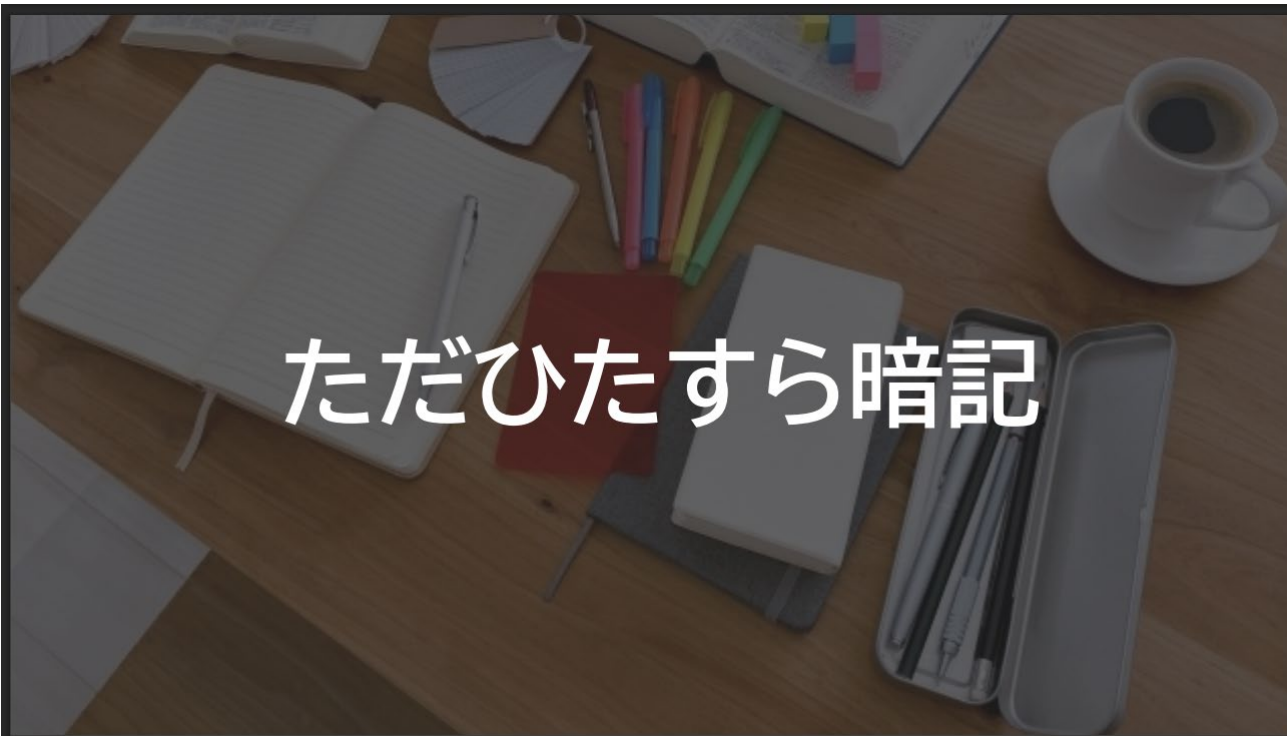
# ボードゲから始める暗記ゲー撲滅計画

金沢大学附属高校2年 喜多輝

「勉強」は好きですか？

主体的で、わくわくする学習

# まなび



ただひたすら暗記

僕を救ってくれたもの



## 世界を旅するパスポート



全部まなびにしちゃおう



# 楽しいはずの社会科

## Consider(手段の検討)



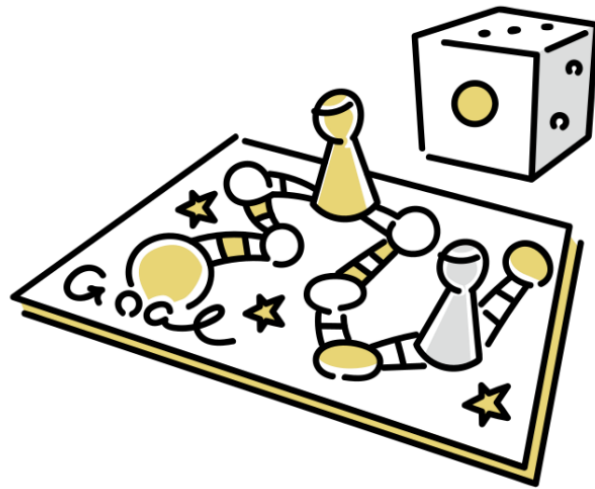
&



面白くない上に何のためにやるかわからないこと

※社会科が苦手、嫌いな人から見た意見です。

# ボードゲーム



## 2. 前提を疑ってみる

## じゃあ自分でデータ取ろう！



### Investigate(調査) 自分でアンケートを作成

**目的** 生徒、教職員が社会科に感じている課題、不満を明らかにする

- ✓ **手法** Google formを各校に配布、ヒアリング
- ✓ **対象** つながりのある中学校、高校、外部のコミュニティ(学生団体など)
- ✓ **現状** 軽井沢風越学園、石川県立鶴来高校、金沢大学附属中学校、外部コミュニティで回答完了



## まとめ

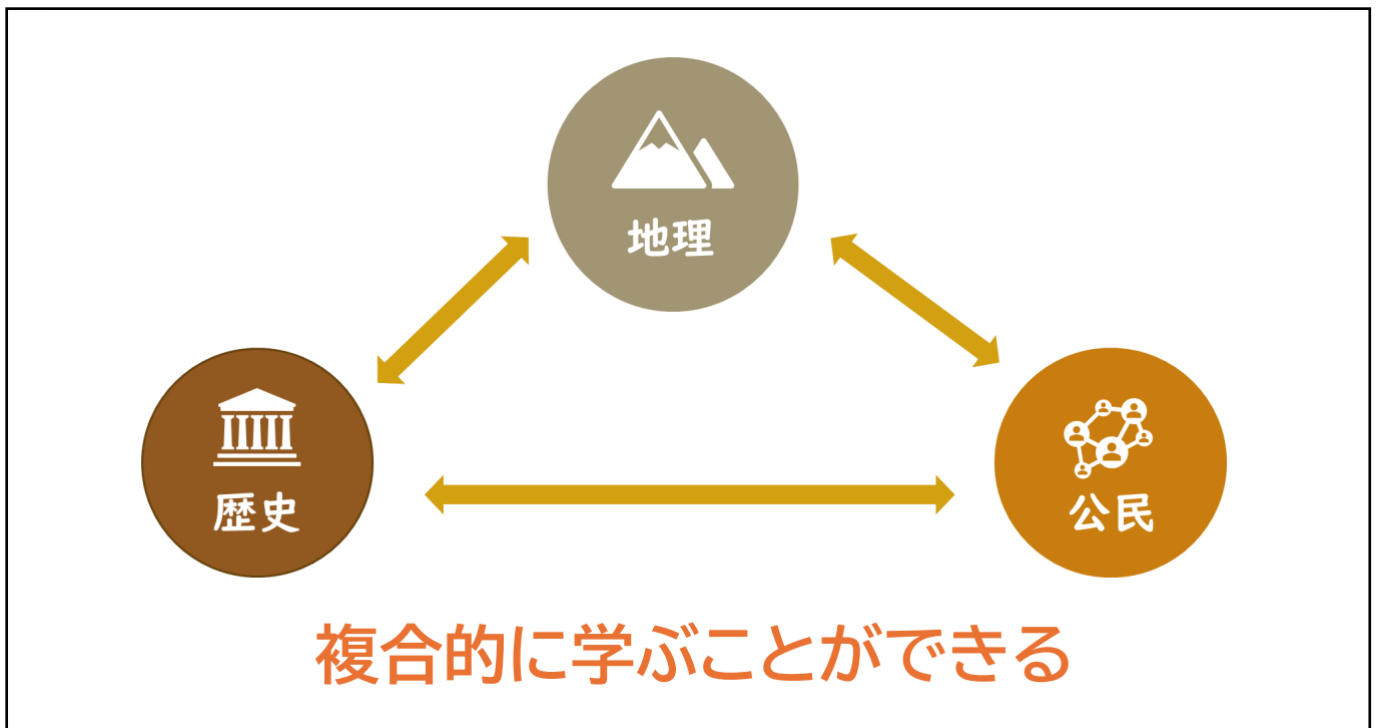
- ✓ 多くの生徒が社会科を嫌いというわけではないが、より増やしたい
- ✓ 人生を豊かにする認識はあるが、自分からは取り組めていない
- ✓ 授業では入試に対応しきれず、自主学習は暗記一色で辛い



## 3. なんでゲーム？どんなゲーム？



あそべば「社会」がみえてくる



- ・ゲームは**視点**でデザインする
- ・ゲームを面白くするには**ジレンマ**が大切
- ・もっと**シンプル**に





先生！おれ51点取ったんですよ！



本気で頑張れば「社会」をちょっと動かせる



さらに教育効果を追求するための問い

既存の知識と新情報を組み合わせて、  
**推論**を展開させるためには？

# 新製品の開発



## 5. 手段としてのビジネス



## 6. 歩みの集大成、マイプロへ

同じ志を持つ仲間と出会い協働するために、  
**Advanced、そして全国Summitへ**



まなびでもっとわくわくしよう



**拠点校 仙台城南高等学校 ～探究活動について～**

**(1) 探究学習年間計画**

本校では「総合的な探究の時間」の年間計画を以下のように定めている。

	1 学年	2 学年	3 学年
科目名	探究基礎	探究 I	探究 II
科目のねらい	自己と多文化社会を見つめる	グローバル社会と学びをつなげる	サステナブル社会へ踏み出す
単位数	1	3	1
主な学習内容	<p><b>【前期】</b>  <b>ライフデザインプログラム</b>                      ○これから経験するライフステージと社会の変化を見据えながら、自己の考えを見つめ、多様な考えに触れる</p> <p><b>【後期】</b>  <b>社会課題基礎調査</b>                      ○現代の社会課題を調べ、自分の主張を発表するとともに、文献・Web・アンケートによる調査方法の基礎を学ぶ</p>	<p><b>【前期】</b>  <b>地域リサーチプロジェクト</b>                      ○地域の課題を調べ、SDGs とのつながりやその対策について発表するとともに、地域団体へのインタビュー調査を行う</p> <p><b>探究ミニカレッジ</b>                      ○大学の各学問分野での学びについて大学の先生から講義を受け、レポートを作成する</p> <p><b>【後期】</b>  <b>地域アイデアプロジェクト</b>                      ○これからのサステナブル社会に向けた課題を調べ、その解決策を発表するとともに、地域企業へのフィールドワーク調査を行う</p> <p><b>SDGs アイデアプロジェクト</b></p>	<p><b>【前期】</b>  <b>進路研究ゼミ</b>                      ○今までの探究活動を通して将来の社会貢献をイメージし、進路希望達成に向けて主体的に行動する方法を学ぶ</p> <p><b>【後期】</b>  <b>卒業論文作成</b>                      ○今までの探究活動を通してサステナブル社会への自分の主張と卒業後の自分の社会貢献を結び付けて論文を作成する</p>

## (2) 探究学習指導計画と評価

### 1) 探究基礎

#### 【指導計画】

前期 1 単位 約 15 時間			
ライフデザインプログラム「これからの未来と自分を考えよう」			
単元の目標 <b>将来の社会の変化を見据えたライフデザインを作成する活動を通して、</b> <b>今後予想される社会課題が自分たちの身近な生活に深く関わっていることを理解し、</b> <b>自らの生き方や社会課題の解決に対して貢献するための行動について考えとともに、</b> <b>自ら社会に参画しようとする姿勢を身につける。</b>			
観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価	<p>超高齢社会での働き方や家族、地域の在り方について理解している。</p> <p>今後広がりを見せるだろう社会課題や技術革新を見据え、持続可能な取り組みを創造していくことの大切さを理解している。</p> <p>他者の生き方や学び・労働への考え方に触れ、多様な価値観を受け入れることの大切さを理解している。</p>	<p>今後変化していく社会状況を踏まえつつ、自らの生き方を社会貢献の視点から、論理的に表現し、学習活動を振り返って、学習や生活に生かしている。</p> <p>グループに応じた関わり方を考え、円滑で活発な話し合いを目指した発言をしている。</p>	<p>活動を通して、自分の個性や特徴を見つめながら、多様な意見を受け入れ、尊重しようとしている。</p> <p>社会の一員としての自覚を持ち、積極的に参画しようとしている。</p>

#### 【評価の観点】

小単元（時数）	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
将来の社会の変化を見据えたライフデザインを考えよう（12時間）	動画教材やプリントを活用しながら、ライフデザインワーク冊子に自分の考えを記入し、クラスメイトに考えを発表する。 ①人生を見通す ②自分を知る ③自立と共生を考える ④学ぶ ⑤働く ⑥二人で共に生きる ⑦子供を育む ⑧高齢社会を生きる ⑨人生の先輩に聞く ⑩将来設計図を考える	○	○	○	ライフデザインワークの記入状況  班での発表の積極性  他の意見に共感する姿勢
仕事とそりやがいにについて考えよう（3時間）	Web サイト『キャリアガーデン』を活用しながら、将来夢宣言に自分の考えを記入する。	○	○	○	将来夢宣言の記入状況

## 2) 探究 I A

### 【指導計画】前期

前期 1 単位 約 15 時間			
<b>地域リサーチプロジェクト「社会貢献について考えよう」</b>			
単元の目標			
<p>社会の地域課題への取り組みについて調査するとともに、NPO などの団体訪問、ボランティア講演、ボランティア体験活動とプレゼンテーション発表を通して、</p> <p>実際に地域課題に対して取り組まれている事例やその目的を理解し、</p> <p>無償で他人に貢献することと、社会の中での自分自身の存在意義について考えるとともに、</p> <p>社会貢献と働くことにやりがいを感じて、自発的に社会に参画していこうとする態度を身につける。</p>			
観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価	<p>自分たちの地域の課題に対してボランティア団体がどのように課題解決に取り組んでいるのか、またその取り組みの目的ややりがいについて理解している。</p> <p>基本的な調査方法を理解し、目的に応じて適切に実施している。</p>	<p>社会の一員として、課題に対してどのような取り組みができるか考えることができる。</p> <p>無償で他人や社会に貢献することの意義について、考えることができる。</p> <p>グループに応じた関わり方を考え、円滑で活発な話し合いを目指した発言をしている。</p>	<p>活動を通して、自分の個性や特徴を見つめながら、多様な意見を受け入れ、尊重しようとしている。</p> <p>社会貢献にやりがいを感じて、自発的に社会に参画しようとしている。また、学習や生活に活かそうとしている。</p> <p>自分の意志で地域課題と向き合い、自他のよさを認めながら、協働的に意見をまとめようとしている。</p>

### 【評価の観点】

#### 前期

小単元(時数)	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
グループ決め (1 時間)	自分たちの興味のあるカテゴリを選択し、グループを決める。			○	班編成への積極性
地域・社会人調査 (4 時間)	訪問する法人や団体に関して、活動内容や目的などを調べる。	○			プリントの記入内容
質問準備・施設訪問 (2 時間)	調べた内容をもとに、活動目的やその他質問を準備し、実際に訪問し、インタビューする。		○	○	訪問・インタビュー活動の様子 経験からの振り返り
探究マップ作成 (2 時間)	事前調査、施設訪問を踏まえて社会人としてのやりがいや、働く意味を考え、まとめる。		○	○	探究マップの記入内容 班内の意見交換の活発さ
ポスター作成 (3 時間)	今までの調査内容をもとに Keynote でポスター資料を作成する。	○	○	○	ポスター資料の内容 班内での分担状況
ボランティア活動 (1 時間)	実際にボランティア講演・活動に参加し、社会貢献について考える。		○	○	ボランティア活動の様子 経験からの振り返り
ポスターセッション (2 時間)	各クラスでポスター資料を活用した発表活動を行う。			○	発表内容 聴講の姿勢 レポートと自己評価

【指導計画】後期

後期 1単位 約15時間			
SDGs アイディアプロジェクト「台湾と日本を比較し、これからの日本に必要なアクションを考えよう」			
単元の目標			
SDGs と学問分野の学びを調査し、日本と海外で社会を良い方向に導いている取り組みを比較する活動を通して、世界全体で抱える課題やその課題解決のために社会の変革を担う人材が必要であることを理解し、自らが社会の変革を担う人材として今後どのような力が必要なのかを考えるとともに、積極的に社会に貢献しようとする姿勢を身につける。			
観 点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評 価	SDGs や大学での学び、社会的企業の活動などが全て社会の課題解決に向けて取り組まれていることを理解している。  比較考察を理解し、それに必要となる情報を適切に収集している。  日本と海外での取り組みの違いにはその国の文化や慣習、歴史などが深く関わることに気付いている。	SDGs や大学の学びのキーワードから日本と海外の取り組みを比較できる適切なテーマを見つけている。  様々な取り組みに触れる中で、今後の日本に必要な取り組みを導き出している。  自分たちの比較考察とその根拠としている情報の合理性をよく分析している。  相手や目的、意図に応じて、論理的に表現し、学習活動を振り返って、進路研究に結びつけている。	活動を通して、自分の個性や特徴を見つめながら、多様な意見を受け入れ、尊重しようとしている。  自分の意志で SDGs や興味ある学問分野と向き合い、自他のよさを認めながら、協働的に意見をまとめようとしている。  社会の一員としての自覚を持ち、積極的に参画しようとしている。

【評価の観点】後期

小単元（時数）	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
グループ決め 学問分類選択 (2時間)	興味あるカテゴリーを軸に班編成を行う。 メンバーと座席を決めたのち、学問分類と関わる SDGs の目標を絞り込む。			○	班編成への積極性
基本講演と事前調査 (6時間)	SDGs の概要に関する講演を聞き、Web 調査を通して班の比較するテーマを絞り込む。	○			プリントの記入内容
テーマ設定 探究マップ作成 (8時間)	事前調査の情報をもとにテーマと比較する国を決める。Web 調査を基本としながら、比較国の文化や歴史などと比較内容を調査する。	○	○	○	探究マップの記入内容 班内の意見交換の活発さ
台湾研修旅行 (約4時間)	全体行程を通して、テーマとの関連を探る。 SDGs コースにてカテゴリーの内容を学ぶ。		○	○	インタビューの内容 経験からの振り返り
発表スライド作成 (7時間)	今までの調査内容をもとに Keynote で発表資料を作成する。	○	○	○	ポスター資料の内容 班内での分担状況
発表動画作成 (3時間)	発表動画を録画して提出。			○	発表内容 発表の姿勢 レポートと自己評価

### 3) 探究 I B

#### 【指導計画】前期

前期 2単位 約30時間			
探究ミニカレッジ「大学の学びに触れよう」			
単元の目標 様々な学問分野の大学の先生から、各学問分野の概要となる講演を聞き、レポートを作成することを通して、多様な学問分野があり、その専門性を深めていく大学での学びや論文作成の基礎を理解し、大学で学ぶことと社会課題とのつながりについて考えるとともに、先を見据えて計画的に物事を進める姿勢を身につける。			
観 点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評 価	<p>大学での学びには多様な学問分野があり、その専門性を深めていくことの必要性を理解している。</p> <p>論文やレポート作成の基礎を理解している。</p> <p>講義の内容から重要語句を選び出し、その語句についての自ら学びを深めている。</p>	<p>大学で学ぶことと社会課題とのつながりを考えることができる。</p> <p>講義と自分で調べた内容のつながりや違いを考え、体系的に整理することができる。</p>	<p>活動を通して、自分の個性や特徴を見つめながら、多様な意見を受け入れ、尊重しようとしている。</p> <p>社会貢献にやりがいを感じて、自発的に社会に参画しようとしている。また、学習や生活に活かそうとしている。</p> <p>先を見据えて計画的に物事を進める姿勢を身につけようとしている。</p>

【評価の観点】前期

小単元(時数)	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
様々な学問分野の大学の先生から、学問分野の概要と最先端研究を学び、レポートを作成することを通して、進路研究を深めよう	<p>○1校時目に大学の先生からキーワードの学問分野の最先端では、どのようなことが研究テーマとなっているのかを聞く。</p> <p>○2校時目に講義内容から重要語句を選び、それについて自分で調べてレポートにまとめる。</p> <p>講義① AI (東北工業大学)</p> <p>講義② ロボット (東北工業大学)</p> <p>講義③ 建築 (東北工業大学)</p> <p>講義④ 環境・エネルギー (東北工業大学)</p> <p>講義⑤ 産業デザイン (東北工業大学)</p> <p>講義⑥ チーム医療 (東北化学圏大学)</p> <p>講義⑦ 看護と地域包括ケアシステム (東北化学圏大学)</p> <p>講義⑧ まちづくり (東北工業大学)</p> <p>講義⑨ 国際・インバウンド (東北工業大学)</p> <p>講義⑩ 経済・経営 (東北福祉大学)</p> <p>講義⑪ 教育 (東北福祉大学)</p> <p>講義⑫ 健康・スポーツ (東北工業大学)</p> <p>講義⑬ 居住環境デザイン (東北工業大学)</p>				<p>講義の様子</p> <p>レポートの記入状況</p> <p>進路研究の深まり</p>

## 【指導計画】後期

後期 2単位 約 27 時間			
地域アイデアプロジェクト「地域社会の課題解決につながる研究アイデアを考えよう」			
単元の目標			
<p>企業フィールドワークでの経験を活かしながら地域の課題とその解決アイデアを考える活動を通して、実際に働いている人が感じている課題やその要因、現状での対応を理解し、</p> <p>今まで学んできた SDGs や社会課題とのつながりや課題解決のアイデアについて考えるとともに、</p> <p>社会に変革を起こす行動を自ら提案する姿勢を身につける。</p>			
観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価	<p>今まで学んできた社会課題と実際に働いている人が感じている課題とのつながりを理解している。</p> <p>課題の要因と解決に向けたアイデアにつながる情報を適切に収集している。</p> <p>フィールドワークを通して、働いている人が感じている課題や対応策と Web からの情報にはギャップがあることに気付いている</p>	<p>関心ある職種分野が抱える課題とフィールドワーク先の企業と自ら考えた解決アイデアとのつながりを想定し、計画性のある調査を進めている。</p> <p>課題の要因や現状での対応を調査し、よく分析したうえで解決アイデアを提案している。</p> <p>相手や目的、意図に応じて、論理的に表現し、学習活動を振り返って、進路研究に結びつけている。</p>	<p>活動を通して、自分の個性や特徴を見つめながら、多様な意見を受け入れ、尊重しようとしている。</p> <p>自分の意志で関心ある職種分野と向き合い、自他のよさを認めながら、協働的に意見をまとめようとしている。</p> <p>社会の一員としての自覚を持ち、積極的に参画しようとしている。</p>

【評価の観点】後期

小単元（時数）	ねらい・学習活動	知	思	態	評価方法
グループ決め 学問分類選択 (2時間)	興味ある職種分類を軸に班編成を行う。 メンバーと座席を決めたのち、職種分類と関わる6Qsを絞り込む。			○	班編成への積極性
事前調査 (6時間)	Web調査を通して班でその職種が抱える課題を絞り込む。	○			プリントの記入内容
テーマ設定 探究マップ作成 (8時間)	事前調査の情報をもとに解決アイデアを考える課題とフィールドワークする企業を決める。Web調査を基本としながら、解決アイデアにつながる情報を収集する。	○	○	○	探究マップの記入内容 班内の意見交換の活発さ
企業フィールドワーク(4時間)	探究マップをもとにフィールドワークを行い、自分たちの調査過程を基にインタビューする。		○	○	フィールドワーク・インタビュー活動の内容 経験からの振り返り
ポスター作成 (7時間)	今までの調査内容をもとにKeynoteでポスター資料を作成する。	○	○	○	ポスター資料の内容 班内での分担状況
ポスターセッション (3時間)	1学年と合同でポスター資料を活用した発表活動を行う。			○	発表内容 聴講の姿勢 レポートと自己評価

### (3) 探究活動の3年間の総括と今後の展望

本校におけるWWL事業は、普通科を対象として実施しており、各学年150～200名程度の生徒が参加している。本事業においては、探究活動を教育課程の中核に位置づけ、3年間を通じて体系的に取り組んできた。本校の探究活動は、主として地域課題に着目したテーマ設定を基盤として展開してきた。生徒が身近な社会の課題に目を向け、自ら問いを設定し、情報収集や分析、考察を行うことを重視している。また、年度末にはポスターセッションを実施し、各自の探究成果を発表・共有する機会を設けている。さらに、WWL事業の趣旨を踏まえ、活動全体を通じてグローバルな視点の涵養を意識した指導を行ってきた。

これらの取組の成果として、まず生徒のプレゼンテーション能力の向上が顕著に挙げられる。探究活動の過程において発表の機会を積極的に設けるとともに、他校の探究発表に触れる機会を確保したことで、生徒はより高い水準を意識しながら表現力を高めることができた。また、探究活動を通して培った課題設定力や論理的思考力、表現力は、進路選択や受験活動においても活用されており、その結果として進路実績の向上にも寄与していると考えられる。

一方で、今後の課題も明らかとなっている。第一に、地域との連携の更なる強化が必要である。フィールドワークの実施等により一定の成果は得られているものの、活動の質を一層高めるためには、地域の関係機関や団体との継続的かつ発展的な協働体制の構築が求められる。第二に、カリキュラム運営上の課題が挙げられる。現状では、担当教員間で指導の習熟度に差が見られ、それが生徒の学習機会の不均衡につながる可能性がある。この点は、組織的な改善が必要である。

今後の展望としては、これらの課題を踏まえ、持続可能かつ効果的な探究活動の実現を目指す。具体的には、地域連携の枠組みを強化し、実社会との接続をより意識した学びを深化させるとともに、指導内容や評価方法の標準化・共有を進め、教員間の負担軽減と指導の質の均質化を図る。また、探究活動全体のカリキュラムを体系的に整理し、再現性の高い指導体制の構築を目指すことで、WWL事業終了後においても自走的に発展し得る教育実践として定着させていく方針である。

以上のように、本校の探究活動は一定の成果を上げてきたが、今後も継続的な改善を図りながら、生徒の資質・能力の育成に資する取組として更なる充実を図っていくものである。



## 地域で支える 子供達の多様な生き方

学校外の学びと地域の見守りで、子供に多様な居場所を

仙台城南高校 探求IB  
普通科総合進学コース2年 / 発表者：曾根知也 齊藤士温

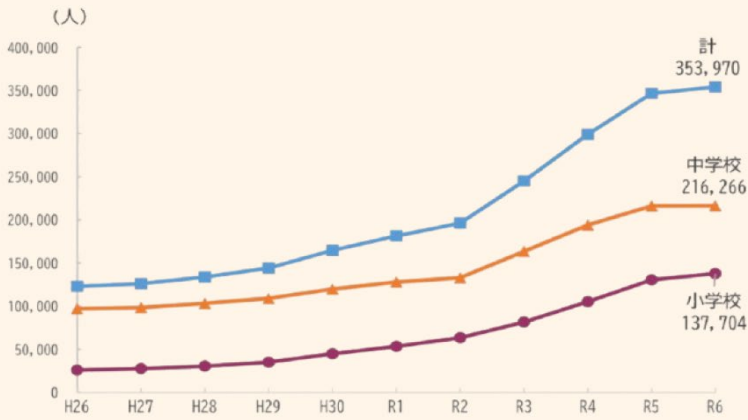
### 研究概要

#### 目的

- ▶ 学校に行けない・行きたくない子どもに対して私たちに何ができるかを考える
- ▶ 現状を知り、関係性を理解し、課題を見つける
- ▶ 今後の取り組むべき課題を明確にする

## 研究結果/不登校の現状と示唆

### 不登校児童生徒数の推移



小中合計 不登校生徒数

**353,970**  
人

↑ 増加傾向

### 地域の支援の選択肢 1



#### 適応指導教室

① 特徴

- ・市区町村が運営
- ・学校への復帰を支援
- ・学習支援を中心としている

対象：小中学生まで

#### 共通点

- ・不登校生徒の居場所となる
- ・メンタル面サポート
- ・学校との連携がある



#### フリースクール

① 特徴

- ・NPOなど民間団体が運営
- ・自分らしい学びと成長の実現
- ・多様なプログラムと柔軟な対応

対象：小学生～20歳程度

## 提案/今の私たちにできること

### 📖 高校の授業でボランティア体験

不登校の「学生」と対話・交流を通じて、相互理解を促進し、福祉の認知を広める取り組みを提案します。

### 🗨️ 交流内容

👤 不登校の学生との対話とコミュニケーション

📖 学習支援・宿題サポート

📅 行事やレクリエーション活動の手伝い

### 🕒 実施の工夫

- 🟢 事前学習: 不登校の現状・支援制度について学ぶ
- 🟢 校内広報: ポスター・SNSで活動を周知
- 🟢 安全配慮: 学校・保護者の同意を得る
- 🟢 振り返り: 活動後に学びを共有・発信

### ★ 期待効果

- ▶ 相互理解の促進と偏見の解消
- ▶ 学校外の学びの可能性を周知
- ▶ 福祉への関心と理解の拡大
- ▶ 地域コミュニティの活性化

## 結果と今後の展望

💡 今回の研究を通じて、福祉学だけでは収まりきれない様々な分野からの課題が関わっていることがわかりました

### 🟢 結論

不登校生徒数は増加傾向にあるが、一方で「多様な生き方」を支える居場所作りが進展している

課題は福祉だけでなく教育・地域・行政など、学際的なアプローチが必要である

## 名 簿

### 《AL ネットワーク委員》

(敬称略)

委員	氏 名	所 属 ・ 役 職
運営指導委員	千 葉 忠 幸	宮城県 総務部 私学・公益法人課 部副参事
運営指導委員	山 内 民	東北大学 教育・学生支援部 特任教授
運営指導委員	中 澤 宏 一	金沢大学附属学校園 管理運営部会長
検証委員	北 島 みどり	ゆずりは法律事務所 弁護士
検証委員	大 竹 裕 貴	ベネッセコーポレーション東北支社 学校事業統括責任者
カリキュラム アドバイザー	中 島 夏 子	東北工業大学 総合教育センター 准教授

### 《助言者》

氏 名	所 属 ・ 役 職
辛 島 彰 洋	東北工業大学 工学部 電気電子工学課程 教授
花 田 亜 弥	株式会社Jバイオフードリサイクル 管理室
長 門 紀穂子	株式会社河北新報社 教育・防災連携室
櫻 井 寛 也	株式会社日本旅行東北 営業統括部 担当部長
島 田 潤 悦	JICA 東北 市民参加協力課
佐々木 克 敬	東北工業大学 学修支援センター 学修支援教授

《連携校》

学校名	役職等	氏名	備考
八戸工業大学第二高等学校	教頭	出町 昌則	
	教諭	田代 誠	
	教諭	久保 圭慧	
聖霊学園高等学校	教諭	工藤 啓之	
	教諭	阿部 那津子	
盛岡白百合学園高等学校	教諭	成田 奈穂	
	教諭	國保 陽平	
東北文教大学山形城北高等学校	教諭	山村 美和	
	教諭	伊豆田 亮爾	
	教諭	丹 清貴	
福島成蹊高等学校	教諭	水谷 朋之	
	教諭	鈴木 翔馬	
宮城県仙台向山高等学校	教諭	小野 有美	
宮城県仙台東高等学校	教頭	齋藤 貴弘	
	主幹教諭	渡邊 哲	
宮城県泉高等学校	教頭	佐藤 匠	
	主幹教諭	横橋 裕介	
金沢大学人間社会学域 学校教育学類附属高等学校	教諭	金森 久貴	
国立臺南高級商業職業学校 (National Commercial Vocational Senior High School)			On Line 参加
台北市立大理高級中学校 (Taipei Municipal Dali High School)			On Line 参加

《協力校》

学校名	役職等	氏名	備考
宮城県仙台二華高等学校	実習講師	深澤 恭子	

《拠点校》

学校名	役職等	氏名	備考
仙台城南高等学校	校長	伊藤 俊	
	教頭	水戸 良広	
	教頭	遠藤 吉夫	
	事務長	尾上 智宏	
	主幹教諭	鈴木 理恵	
	教諭	相澤 茂紀	
	教諭	千葉 俊哉	
	教諭	藤井 久美	
	教諭	表 潤一	
	教諭	高橋 和輝	
	教諭	柳谷 諒	
	教諭	浦田 哲也	
	教諭	中野 智保	
	教諭	渡邊 優子	
	教諭	中里 加奈子	
	教諭	佐藤 寛子	
	教諭	尾形 駿	
	教諭	渡邊 重夫	
	教諭	鈴木 堅一郎	
	常勤講師	阿部 優也	
	非常勤講師	小泉 博	
	非常勤講師	脇坂 晴久	
	就職支援員	小野 博	
事務主任	大 學 麻子		
事務主任	伊藤 まり子		
事務職員	佐藤 ひなた		

## タイムスケジュール（一日目）

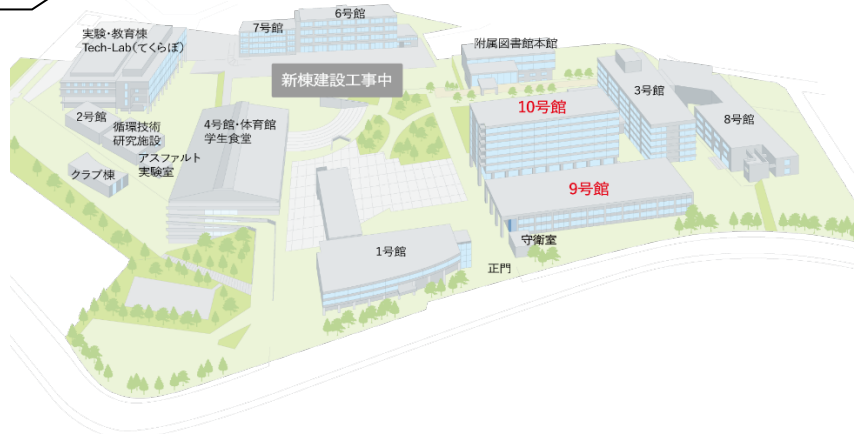
3月13日（金）

全体司会；金沢大学附属高等学校 喜多 輝

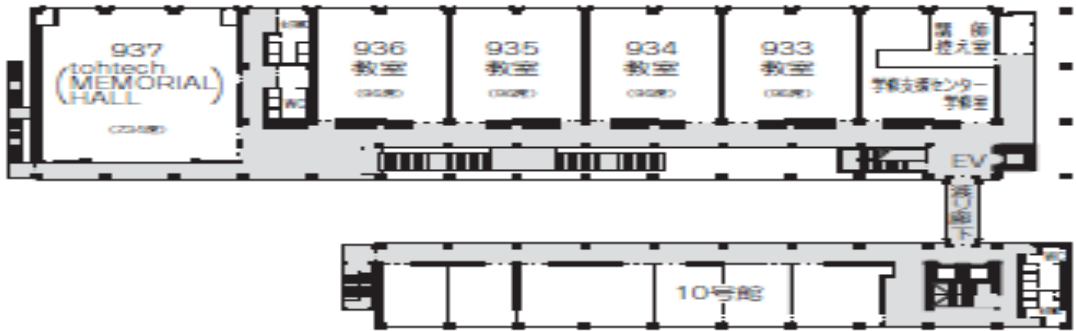
時 間	内 容	場 所
12:30 ~ 13:00	○受付 ※学校毎に引率教員が受付し、9号館3階937教室へ移動してください。	9号館1階入口
13:00 ~ 13:15	○開会行事 1) 開会宣言 東北文教大学山形城北高等学校…大久保柚歩 2) 開会のあいさつ 仙台城南高等学校 …… 校長 伊藤 俊 3) 生徒実行委員長挨拶 仙台城南高等学校 …… 草薙 奏 4) 出席者紹介、参加校紹介 仙台城南高等学校 …… 教頭 遠藤 吉夫	9号館3階 937教室
13:15 ~ 14:00	○全国高校生フォーラム成果発表 『Microplastic Pollution and Its Environmental Impact : A Case Study from Hachinohe, Japan』 八戸工業大学第二高等学校 2年 阿部 楓磨 ・ 附田 逸希 『What can we learn from kiwi?』 盛岡白百合学園高等学校 2年 齋藤 理沙 『Inclusive Education』 仙台城南高等学校 普通科特進コース1年 後藤 琉聖 ・ 佐藤 弘晃 仙台城南高等学校 普通科総進コース1年 小山内 希音 ・ 平野 麗紗	tohtech MEMORIAL HALL
	休憩・会場移動	
14:10 ~ 14:50	○分科会 探究活動成果発表 [ 前半 ] ① 科学 A …… 9 1 1 教室 科学 B …… 9 1 2 教室 科学 C …… 9 1 3 教室 ② 文化・教育 A …… 9 2 1 教室 文化・教育 B …… 9 2 2 教室 文化・教育 C …… 9 2 3 教室 ③ まちづくり A …… 9 1 4 教室 まちづくり B …… 9 1 5 教室 ④ 国際理解 A …… 9 3 4 教室 国際理解 B …… 9 3 5 教室	9号館1～3階 各教室
	休憩	
15:00 ~ 15:40	○分科会 探究活動成果発表 [ 後半 ]	9号館1～3階 各教室
15:40 ~	ミーティング	937 教室

# 会場図 (一日目)

東北工業大学 八木山キャンパス

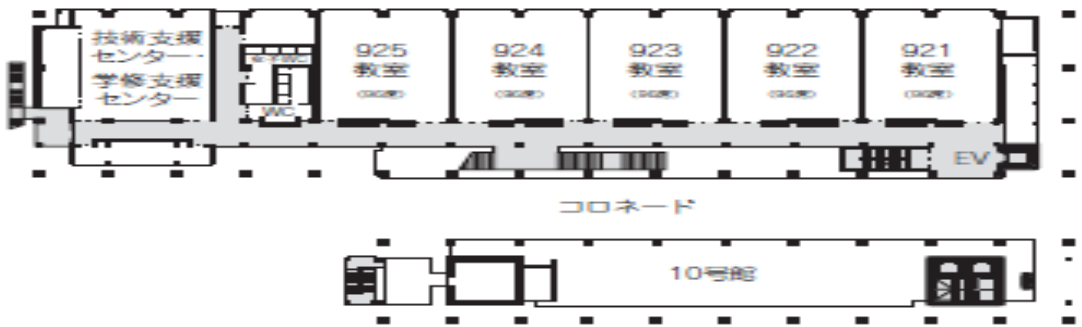


全体会                      本部      国際 B      国際 A



3 F

生徒実行委員                      文化・教育 C      文化・教育 B      文化・教育 A



2 F

まちづくり B      まちづくり A      科学 C      科学 B      科学 A



1 F

## タイムスケジュール（二日目）

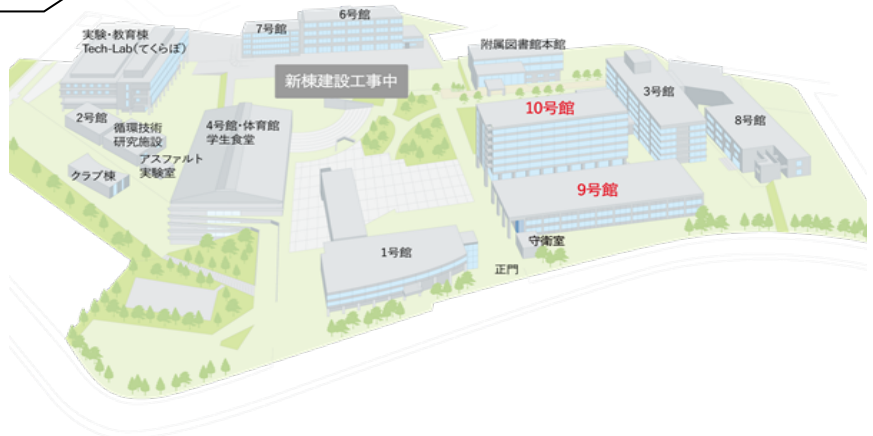
3月14日（土）

全体司会；金沢大学附属高等学校 喜多 輝

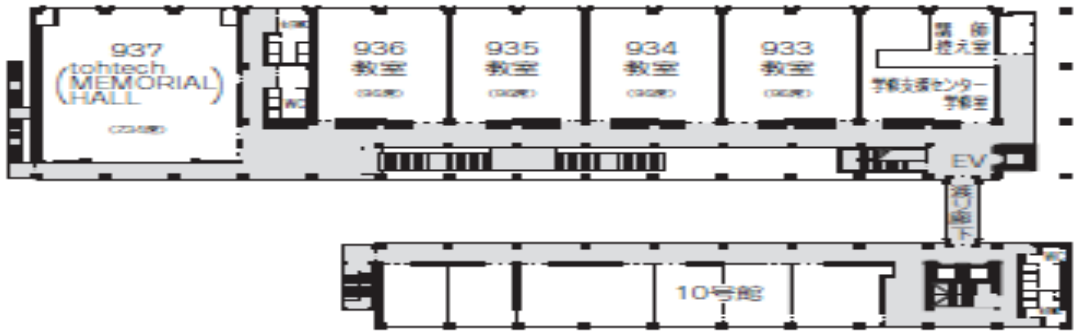
時 間	内 容	場 所
8:30 ~ 9:20	○受付 ※学校毎に引率教員が受付し、9号館3階937教室へ移動してください。	9号館1階入口
9:20 ~ 9:30 ~ 10:00	○事務連絡 ○生徒実行委員探究活動成果発表	9号館3階 937教室 tohtech MEMORIAL HALL
	休憩・会場移動	
10:10 ~ 12:00	○ワークショップ ① 科学①カテゴリー . . . . . 912教室 科学②カテゴリー . . . . . 913教室 ② 文化・教育①カテゴリー . . . 922教室 文化・教育②カテゴリー . . . 923教室 ③ まちづくりカテゴリー . . . . 914教室 ④ 国際理解カテゴリー . . . . . 935教室	9号館1~3階 各教室
12:00 ~ 13:20	○ポスター見学・昼食 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px 0;">前半40分：ポスター見学</div> ・八戸工大第二（5名） ・盛岡白百合（7名） ・聖霊学園（2名） ・仙台向山（22名） ・福島成蹊（4名） <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: fit-content; margin: 5px 0;">後半40分：ポスター見学</div> ・山形城北（6名） ・金沢大附属（1名） ・仙台二華（3名） ・仙台城南（27名） ・仙台東（7名）	10号館1階
13:20 ~ 14:20	○ワークショップ成果物アイデア代表者発表	9号館3階 937教室 tohtech MEMORIAL HALL
14:20 ~ 14:30	○運営指導委員・検証委員より	
14:30 ~ 14:45	○講評 東北工業大学 総合教育センター 准教授 中島 夏子	
14:45 ~ 14:50	○閉会宣言 福島成蹊高等学校 . . . . . 佐藤 大世	
14:50 ~	○写真撮影	
15:10 ~	○各部屋の片づけ	
15:20 ~	○ミーティング	
15:30	解散	

# 会場図 (二日目)

東北工業大学 八木山キャンパス

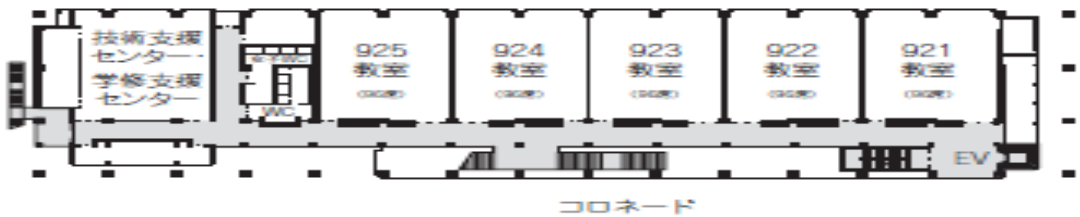


全体会                      本部      国際理解



3F

生徒実行委員                      文化・教育②      文化・教育①



2F

まちづくり      科学②      科学①



1F

**『Microplastic Pollution and Its Environmental Impact  
: A Case Study from Hachinohe, Japan』**

八戸工業大学第二高等学校 2年  
阿部 楓磨 ・ 附田 逸希

八戸は漁業が盛んであり、三陸復興国立公園の北部に位置する種差海岸や蕪島など美しい海浜を有している。私たちは、地域の産業と財産を脅かすマイクロプラスチックに向き合わなければいけないと考え、研究を継続している。

活動内容は、海岸のマイクロプラスチックの採取と質量測定、吸着物質の分析、生物体内への蓄積確認、微細マイクロプラスチックの回収方法の検討といった4つがメインとなる。

Hachinohe is known for its thriving fishing industry and beautiful coastline, including the Tanesashi Coast and Kabushima Island, located in the northern part of the Sanriku Reconstruction National Park. However, we must also face the threat posed by microplastics (MPs) to the region's industries and natural resources. We are committed to continuing our research on MPs in order to protect the local environment and economy.



# Microplastic Pollution and Its Environmental Impact : A Case Study from Hachinohe, Japan

## Introduction

Hachinohe, located in northern Sanriku Fukko National Park, is known for its thriving fishing industry and scenic coastal areas such as Tanesashi Coast and Kabushima. Concerned about the threat microplastics pose to local industries and natural resources, we have continued our research on microplastics (MPs).



Figure 1 Microplastic Sampling

## Research Activities

### 1. Sampling Microplastics

Since 2019, we have continued collecting microplastics (MPs) as part of the "Participatory International Environmental Education Program on Microplastics" led by JAMSTEC and Hachinohe Institute of Technology.

The sampling procedure is as follows<sup>1</sup>:

- A survey area of 12m × 40m was established (see Fig. 2), and sand was collected at 2-meter intervals both vertically and horizontally, to a depth of 2–3 cm.
  - The collected sand was placed in buckets, seawater was added, and the mixture was stirred.
  - Floating MPs were recovered after stirring and dried (density separation method).
  - After drying, the mass of MPs was measured.
- At the 2020 conference, we reported 0.459g of MPs collected from Tanesashi Coast in 2019, and 0.768g from Okuki Coast in 2020. In 2021, 0.140g was collected from the mouth of the Gonohe River, and last year, a second sampling at Tanesashi Coast yielded 0.087g. Tanesashi Coast is a popular tourist destination and undergoes more frequent beach cleanups than Okuki Coast. While ocean currents and other environmental factors may influence MP mass, we believe that the frequency of beach cleaning is one contributing factor<sup>2</sup>.

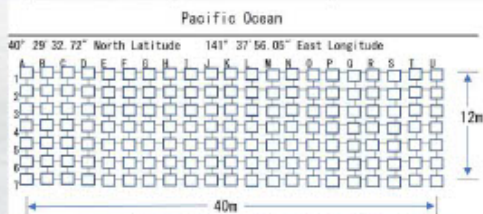


Figure 2 Survey area of Tanesashi Coast

## Research Activities

### 2. Analysis of Adsorbed Substances

Using Gas Chromatography-Mass spectrometry, we analyzed MPs collected from Okuki Coast. Persistent organic pollutants (POPs) were not detected, but long-chain alkanes were found, likely originating from seawater<sup>3</sup>.



Figure 3 Collected Microplastics

Table 1 Detected Substances

Estimated Substances (Alkanes)	
Tetradecane	C <sub>14</sub> H <sub>30</sub>
Hexadecane	C <sub>16</sub> H <sub>34</sub>
Octadecane	C <sub>18</sub> H <sub>38</sub>
Heneicosane	C <sub>21</sub> H <sub>44</sub>
Tetracosane	C <sub>24</sub> H <sub>50</sub>
Octacosane	C <sub>28</sub> H <sub>58</sub>
Tetratetracontane	C <sub>44</sub> H <sub>90</sub>

## References

- Rui, Nishizuka et al. (2020). *On Microplastics*. Presented at Joint Meeting of the Tohoku Area Chemistry Societies.
- Keiichiro, Shinyama et al. (2021). *On Microplastics (Second Report)*. Presented at the 2021 Joint Meeting of the Tohoku Area Chemistry Societies.
- Takeji, Chikamoto & Takeshi, Maitani (1981). *n-Alkanes in Plant-Based Foods*. *Journal of Food Hygiene*, Vol. 22, No. 6, pp. 547–550.

Special thanks to Professor Takehiko, Turuta for providing critical feedback and mentorship throughout the project.

## Research Activities

### 3. Biological Uptake and Accumulation

We raised medaka fish in water containing fluorescent microbeads. Dissection revealed fluorescence in the intestines and surrounding organs, indicating that MPs may affect internal tissues despite being excreted.

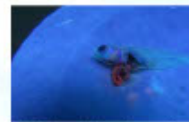


Figure 4 Medaka raised under normal conditions

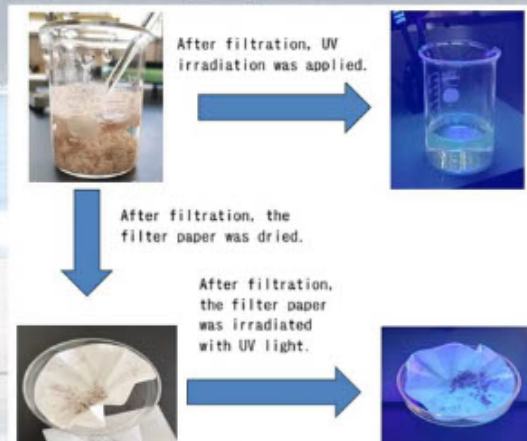


Figure 5 Medaka fed with fluorescent probes

## Research Activities

### 4. Precipitation Experiments

Building on previous work using colloidal properties, we tested polyglutamic acid (PGA) for MP aggregation. Under optimal conditions (30°C, 2.0g PGA in 60mL solution), MPs successfully precipitated. However, fluorescence was not observed post-filtration, possibly due to PGA encapsulating the MPs.



## Summary of Discussion

- The mass of microplastics (MPs) collected varied significantly depending on the sampling location and year.
- Tanesashi Coast, a popular tourist destination, undergoes frequent beach cleanups, which may contribute to the lower MP mass observed there.
- While ocean currents and other environmental factors likely influence MP distribution, the frequency of beach cleaning appears to be a key factor.
- These findings suggest that human activity, particularly cleanup efforts, can have a measurable impact on the presence of MPs in coastal environments.

## Future Directions

- Expand MP sampling across more coastal areas and collaborate with other schools.
- Continue analysis of substances adsorbed onto MPs.
- Further investigate MP movement and accumulation in organisms.
- Explore PGA extraction from everyday materials like natto for MP aggregation.

## 『What can we learn from kiwi?』

盛岡白百合学園高等学校 2年

齋藤 理沙

(代読；三浦 舞子 ・ 若生 莉央 ・ 石川 咲妃)

私達は Kiwi から何を学ぶか？

生物保護先進国であるニュージーランドでは、在来種を守るため、外来種は原則駆除される。この探究では本学園内外の高校生に、駆除に対するアンケートを行い、多くの方から様々な意見や、自由記述での回答をいただいた。その結果、固有種の保護においては外来種の駆除が必要になる場合もあるが、駆除を行うためには、人々の間での目的意識の合致が求められると考えた。

What can we learn from kiwi?

In New Zealand, which is one of the most developed counties in terms of conservation, invasive species are generally killed in order to protect native species. Therefore, in my study I conducted a survey about extirpation among high school students belonging to my school or other school. I found there were various opinions and comments. With the goal of protecting native species, sometimes it is necessary to extirpate invasive species, but raising awareness of its purpose among people is important.



## 『Creating pictograms to promote inclusive education』

仙台城南高等学校 普通科特進コース1年

後藤 琉聖 ・ 佐藤 弘晃

総進コース1年

小山内 希音 ・ 平野 麗紗

### インクルーシブ教育

現在、学校現場では障がいのある生徒や外国にルーツを持つ生徒が、十分に学びに参加できない場面もあります。そうした課題を解決するために、誰もが安心して意見を言い合い、互いの違いを理解できる学習環境を目指します。私たちは、教師や生徒へのインタビューを通して、課題を探り、実際の声を反映した ICT 教材を提案し、互いの違いを受け入れながら共に成長できる学級づくりや学校文化の形成へとつなげていきます。

### Inclusive Education

Currently, in many schools, students with disabilities or those from foreign backgrounds sometimes face barriers that prevent them from fully participating in learning activities. To address these challenges, we aim to create an inclusive environment where everyone feels safe to express opinions, share ideas, and appreciate each other's differences. Through interviews with teachers and students, we will identify real issues in classrooms and use these findings to develop ICT-based teaching materials that reflect diverse voices. Through these efforts, we hope to foster understanding, cooperation, and a positive school culture in which all students can learn and grow together.

# J Creating pictograms to promote inclusive education



Sendai Johnan High School 64

## Introduction

### 【Reasons for this Theme】

- Diverse society
- Equal Learning environments

### 【 WHAT IS INCLUSIVE EDUCATION 】

- **Definition of the Concept**  
An approach centered on the principle of respecting one another, where all students learn together without separation.
- **Targeted Diversity**  
Designed to support all children, encompassing diverse people regardless of their nationality, race, gender, or presence/absence of disabilities.



## Proposals for the future

### 【Proposal 1】

Promoting Local Inclusion



### 【Proposal 2】

AI Support System



## Conclusion

### 【The Importance of Awareness】

- Urgent need for Inclusive understanding.
- Not all children receive necessary education.
- Education Gap: Action is Needed Now.

### 【Future Activities】

- Spread awareness.
- Use posters & notices.
- Action: Poster campaign for awareness.

## Activity and Result

### 【Activity1 Expert Interview】

Interviewing schools and facilities that accept children with hearing impairments.

### Challenges

- **Hearing is Highly Individual:**  
Hearing is unique; factors like gender and daily health affect perception.
- **Avoiding Exclusion:**  
Older students sometimes feign understanding.
- **Inclusion is the Standard:**  
Teachers already base their education on the premise of equal participation.



### 【Activity2 Pictogram Creation】

- Creating pictograms for school use.
- Gathering opinions from special needs teachers about our proposals.
- Testing pictogram comprehension via quizzes and surveys at Sendai Johnan High School.
- Resulting in a high comprehension.
- Greater variety and reduction of visually confusing designs for needs.



	授業 Class			休み時間 Break time	
先生 teacher	 Read a book 本を読む hon-yomu	 Group work time グループワーク gurupu-waku	 No talk 話さない hanasanai	 Portable classroom コンテナ教室 kontena-kyoushitsu	 Come to the staff room 教員室へ kyouinshitsu e
生徒 student	 Raise hand 手を上げる te o agetaru	 Listen 話を聞く han o kiku	 Let's do it 一緒に issho ni	 The rest is OK 大丈夫 daijoubu	 Let's do it 一緒に issho ni

## References and Acknowledgments

Web 「インクルーシブ教育とは何か？日本の現状と実践に必要なこと」  
<https://www.skymenu.net/media/article/3494/>

Web 「インクルーシブ教育とは？共生社会の実現にむけた、多様性を尊重する新しい学びのカたち」  
[https://www.plan-international.jp/social\\_issues/inclusive\\_education/](https://www.plan-international.jp/social_issues/inclusive_education/)

Interview : Nagamachi Junior High School

分科会 ①科学 A

助言者	辛島彰洋 (東北工業大学 工学部 電気電子工学課程 教授) 柳谷 諒 (仙台城南高等学校；理科)
会場	911 教室
運営補助	千葉俊哉 (仙台城南高等学校)
司会進行	中城快斗 (八戸工業大学第二高等学校)
記録	岩崎知奈 (聖霊学園高等学校)

《次第》

1	○司会自己紹介・講師紹介 グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション 1) 『AI による自動運転は可能か、またそれによる影響は？』 宮城県仙台向山高等学校 渡部貴裕(2年) 柴田真海(2年) 高槻武輝(2年) 及川拓人(2年) 大竹一毅(2年) 田中康平(2年) 2) 『電車に乗っているとなぜ眠くなるの？』 宮城県仙台東高等学校 大橋碧衣(2年) 3) 『鬼ごっこ with Drone』 八戸工業大学第二高等学校 藤田暁玄(2年) 中戸彦利(2年) 番沢元陽(2年) 4) 『3D プリンターを用いた教材開発』 仙台城南高等学校 上村恵梨(2年)
3	○講評

## 1) 『AIによる自動運転は可能か、またそれによる影響は?』

宮城県仙台南高等学校

初めに、我々がこのテーマを探究する理由について発表させていただきます。その後テーマを探究するための方法として、探究テーマに沿った新書や東京大学のアカデミックインターンシップで大学教授への質問で明らかになったことを紹介します。そこから自動運転が可能であるのかどうか、自動運転の実現によって社会に与える影響をまとめ、最後に今後の我々の課題について発表し終了となります。

## 2) 『電車に乗っているとなぜ眠くなるの?』

宮城県仙台東高等学校

みなさんは、電車に乗っている時に眠くなったことはありませんか。私は、電車の振動が人の眠気を誘っているのではないかと考え、このテーマを設定しました。本発表では、振動と眠気の関係について仮説を立て、大学の論文などを参考にしながらその仕組みを調べました。振動が人とどのように関係しているのかを明らかにしていきます。この発表を通して、身の回りにある現象の仕組みについて少しでも興味を持っていただけると嬉しいです。

## 3) 『鬼ごっこ with Drone』

八戸工業大学第二高等学校

日本一の短命県である青森県。その要因の一つが運動不足です。更に、小中学生の肥満率が日本一であり、未来の青森県には注意信号が出ています。青森県民の運動不足解消のために Drone と鬼ごっこできるプログラムの作成を目指し、Python を用いた AI プログラミングで人口減少社会でも人々の健康を支えたいと考えます。

## 4) 『3D プリンターを用いた教材開発』

仙台城南高等学校

本研究では、3D プリンターで実験教材を作成しレビューすることを目的とした。発生モデル生物であるウニのプルテウス幼生の飼育には、飼育容器内で安定した水流が必要であり、そのためのファンを作成した。3D モデリング、スライス後にプリントを行った。限界はあるもののモデリングさえできれば要望通りの教材や備品を作成でき、3D プリンターは教育現場に有用である。今後は実験教材以外でも教育環境を改善していきたい。

Memo

## <質疑応答>

- 1) ○「自分たちで考えたのか、インターンシップの方が言ったのか」(辛島先生)  
→自分たちの考えと教えてもらったことを紐づけた
- 「自動運転とモニターの話はつながらないのでは？」(辛島先生)  
→運転手の体調が急変した場合など、直接病院に運ぶことができる
- 「服を着た状態で使用できる方法はないのか」(辛島先生)  
→ワイヤレスなどにしたら服に埋め込むことができる
- 「コスト面について考えていることはあるか」(柳谷先生)  
→金を使っているため、よりよいものがあれば抑えることができるのではないかと
- 2) ○「車など、ほかの乗り物でも同じことがいえるのか？」()
- 同じ要因であると考えられる。
- 「ほかの胎生の生物や、卵生の生物でも同じことがいえるのか？」()
- 今後探求していきたい
- 「どういう風に社会に役立てていきたいか」(柳谷先生)  
→探求を通してものの見方が変わった。視野を広げていきたい。
- 3) ○「人間以外の動物にも使えるのでは？」()
- 顔認証システムのため、色、形などを指定すれば可能になるのではないかと。
- 「カメラだけなのか、センサーでできるのか」(辛島先生)  
→カメラ 顔の大きさを決めている
- 「Aくん、Bくんと見分けることは可能なのか」(辛島先生)  
→不可能 追いかける対象が変わってしまうため、課題点となっている
- 4) ○「モデリングは自分で用意しているのか」()
- 自分で用意している
- 「3Dプリンターは無知の状態から誰でも使えるのか」()
- YouTubeなどに投稿されている動画を見ると初心者でもできる
- 「どれくらいの速さでまわるのか」(辛島先生)  
→ファンが見えないくらいの速さ、陽性を見つけやすいようにしている
- 「どのくらいの期間問題なく動いているのか」(辛島先生)  
→動かし始めてまだ少ししかたっていないのでわからないが、数日は問題なく動いている
- 「コスト面、1枚あたりの値段はどうか」(柳谷先生)  
→わからない
- 「他社からのレビューは？」(柳谷先生)  
→実際に聞いてはいないが、活用されている事実から良いのではと考えられる

### <助言・講評>

○全体として、生徒間での質問が活発であり、意欲的な探究活動の発表であった。

○AI を人間だけでなく、他の動物にも活用できるのではないかという意見が多く挙げられ、先生方からの助言をもとにより深く探求するきっかけとなったのではないか。

○コストなど、現実的な面からも考えてみることで、より実現に近づくのではないか。

科学 A の分科会では、「AI」や「ドローン」など主に科学技術を活用した暮らしの発展などに関する探究活動の発表が行われた。その後の質疑応答においても、積極的な質問と意見交換が交わされ、全体として大変に有意義な探究発表の場となった。

## 分科会 ①科学 B

助言者	田代 誠 (八戸工業大学第二高等学校; 理科) 山村 美和 (東北文教大学山形城北高等学校; 数学)
会場	912 教室
運営補助	浦田 哲也 (仙台城南高等学校)
司会進行	鈴木 あさひ (宮城県仙台東高等学校)
記録	戸田 裕綺 (福島成蹊高等学校)

### 《次第》

1	○司会自己紹介・講師紹介      グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション
	1) 『 <b>看護の人材不足を解決するには?</b> 』 宮城県仙台向山高等学校 長内夕(2年)      大井花里菜(2年)      阿部ゆりな(2年) 小斎桜良(2年)      板橋陽羽(2年)      白石いぶき(2年)
	2) 『 <b>歌を聴いた時の感情</b> 』 盛岡白百合学園高等学校 八嶋紅葉(1年)
	3) 『 <b>看護領域における工学技術</b> 』 仙台城南等学校 豊島啓太(2年)      三浦悠也(2年)      七尾航(2年)      渡邊琥珀(2年) 井上将(2年)
	4) 『 <b>トウホクサンショウオ各集団の遺伝的多様性と分化程度の検出</b> 』 仙台城南高等学校 山田希夏(2年)
3	○講評

1)

### 『看護の人材不足を解決するには?』

宮城県仙台向山高等学校

看護の人材不足という社会課題に対し、本発表では「なぜ人が定着しないのか」「AIは解決策になり得るのか」という問いを立てて探究した。文献調査に加え、大学教員への講義・質疑を通して、離職の背景には業務負担や対人関係、職種間の認知度の差があることが分かった。一方で、AIやロボットの導入は業務軽減に有効だが、すべてを任せることはできない。人とAIの役割分担を考え、看護の魅力をどう社会に伝えるかを今後の課題とする。

2)

### 『歌を聴いた時の感情』

盛岡白百合学園高校

歌が人を笑顔にする理由について深く専門的な視点で観察したもので、歌を聴いて生まれる感情の理由についても身体的なものや精神的なものまで幅広く取り上げまとめています。私がよく触れる音楽から生まれた何気ない疑問で音楽で心が軽くなることも多くあるからこそ、音楽がどれほど近いものかを知ることができます。

3)

### 『看護領域における工学技術』

仙台城南高等学校

2035年に約69万人の介護人材が不足すると予測される中、本研究は仙台市特有の介護施設を工学技術で解決する可能性と、その実装を阻む障壁を明らかにすることを目的とした。文献調査および東北大学の平田泰久教授へのヒアリングを通じて、仙台市の「坂道の多い地形」や「独居高齢者の増加」といった課題を整理し、期待される技術との対応関係を分析した。

4)

### 『トウホクサンショウオ各集団の遺伝的多様性と分化程度の検出』

仙台城南高等学校

仙台城南高校ではトウホクサンショウオの継続的な産卵が確認されている。そこで本研究ではトウホクサンショウオの遺伝的多様性を明らかにし、持続可能な保全方法を立案することを目的とした。具体的にはML系統樹の作成とハプロタイプネットワークの構築を行った。結果、城南集団は遺伝的多様性の保たれた集団で独立している可能性が高いことがわかり、産卵場所となる水路の定期的な整備が必要であると結論づけた。

Memo

### <質疑応答>

- 1) ○「『看護の人材不足を解決するには?』で調べるときに使った本はどのように選んだのか、見つけたのか。」  
→どういふことがあっているのか、調べたいかで学校の図書館や地域の図書館で本を選んだ。
- 2) ○「『歌を聴いた時の感情』で音楽を聴いてドーパミンが出るのはなぜなのか。」  
→自分が自分だけの空間で楽しんでいることで喜びや興奮が得られるから。
- 3) ○「『看護領域における工学技術』で工学技術が現場でどれくらい活用されているのか。」  
→試作段階だがAIロボットが使われている。
- 4) ○「『トウホクサンショウオ各集団の遺伝的多様性と分化程度の検出』で保全活動としてどのようなことをしたのか。」  
→グリーンカーテンで日よけを作った。

### <助言・講評>

- 多面的に調べる、考えられていて素晴らしい。
- 具体的に掘り進められている。
- 自分自身の経験を入れていて素晴らしい。

科学 B の分科会では、「看護、医療」や「生物、心理」など主に生命科学と自然への理解などに関する探究活動の発表が行われた。その後の質疑応答においても、積極的な質問と意見交換が交わされ、全体として大変に有意義な探究発表の場となった。

## 分科会 ①科学 C

助言者	花田 亜弥 (株式会社Jバイオフードリサイクル 管理室) 中野 智保 (仙台城南高等学校; 理科)
会場	913 教室
運営補助	藤井 久美 (仙台城南高等学校)
司会進行	佐々木 快成 (八戸工業大学第二高等学校)
記録	三浦 舞子 (盛岡白百合学園高等学校)

### 《次第》

1	○司会自己紹介・講師紹介      グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション
	1) 『 <b>思春期とネガティブ思考はどう付き合うべきか</b> 』 宮城県仙台向山高等学校 相沢結衣(2年)    小林常葉(2年)    小松澤飛雲(2年) 猪股楓佳(2年)    佐々木勇真(2年)
	2) 『 <b>モリンガ種子による湖水の水質浄化効果の検討</b> 』 宮城県仙台二華高等学校 田口撞真(2年)    佐々木晴也(2年)    今井拓心(2年)
	3) 『 <b>災害時の生活と科学</b> 』 盛岡白百合学園高等学校 平山奈沙(1年)
	4) 『 <b>ジェネリック医薬品について</b> 』 仙台城南高等学校 中村颯和(2年)    佐川夢(2年)    菊地真緒(2年)    李廷旭(2年)
3	○講評

## 1) 『思春期とネガティブ思考はどう付き合うべきか?』

宮城県仙台南高等学校

ネガティブと聞くと「無くすべきもの」「悪いもの」といったイメージが強いです。しかし、それは正しい知識なのでしょうか？私達はネガティブ感情について探究する間に、ネガティブそのものは無くす必要がないものだ気付きました。大事なことは「ネガティブの無くし方」ではなく「ネガティブとの付き合い方」である、と。この結論に至った経緯と、これからの私達がネガティブとどのように付き合うかを考えます。

## 2) 『モリンガ種子による湖水の水質浄化効果の検討』

宮城県仙台二華高等学校

モリンガ (Moringa oleifera) 種子に含まれるタンパク質は凝集作用を示し、低コストな水質浄化技術への応用が期待される。種子量には最適値が存在し、過剰に添加すると凝集効果が失われ濁度が上昇した。低濁度条件では白濁が残る場合があったが、食塩添加によってコロイドの凝析が促進され、濁度を大幅に低減できることが示された。これはモリンガを活用した途上国向け簡易浄水技術の可能性を示すものである。

## 3) 『災害時の生活と科学』

盛岡白百合学園高等学校

私は災害時に使える火を使わずに調理できる製品を考えました。キャンプなどで使用されるソーラクッカーからヒントを得て、画用紙とアルミホイルで曲面をつくり太陽の光で食品を温める仕組みです。最初の試作品ではうまく食品を温められませんでした。これから改良を加えてさらにパワーアップさせるつもりです。私たちが東日本大震災の時に生まれていた一番若い世代として、防災に関心を持って生活していきたいですね。

## 4) 『ジェネリック医薬品について』

仙台城南高等学校

近年、日本では医療費の増加が社会問題になっているが、その対策の一つとしてジェネリック医薬品の使用が推進されている。そこで本調査はジェネリック医薬品の特徴や先発医薬品との違い、メリット・課題を調べることを目的とした。仙台赤十字病院でフィールドワークを行い医療従事者に聞き取りを行った結果、ジェネリック医薬品への不安が十分に解消されていないことが分かった。今後は不安の解消と安全供給体制の再構築が必要だと考える。

Memo

### <質疑応答>

- 1) ○ 「親目線の反抗期の対処」  
→子供の慎重さを大事にしてあげる
- 2) ○ 「大変だったこと」  
→実験の仕方を考えるのが難しかった
- 3) ○ 「食塩水を選んだ理由」  
→現地で手に入れられて、実験するのに安全な物質だったから
- 4) ○ 「製品化できるとしたらどのようなものを使って作るのか」  
→金属など  
○ Amazon など具体的なところを関連づけて研究していて面白かった

### <助言・講評>

- 具体的な事例で掘ってもいい 思春期と大人のネガティブの差を知りたい
- ちゃんと導入できる内容でよかった スタートの濁度を統一させた方がいい
- 備蓄品で実験して見てほしい すぐ温められる製品を考えてみてほしい
- 薬を作る側になって考えてみてほしい

科学Cの分科会では、「思春期の問題」や「環境・医療に関する研究」など主に身近な科学などに関する探究活動の発表が行われた。その後の質疑応答においても、積極的な質問と意見交換が交わされ、全体として大変に有意義な探究発表の場となった。

## 分科会 ②文化・教育 A

助言者	渡 邊 哲 (宮城県仙台東高等学校；理科) 水 谷 朋 之 (福島成蹊高等学校；理科)
会 場	921 教室
運営補助	阿 部 優 也 (仙台城南高等学校)
司会進行	大久保 柚 歩 (東北文教大学山形城北高等学校)
記 録	阿 達 聖 奈 (東北文教大学山形城北高等学校)

### 《次第》

1	○司会自己紹介・講師紹介      グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション
	1) 『 <b>教育環境をよりよくするにはどうしたらよいか</b> 』 宮城県仙台東高等学校 残間聖蘭(1年)    五戸希帆(1年)    熊谷優汰(1年)
	2) 『 <b>学校の授業を寝ないようにするには？</b> 』 ～アクティブラーニングが教育にもたらす影響について～ 盛岡白百合学園高等学校 畠山十和(1年)
	3) 『 <b>時間の価値から考える卒業アルバム</b> 』 仙台城南高等学校 阿部結衣(2年)    矢崎莉陽(2年)    馬場真優綺(2年)    菅井梨々花(2年)
	4) 『 <b>地域で支える子供たちの多様な生き方</b> 』 仙台城南高等学校 曾根智也(2年)    齋藤土温(2年)
3	○講評

1)

### 『教育をよりよくするにはどうしたらよいか』

宮城県仙台東高等学校

みなさんは勉強している時、周りの環境に対し不満を感じたことはあるでしょうか。私たちは、教育環境が学力にどのような影響を与えるのかについて考察しました。経済や社会の安定、ICTの活用などが進んでいる様々な国の教育環境に着目し、学力との関係を考えながら探究を進め、その要因を探るため本校生徒を対象にアンケート調査を行いました。調査結果をもとに、日本の教育環境を改善するための具体的な方策を発表します。

2)

### 『学校の授業を寝ないようにするには？

～アクティブラーニングが教育にもたらす影響について～』

盛岡白百合学園高等学校

みなさんは授業がつまらないと感じたことはありませんか？ある人は多いでしょう。そんな授業を面白くし、長期記憶に残る授業もあります。それがアクティブラーニング。そんな勉強法の何がいいのか。これは何のためにあるのか？そのようなアクティブラーニングがもたらす影響について、探究してきました。

3)

### 『時間の価値から考える卒業アルバム』

仙台城南高等学校

本研究は、時間の価値の変化という視点から卒業アルバムのあり方を考察した。スマートフォンやSNSの普及により、思い出の残し方は多様化している。調査の結果、紙の卒業アルバムには「重い」「写真写りの差」「掲載人数の偏り」「プライバシーの不安」などの課題があり、需要が低下していることが分かった。そこで、学校と連携したスマートフォン型の卒業アルバムを提案した。個人が写真を選択でき、全員が必ず掲載される仕組みにすることで、思い出を残しつつ現代の時間の価値観に合った新しい形を目指す。

4)

### 『地域で支える子供たちの多様な生き方』

仙台城南高等学校

年々増加する不登校に対し、学校だけでは支援が難しい現状を踏まえ、不登校生徒の生活実態や地域での支援の可能性を探った。本研究では不登校の主な課題を人間関係と仮定し、現状を知り、我々にも何かできる事はないか見つける事を目標とし、東北福祉大学で支援施設の取り組みや地域の実例、今後の課題について意見交換を行った。その結果、不登校の課題は福祉分野に限らず様々な分野と関わっていることが明らかになった。

Memo

## <質疑応答>

### 1) 仙台東高等学校

- 「シンガポールの教育は全てが良いわけではないと思うが、良いところと悪いところの格差をどのようにしていくか。」
  - 悪いところは改善し、良いところは伸ばしていく。

### 2) 盛岡白百合高等学校

- 「話すことが苦手な人が、アクティブラーニングする方法はあるか。」
  - 紙を用いる、話せる人と同じグループにする、など。そこから徐々にグループの輪を広げる。
- 「アクティブラーニングについて考え始めたきっかけは何か。」
  - 中学での授業

### 3) 仙台城南高等学校

- 「卒業アルバスの作成にスマートフォンを使用する場合、スマートフォンの使い方が問題だと思うが、個人のもので流出した場合はどうするか。」
  - 自分で選んで提出しているので問題はない。
- 「事情があって写真を提出できない人はどうするのか。」
  - 提出の有無を選択できる。先生の欄も作る。
- 「集合写真の場合、嫌な人が1人いたらどうするか。」
  - 全員の合意が取れたら、友人との思い出を主とする。
- 「本でもらうことの特別感やわくわくはあるが、自分の写真を公開することにどんな意味があるのか。」
  - 誰かわからない人が撮ったものより、クラスメートが撮った1枚に価値がある。

### 4) 仙台城南高等学校

- 不登校に逆戻りしたときはどうするか。
  - 校内に不登校生徒用の教室を設けたり保健室登校を認めたりするなどの対応をとる。
- 親が否定的な場合はどうするか。
  - スクールカウンセラーと親が相談の機会を設け、価値観のすり合わせを行う。
- 辛いまま登校する生徒への対応はどのようにするか。
  - 話しやすい人や先生へ話す。
- 民生委員の知名度を上げる方法はあるか。
  - 学校教育で教える、ボランティア体験など。

### <助言・講評>

1) 仙台東高等学校

○頭が良いこと（IQ）とお金の関係性があるのかは不明である。

2) 盛岡白百合高等学校

○10年前から話題になっており、アクティブラーニングによって答えまでのプロセスを得られる。  
アクティブラーニングによって成績の変化があったか調べるとなおい。

3) 仙台城南高等学校

○探究としてのサイクル方法、方向、考察が良い。細部をもう少し考えられるとよいのではないか。

4) 仙台城南高等学校

○更に深めるために、どんな在り方だと生徒が本人らしく生きていけるか、どんな姿を目指すか  
考えるとよい。適応教育センターへ名称変更している。

文化・教育 A の分科会では、「教育環境・授業」や「不登校」など主に環境や授業が与える効果や子どもたちの多様な生き方をどのように支えるか、などに関する探究活動の発表が行われた。その後の質疑応答においても、積極的な質問と意見交換が交わされ、全体として大変に有意義な探究発表の場となった。

## 分科会 ②文化・教育 B

助言者	長門 紀穂子 (株式会社河北新報社 教育・防災連携室) 渡邊 優子 (仙台城南高等学校; 国語)
会場	922 教室
運営補助	高橋 和輝 (仙台城南高等学校)
司会進行	喜多 輝 (金沢大学附属高等学校)
記録	黒澤 理子 (東北文教大学山形城北高等学校)

### 《次第》

1	○司会自己紹介・講師紹介      グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション
	1) 『日本文学と社会にはどのような関わりがあるのか』 宮城県仙台南高等学校 永沼薫子(2年)      中村洸惺(2年)      戸牧薫音(2年)
	2) 『みんなが平等に教育を受けられるにはどうしたらよいのだろうか』 宮城県仙台東高等学校 吉川佑(1年)      佐藤美優(1年)      澤田美和(1年) 田口孔明(1年)      松岡栞那(1年)
	3) 『子供らしく過ごすために』 盛岡白百合学園高等学校 小澤花絵(1年)
	4) 『ボドゲから始める暗記ゲー撲滅計画』 金沢大学附属高等学校 喜多輝(2年)
3	○講評

1)

### 『日本文学と社会にはどのような関わりがあるのか』

宮城県仙台向山高等学校

日本文学は、ただ物語を楽しむものではなく、その時代の社会や人々の心を映す「鏡」である。本発表では、日本文学と社会の関係に着目し、文学が歴史や政治、文化とどのように結びつき、変化してきたのかを探究した。文献調査やブックトーク、大学教授へのインタビューを通して、文学は海外の影響を受けながら日本独自の文化を形成してきたことが分かった。電子化が進む現代だからこそ、紙の本や文学の価値を見つめ直し、日本文学を未来へどうつなぐかを考える。

2)

### 『みんなが平等に教育を受けられるにはどうしたらよいのだろうか』

宮城県仙台東高等学校

今日、SDGs や地球温暖化、少子高齢化、ウクライナ戦争、紛争、関税、円安など解決しなければならない問題がたくさんあります。しかし「教育」がなければ、解決に向けての取り組みが実行できません。現在の環境の中で、私たちはどのように問題に立ち向かえばいいのでしょうか。現在、教育を十分に受けることができない子供たちは、7100 万人程度もいます。そこで教育の重要性を私たちの体験談や日本の GDP を踏まえて考察します。

3)

### 『子供らしく過ごすために』

盛岡白百合学園高等学校

今回の発表はヤングケアラーについて知り、理解を深めてもらいたいという思いから作成しました。ヤングケアラーの定義や気づかれにくい理由、支援の重要性を伝えました。特に学校の役割や相談できる場の存在に注目し、私たち一人ひとりが気持ちを尊重し、助けを求めやすい環境をつくることの大切さをまとめました。

4)

### 『ボードゲから始める暗記ゲー撲滅計画』

金沢大学附属高等学校

この研究では、主に中学校社会科の学習の本質的な面白さを生徒に伝え、意欲を高めることを目標としている。

その手段としてボードゲームに着目し、前述の学習する楽しさを伝えることに加え、資料の読み取り能力、社会科的事象を多面的に見る力などを培うことを目標とした、教育ボードゲームの開発を進めている。

現在国公立中学校 3 校、私立中学校 1 校での教育実践が終了しており、その後も改善作業を続け、正式な商品化を目指している。

Memo

## <質疑応答>

### 1) 仙南向山高等学校

○「なぜ海外の流派を意識するようになったのか。」

→ 輸出入が盛んに行われたり、作家の留学があったりしたから。

○「文学の衰退を防ぐためとあったが、今現在も衰退していると思っているのか。」

→ 高度経済成長の時に衰退していたことから、これから先の未来でも同じことが起こるのではないかと思ったから。

### 2) 仙台東高等学校

○「学校での1円からの募金の工夫は何かあるか。」

→ 月一、週一で校門の前で募金を行う。

○「SNSからどうやって寄付まで繋げるのか。」

→ 直接的ではなく寄付のきっかけになればいい。

### 3) 盛岡白百合学園高等学校

○「自分がヤングケアラーと気づくその他の関係機関とは具体的にどこか。」

→ 福祉相談窓口など

○「ヤングケアラーの支援とは具体的に何か。」

→ 精神的なケア、給付金 など

○「なぜヤングケアラーに注目したか。」

→ 本人が自覚していない精神的な虐待を調べたいと思ったから。

### 4) 金沢大学附属高等学校

○「対象年齢はどのくらいか。」

→ 中学2年生がベストだが、大学生でも楽しめる内容になっている。

## <助言・講評>

### 1) 仙南向山高等学校

○フィールドワークは大学やこれから先の探究でもとても大事になるからこれからも続けてほしい。

○古典文学を読むには、時代背景を知ることが大切。

○課題を自分たちができる範囲で解決することまで取り組むとよいと思う。

### 2) 仙台東高等学校

○数字など具体的なものを含めていて発表全体に説得力がある。

○ボランティア活動で何をするのかなどの具体案があればもっと良くなる。

○高校生である自分たちは何ができるかと考えていてよいと思った。

3) 盛岡白百合高等学校

○自分の同級生がヤングケアラーかもしれないときに寄り添える具体的な方法を考えるとよいと思う。

4) 金沢大学附属高等学校

○試行錯誤の過程が明記されていてよいと思った。

○テレビゲームに触れていない小学1・2年の方がボードゲームに対して意欲的なのではないか。

文化・教育 B の分科会では、「勉強への苦手意識」や「教育が受けられない子ども」など主に近年の身近な問題などに関する探究活動の発表が行われた。その後の質疑応答においても、積極的な質問と意見交換が交わされ、全体として大変に有意義な探究発表の場となった。

## 分科会 ②文化・教育 C

助言者	佐々木 克 敬 (東北工業大学 学修支援センター) 中 里 加奈子 (仙台城南高等学校; 国語)
会 場	923 教室
運営補助	佐 藤 寛 子 (仙台城南高等学校)
司会進行	若 生 莉 央 (盛岡白百合学園高等学校)
記 録	伊 藤 舞 花 (宮城県仙台東高等学校)

### 《次第》

1	○司会自己紹介・講師紹介      グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション
	1) 『 <b>学習意欲による学力格差を減らすには?</b> 』 宮城県仙南向山高等学校 橋本凜(2年)      吉田光輝(2年)      石原珠那(2年) 沼下あさ陽(2年)      渡邊秀人(2年)      村井愛(2年)
	2) 『 <b>ファッションと性別について</b> 』 宮城県仙台東高等学校 川口夢登(2年)
	3) 『 <b>教育の価値を伝えるには</b> 』 福島成蹊高等学校 後藤優亜(1年)
	4) 『 <b>子どもがやる気を出すとき</b> 』 仙台城南高等学校 阿部夏旺(2年)      草薙奏(2年)
3	○講評

## 1) 『学習意欲による学力格差を減らすには』

宮城県仙台南高等学校

学力格差の背景には、家庭・地域・学校による教育格差があり、遺伝と環境の影響があることを文献調査で知った。アカデミックインターンシップを通し、格差をなくすのではなく、全体への影響を考え、適切に「減らす」視点が重要であると考察した。そこで、生徒、児童、先生が主体的に学ぶ力を高めることが鍵だと考え、生徒、先生同士で教え合い、学びあいを通して勉強に対しての主体性を高める「学習交流会」を提案した。

## 2) 『ファッションと性別について』

宮城県仙台東高等学校

「カッコいい服装」と聞いて、皆さんはどんなスタイルを思い浮かべますか？世の中では、性別によって好まれるファッションの系統が大きく違うと言われています。しかし、それは一体なぜなのでしょう。私はこの素朴な疑問から、独自の仮説を立てて研究を進めてきました。本日はその調査結果をもとに、ファッションの多様性についてお話しします。この発表が、皆さんの服への関心を深める一助となれば幸いです。

## 3) 『教育の価値を伝えるには』

福島成蹊高等学校

アフガニスタンではタリバン政権により女子教育が禁止され、識字格差や人材不足が深刻化している。教育の再建には女子教育の再開、インフラ整備、デジタル教育、地域の意識改革、国際支援の連携が不可欠である。教育は人の尊厳と未来を守る力であり、その価値を社会全体で見直すことが国の安定と希望につながる。

## 4) 『子どもがやる気を出すとき』

仙台南高等学校

この研究は子供が自分自身を肯定的に認識し、幸福感（ウェルビーイング）を高めながら成長できる教育の在り方を発見することを目的としている。フィールドワークと文献調査から幸福度を高める理由を考察する。子供の自己肯定感、幸福度を高めるには、身近な教師の言語と非言語を使い分けた声かけや子供に向かう教師自身の姿勢が大きく影響していると考えられる。

Memo

### <質疑応答>

- 1) ○「小学校教員へのインタビューで児童に対してどんな声かけをするのか？」  
→ 一人一人の特性を認めてあげられるように褒める。
- 2) ○「発表者にとってのファッションの価値とは何か？」  
→ 人は見かけにはよらないとよく言われるが、服の系統や雰囲気からある程度推測でき、どのように会話すれば良いかの助けになる。
- 3) ○「日本で教育の価値を伝えるために何ができるか？」  
→ 生徒が自分で考える機会を増やし、一人一人の意識改革を促すために授業で探究活動を行う。
- 4) ○「家庭環境による教育格差をなくすにはどうすればよいか？」  
→ 学校や塾など学びの機会を提供する場所があることが最も効果的かつ現実的である。

### <助言・講評>

- 言語、非言語を含めた教師と生徒の関わりの分析の条件をさらに深くすると AI でもできるようになるのかを調べてみるのも良い。
- アンケートを実施した人数が少ないことも考慮して考察した方が良い。
- SNSのコーデを参考にする人が多いと言っていたが、同調圧力と SNS の関係についても調べることもできる。
- 自分の発表を誰に伝えたいのかに焦点を明確にするとより伝わりやすい。
- 教育格差をなくすのではなく、減らすという視点は現実的で良い考え方だった。

文化・教育 C の分科会では、若い世代に視点を向け、個人の尊厳や価値観に関する探究活動の発表が行われた。その後の質疑応答においても、積極的な質問と意見交換が交わされ、全体として大変に有意義な探究発表の場となった。

## 分科会 ③まちづくり A

助言者	櫻井 寛也 (株式会社日本旅行東北 営業統括部 担当部長) 阿部 那津子 (聖霊学園高等学校; 音楽)
会場	914 教室
運営補助	尾形 駿 (仙台城南高等学校)
司会進行	石川 咲妃 (盛岡白百合学園高等学校)
記録	佐藤 大世 (福島成蹊高等学校)

### 《次第》

1	○司会自己紹介・講師紹介      グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション
	1) 『 <b>私たちがつくる故郷</b> 』 盛岡白百合学園高等学校 柳瀬心結(1年)
	2) 『 <b>学生と地域との関わり みんなで作る子ども文化祭</b> ～地域の人と絆を深めよう～』 東北文教大学山形城北高等学校 荒川知歩里(2年)      石川直桜(2年)      垂石華亜(2年)
	3) 『 <b>フィリピンの都市部とスラムの現実から考える</b> 持続可能な社会づくり』 福島成蹊高等学校 武田真歩(1年)
	4) 『 <b>交通弱者</b> 』 仙台城南高等学校 佐藤雄真(2年)      丹波諒太郎(2年)      大村颯(2年)
3	○講評

## 1) 『私たちがつくる故郷』

盛岡白百合学園高等学校

将来どんな街に住みたいかという問いにほとんどの人が利便性の良さを求める。そのため世界各国では都市化が問題となっている。そこで私は都市化が進むと起きてしまう問題点に触れ、国内で行われている取り組みについて探究した。また、街づくりを政治に関連付け、私たち若者が政治に興味を持って行動することが住み続けたい街を作ることにつながっていくのではないかと考えてみた。

## 2) 『学生と地域との関わり みんなで作る子ども文化祭～地域の人と絆を深めよう～』

東北文教大学山形城北高等学校

高校生にはどのような地域貢献ができるのかを探る中で、私たちは、地域住民相互の関わりと、交流を深めるきっかけとなる地域の行事に着目した。高齢化や人口減少の問題、さらに感染症が流行したことで、地域における住民相互の関わりが薄れつつあるのではないかと考え、4自治体や学校周辺の町内会の人々へのアンケート調査を行い、高校生に何を期待したいのかを探った。また、高校生や親世代へもアンケートを行って、自分たちも楽しみながらできることを具体化していった。そして、高校の校舎を使ってまず「子ども文化祭」を実施するという企画を提案し、第一歩として実施した結果をまとめた。

## 3) 『フィリピンの都市部とスラムの現実から考える持続可能な社会づくり』

福島成蹊高等学校

フィリピンを訪れた際、都市部とスラムの格差を目の当たりにして、貧困による教育機会の不足を痛感しました。私は学用品の提供が「教育の経済的壁」を壊す鍵になると仮説を立て、ランドセル寄付事業に参加しました。実験の結果、子どもの意欲向上を確認できましたが、継続的な支援の必要性を学びました。将来は、客室乗務員として世界の光と影の両方を理解し、人々の背景を尊重できる広い視野を持った人になりたいです。

## 4) 『交通弱者』

仙台城南高等学校

本研究では、交通弱者の問題について調べました。交通弱者とは、高齢者や障がい者など移動が難しい人のことです。現在、日本では交通弱者が約3,494万人おり、人口の約27%を占めています。そこで私たちは、既存のバスや鉄道の役割を生活特化型に見直すことや、予約制のデマンド交通の導入などを提案し、誰でも移動しやすい地域づくりについて考えました。

Memo

### <質疑応答>

- 1) ○こども文化祭などの活動はどのようにして準備をした？  
→ポスターを貼ったりなど出来る範囲でやった。
- 2) ○学校に行けていないこどもたちにはどうやって物資を届ける？  
→検討中
- 3) ○高校生が利用したくなるような交通機関は？  
→キャラクターが印刷された乗り物

### <助言・講評>

- 広い話をもっと細分化するともっと良くなる。
- 課題に対してアウトプットをしたのが素晴らしい。
- どのように実現するのかの観点を持つとなおよい。

まちづくり A の分科会では、「地域」や「交通」など主にインフラや東北地方の人口問題などに関する探究活動の発表が行われた。その後の質疑応答においても、積極的な質問と意見交換が交わされ、全体として大変に有意義な探究発表の場となった。



## 1) 『おばちゃんからのおかえりの最適解とは～全力！おばちゃんリサーチ！～』

宮城県仙台東高等学校

近年、少子高齢化が続き高齢者が身近になってきた。そこで小中学生の頃の素朴な疑問であるおばちゃんからの「おかえり」にどう対応すべきかを調べようと思った。敬語でないと気まずいのではないかと思った私は、北は函館市・南は長崎市の日本全国、総勢 160 名のアンケートを取り、未だかつてなかった全国規模の結論を出すことに成功した。それぞれの地域柄はあったものの、一つだけ飛びぬけて人気のあいさつがあった。それを結論としたスライド 15 枚の超大作。

## 2) 『大型商業施設と商店街の共存』

盛岡白百合学園高等学校

大型商業施設が街に与える影響を、メリットとデメリットの両面から考えました。また、高松丸亀町商店街の再開発の事例から、商業施設と商店街がそれぞれ役割分担し、地域全体で協力することが共存に繋がると考えました。

## 3) 『バリアフリーは誰のため？』

東北文教大学山形城北高等学校

私たちは「バリアフリー」という言葉を、「障がいがある人や高齢者のために壁（バリア）を取り除く」という、特定の対象の人々への配慮を考えるイメージで捉えがちである。しかし、本来のバリアフリーとは、私たちすべてがインクルーシブに生きる社会を目指す言葉であり、どうすればインクルーシブな社会に近づけるのかを考えたいと思った。そこで、生活環境に着目して、中でも居住環境を中心に、私たち自身が普段不便に感じている点をあげてみた。また、障がいのある人の状況を知ることで、別の視点からも考えられるのではないかと思い、障がいがある状況を体験してもらうことで、考察を進めた。

## 4) 『空き家の地域ごとの再利用方法』

仙台城南高等学校

本研究は、仙台市の空き家問題の解決と再利用の提案を目的とした。データ分析と株式会社丸本組への取材から、市内での空き家急増と区ごとの課題、リノベーションの有効性を学んだ。これを踏まえ沖野上飯田地区に対し、高齢者や独居世帯が多い現状を改善するため、多世代交流を促すリノベーションプランを提案する。活動を通じ、空き家活用が地域活性化に繋がる可能性を見出した。

Memo

### <質疑応答>

#### 1) 仙台東高校

○「スライドを見やすくするコツ」

→ アニメーションを使うがあまり使いすぎない

○「各地の駅などでアンケートをとる時、声をかける時に工夫した点」

→ 場所にもよるが駅でアンケートできない場所もあるため事前に調べた

○「リサーチ期間」

→ だいたい3ヶ月くらい

#### 2) 盛岡白百合高校

○「商店街の利用する際のメリットとデメリット」

→ メリット→その街の歴史を知ることができる

デメリット→今ある商店街は古く、若い人たちが来ない

#### 3) 仙台城南高校

○空き家はなぜ増える

→ 高齢化の進行や相続の放置、施設への入居

### <助言・講評>

○おばちゃんからのおかえりの真意は？→身近に感じてほしい

相手から言われるのを待つのではなく自分から話しかけること。そうすることで地域の中できっかけが作れる。また、こういった行動を自分のこととして捉えることによりさらに学びが深まる。

○間の取り方が素晴らしく工夫されていると感じた。さらにスライドもよくまとまっており、分かりやすかった。実際に自分の目で見るのが大切。

○実体験から探究活動ができておりよかった。

自分ができることは？→優先席を譲る、重い荷物を持つなど 今後のことを考えることができていたら、もっとよくなる

○自分ごとにできていてよかった。また発表している際、身振り手振りをしていてよかった。

インタビューの時に良かった点は？→実際に見ることで現場を知れる。

最終的に今後の展望として提案までいくことができていて素晴らしい。

→PDCA(P=Plan, D=Do, C=Check, A=Action)がよくまわっていた。

まちづくりBの分科会では、「地域」や「社会」など主に生活を営むための基盤などに関する探究発表が行われてた。その後の質疑応答においても、積極的な質問と意見交換が交わされ、全体として大変に有意義な探究発表の場となった。

## 分科会 ④国際理解 A

助言者	島田 潤悦 (JICA 東北 市民参加協力課) 鈴木 堅一郎 (仙台城南高等学校；英語)
会場	934 教室
運営補助	相澤 茂紀 (仙台城南高等学校)
司会進行	星 はるか (宮城県仙台東高等学校)
記録	藤本 眞生 (聖霊学園高等学校)

《次第》

※ = ON LINE

1	○司会自己紹介・講師紹介      グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション 1) ※『 <b>Plastic Bag Reusable Box: The Method to Reduce Proliferation of Plastic Bags on Tainan Campus</b> 』 国立臺南高級商業職業学校 Zhang Jia-Xi      Li You-Zong      Wu You-Zhen 2) 『 <b>日本の食料高騰について</b> 』 宮城県仙台東高等学校 櫻井涼斗(2年) 3) 『 <b>How Does a Willingness to Communicate Help People Overcome Language Barriers in Intercultural Interactions?</b> 』 盛岡白百合学園高等学校 安部花音(2年) 4) 『 <b>スイスの隠れた貧困について</b> 』 福島成蹊高等学校 片平采 (1年) 5) 『 <b>尊重から始まる国際協力</b> 』 仙台城南高等学校 柏木涼昊 (2年)      高橋心花(2年)      根井優奈(2年)      浅野公哉(2年)
3	○講評

1) 『Plastic Bag Reusable Box:

**The Method to Reduce Proliferation of Plastic Bags on Tainan Campus』**

国立臺南高級商業職業学校

This project aims to reduce the use of plastic bags on campus. We have partnered with the Tainan City Environmental Protection Bureau to establish "Plastic Bag Reusable Boxes," which provide clean reusable bags, paper bags, and plastic bags for students to take. Students can also deposit bags they no longer need for others to use. Through this reuse initiative, we aim to decrease the consumption of single-use plastic bags, raise environmental awareness on campus, and minimize environmental impact.

2) 『日本の食料高騰について』

宮城県仙台東高等学校

近年の身近な経済問題の一つとして、食料高騰が挙げられると思います。そのため「日本の食料高騰について」というテーマで探究しました。私は日本だけでなく世界での紛争や異常気象が原因と仮説を立てました。食料高騰について紐解いていくことで、一人ひとりの消費選択の重要性に人々が気付くことで、日本経済が良くなると私は考えます。

3) 『How Does a Willingness to Communicate Help People Overcome

**Language Barriers in Intercultural Interactions?』**

盛岡白百合学園高等学校

Through intercultural experiences, I realized that international understanding requires more than language proficiency. During my exchange in Canada, I sometimes struggled to speak when I focused on accuracy. However, the moment I focused on expressing my intentions, communication began. In this presentation, I explore how willingness to communicate helps overcome language barriers.

4) 『スイスの隠れた貧困について』

福島成蹊高等学校

私はスイスの隠れた貧困に着目し、高家賃や地域格差、複雑な福祉制度が課題だと考えた。公共住宅の拡充や最低賃金の全国的統一、福祉手続きの簡素化が必要である。また、自立を重んじる国民性を踏まえ、福祉を自立支援として捉え直すことが重要だと考えた。

5) 『尊重から始まる国際協力について』

仙台城南高等学校

本調査で私たちは、異文化理解が国際協力にどのようにつながるのかをテーマに、本やインタビュー、アンケートを用いて調査しました。ALTの先生や多文化共生センターへの聞き取りから、文化と地域づくりの関係について学びました。今後はアメリカの空き家問題に視点を向けて、日本の空き家を活用した各国文化のイベントを開催し、文化理解を深める取り組みを提案します。

## <質疑応答>

### 1) 宮城県仙台東高等学校

○「調べて日本の食料高騰につながった他の要素はあるのか」

→日本の人件費の増加が要因として考えられる。

○「どれが海外の話でどれが日本の話なのか」

→人口増加による物価高騰の話が海外で人件費による物価高騰の話が日本の話である。

○「多くの国際問題とはなにか。」

→食料や紛争、環境問題などである。

### 2) 盛岡白百合学園高等学校

○「日本でも海外でもコミュニケーションをどう捉えているのか」

→異文化交流であり、日常生活で大切なものとして捉えている。

○「この経験を将来にどのように活かしていきたいか」

→現在、通訳の仕事に就きたいと考えている。この仕事はAIも行うことができるが、ただ単語を落とし込むだけで背景がないため、誤解が生まれてしまう。そのため、自分自身で基盤をつくり誰かを支える存在になりたいと考えている。

### 3) 福島成蹊高等学校

○「スイスの貧困問題につながる情勢問題はあるのか」

→今はまだわからないため今後調べて次につなげていきたいと考える。

○「日本の貧困率は何%なのか」

→約10%である。

○「スイス人の意識を変える必要があると言っていたが何か例はあるのか」

→ボランティア活動を通して自分と社会のつながりを感じ、自分が社会の一員であることを認識してもらおうと考える。

### 4) 仙台城南高等学校

○「どのような視点からアメリカの空き家問題につながったのか」

→社会問題に着目して調査し、日本にもつながる空き家問題が日本との比較をしやすいと考えたから。

○「話の中心部分はどこなのか」

→アメリカの空き家問題について知ってもらい街づくりにつなげることである。

○「タイトルにある尊重とは内容のどの部分を表しているのか」

→各国の問題を理解して尊重できるようになればいいという意味である。

○「アメリカの空き家が多い理由は何か」

→町づくりを主催する人々などの人口減少が考えられる。

### <助言・講評>

宮城県仙台東高等学校

- 自分がやりたいこと・知りたいことが何かを今より深く知るといい。
- 高騰前と後など様々な比較がありわかりやすい。
- スライドが見やすかった。

□盛岡白百合学園高等学校

- 言葉の壁があり英語でも国によって何か違いがあるのかと思った。

□福島成蹊高等学校

- 視点が面白く、スイスの話だが日本とつながる部分があると思った。
- プレゼンの資料がよく、このプレゼンが次にどうつながるのか知りたいと思った。

□仙台城南高等学校

- インタビューやフィールドワークなどがあってよかった。
- 実際にイベントを行ってどうなったのか知りたい。
- 仙台だったらどこに空き家が多いのかを調べ開催場所などを決めるとよいと思う。

国際理解 A の分科会では、「スイスの貧困」や「食料高騰問題」など主に日本や海外などが抱える地域課題などに関する探究活動の発表が行われた。その後の質疑応答においても、積極的な質問と意見交換が交わされ、全体として大変に有意義な探究発表の場となった。

## 分科会 ④国際理解 B

助言者	成田 奈穂 (盛岡白百合学園高等学校；英語) 脇坂 晴久 (仙台城南高等学校；社会)
会場	935 教室
運営補助	佐藤 悠 (仙台城南高等学校)
司会進行	三津谷 能 (八戸工業大学第二高等学校)
記録	穴戸 勇斗 (宮城県仙台向山高等学校)

### 《次第》

1	○司会自己紹介・講師紹介      グループ内自己紹介
2	○発表・ディスカッション
	1) 『 <b>私たちができる災害支援</b> 』 聖霊学園高等学校 佐々木暖乃(2年)      鈴木菜々(2年)      武藤陽菜乃(2年)
	2) 『 <b>スイスと日本の共通課題について</b> 』 福島成蹊高等学校 小池智香子(1年)
	3) 『 <b>グラフ理論による紛争の解決</b> 』 金沢大学附属高等学校 内田知一郎(1年)
	4) 『 <b>教育を受けられない子どもたち</b> 』 仙台城南高等学校 山下悠(2年)
3	○講評

## 1) 『私たちができる災害支援』

聖霊学園高等学校

秋田を訪れる外国人の方たちが安心して過ごせるよう、防災対策に焦点を当てました。いつ起こるかわからない災害に備え、災害に関するフレーズを多言語で発信できる Web サイトを作成しました。探究活動の中での気づきやいただいた助言をもとに、外国人の方々が情報を即座に正しく理解し、また、助けを求められるよう、ふりがなやローマ字表記、緊急電話番号を追加するなど、よりよい災害支援 web サイトを目指し、改良しました。

## 2) 『スイスと日本の共通課題について』

福島成蹊高等学校

スイスは SDG s の達成率が上位の国ですが、そんなスイスの課題は何があるのか、気になったことをきっかけとして課題を調べました。すると、日本と全く同じ共通課題があることに気が付き、どのようにすれば両国とも解決へと導くことができるのか、を鍵にしなが、3つの面で考えました。すると「引き算ではなく足し算」というキーワードが大切になることが分かりました。両国とも生活水準が高い国だからこそその解決の難しさがありますが、人の心理的な部分から改善点を見つけようと意識しました。

## 3) 『グラフ理論による紛争の解決』

金沢大学附属高等学校

グラフ理論による紛争の解決について探究した。まず、各国を頂点とし、全ての二頂点をつなぐ辺を作った。次に、国連総会の投票データにもとづいた COS 類似度を利用し、二国間の関係が良いほど小さい値となる重みを辺に付した。ある二国間の最適な交渉ルートを、二国間の最短経路だと考え、求めた。さらに、クラスターリング係数、媒介中心性などの様々な指標を用いてグラフを分析し、シミュレーションができることの確認もした。

## 4) 『教育を受けられない子どもたち』

仙台城南高等学校

私は教育を受けられない子どもたちの現状について調べて、私にできることを考えました。世界には、戦争や貧困、差別などが原因で学校に通えない子どもがたくさんいます。また、日本でも経済的な理由や家庭の事情から、勉強したくても十分に学べない子どもがいます。フィールドワークでは、ヤングケアラーなど家のことで忙しく、宿題や勉強の時間が取りにくい子どもがいることを知りました。私は、募金やボランティアに参加したり、身近な人の SOS に気づいて声をかけたりすることで、少しずつでも状況を変えていきたいです。

Memo

## <質疑応答>

- 1) ○「くまに関してのポスターをお店に配った時の反応は？」  
→温かい言葉をいただく事ができ、とても嬉しかった。
- 「今後のウェブサイトの展開は？」  
→ウェブサイトにマップや語彙を増やして、利用者が使いやすくなるようにして、インスタグラムなどの SNS で運用していきたい。
- 2) ○「なぜスイスと日本を比べて問題提起をしたか？」  
→スイスには SDGs の達成率が上位であるがゆえの問題があると考えたから。
- 「その考えをこれからどう実現していくか？」  
→To get To go というアプリと連携して多くの人に伝える事でより多くのフードロスを防いでいきたいと考えている。
- 3) ○「今回用いたグラフに足りていない”情緒”を取り入れたグラフを作るとするならどのようにして作りますか？」  
→具体的な考えはあまり見えていない。ただ、国家の関係は思想や貿易額も重要であるが、それらを言い出したらきりが無いため、どこかで折り合いをつけていくしかない。そのような時に”情緒”が重要な役割を果たすのではないかと考えている。
- 「研究で他に使えるようなデータは？」  
→GDP と密接に関わっている貿易学が使えると考えている。
- 4) ○「南スーダンについて問題提起を行った理由は？」  
→このテーマについて調べ物を行った際、南スーダンが多く挙げられていたから。
- フィールドワークはどこで行ったか？  
→仙台駅にある NPO 法人にインタビューを行い、ヤングケアラーについてやその NPO 法人が行っていたイベントの活動取材した。

## <助言・講評>

- 訪日外国人のための多言語に対応している災害ポスターなどから、クマへの警戒を促す看板は多言語に対応していないという新たな問題を見つけていたのが素晴らしい。
- 貢献度や達成度といった目に見える仕組みを作ることで大人にとってもやりがいを感じるようになって良かった。
- 各国の主張の隔たりというものをベクトルの差で表していくという発想にユニークさを感じ、この発想をここまで仕上げた点が素晴らしい。
- 途上国の教育をテーマに取り上げた点は素晴らしいが、修学率や出生率といったデータを盛り込めれば、教育の意義を示す上で、さらに説得力を持たせられたと思った。

## ワークショップ

科学①カテゴリー 東北工大912教室					
助言者	辛島先生【東北工大】		田代先生【八戸工大第二】		柳谷先生【仙台南】
生徒進行	中城快斗【八戸工大第二】				
生徒記録	岩崎知奈【聖霊学園】		千葉俊先生【仙台南】		
		高校	学年	名前	発表テーマ
	科学①A班	仙南向山	2	渡部貴裕	AIによる自動運転
	科学①A班	仙台東	2	大橋碧衣	電車
	科学①A班	仙南向山	2	白石いぶき	看護人材不足
	科学①A班	仙台南	2	井上将	介護 工学技術
	科学①B班	仙南向山	2	高槻武輝	AIによる自動運転
	科学①B班	八戸工大第二	2	中戸彦利	鬼ごっこドローン
	科学①B班	仙南向山	2	相澤結衣	思春期 ネガティブ
	科学①B班	仙台南	2	李廷旭	ジェネリック医薬品
	科学①C班	仙南向山	2	大竹一毅	AIによる自動運転
	科学①C班	仙台南	2	七尾航	介護 工学技術
	科学①C班	仙南向山	2	小松澤飛雲	思春期 ネガティブ
	科学①C班	盛岡白百合	1	平山奈沙	災害時の生活と科学
	科学①D班	八戸工大第二	2	藤田暁玄	鬼ごっこドローン
	科学①D班	仙南向山	2	板橋陽羽	看護人材不足
	科学①D班	仙台南	2	渡邊琥珀	介護 工学技術
	科学①D班	仙南向山	2	小林常葉	思春期 ネガティブ
	科学①E班	仙南向山	2	小齋桜良	看護人材不足
	科学①E班	仙台南	2	上村恵梨	3Dプリンター
	科学①E班	仙台二華	2	佐々木晴也	モリンガ種子

科学の分科会では、「東北地方の強みを活かした〇〇〇プロジェクトを立ち上げよう」をテーマとして、DX を利用した東北地方の発展について意見を交わした。  
全体として、祭り×DX を中心とした考えや、少子高齢化の対策へのアイデアが発表され、大変に活発な議論の場となった。

#### <テーマ・課題>

- ◎テーマ：『みらい東北 2040 年の「科学」』
- 課題例①：観光客の減少、観光地の活性
- 課題例②：少子高齢化の進行
- 課題例③：過疎化により、祭りへの参加者が減少
- 課題例④：少子高齢化による働き手の不足


#### <改善策・解決策のアイデア>

- アイデアの例①：『祭り×DX で人を呼び込む「ねぶたパーク」』  
内容：ねぶたを動かす、飛ばせるなど、DX だからこそできることを最大限に活用したテーマパークをつくる。ドローンを活用したアトラクションをつくる。
- アイデアの例②：『AI を使い、健康な人の生活をマネさせる』  
内容：健康寿命をのばすため、健康な人の食生活をコピーする。ドローンと鬼ごっこなど、全身の筋肉を活性化させることを目的とする。
- アイデアの例③：『メタバースを利用した PR』  
内容：メタバースを利用することで、東北の祭りの魅力を伝える。全国、全世界どこからでも参加できる環境を作ることで、実際に足を運びたいと思わせる空間づくり。また、ポケモン GO のような現地にいないとできないゲームの作成。
- アイデアの例④：『働き手の AI 化』  
内容：AI を活用した産業医療を行う。主に単純作業の人員を削減する。また、新しい交通手段の確立。

#### <助言・講評>

- 全体として、高校生らしい発想が飛び交い、私たちの世代だからこそ考えられる内容のアイデアがたくさん挙げられた。
- 班どうしの案を合わせたり、いい部分、悪い部分を吟味したりしていけばより実現に近づけるのではないか。
- また、伝統である地域の祭りは、1 つでもやり方を間違えると祭り自体の価値を下げることになりかねないため、深く考えていかなければならない。
- 活発な話し合いが行われ、他校の人の意見を聞くことで、自分自身の考えを広げることができる、有意義な場となった。

<代表チーム発表スライド>

第3回 みらい東北 高校生国際サミット 発表資料 


---

午後の部 生徒ワークショップ

みらい東北2040年の『祭りの未来』

科学①-C班


912教室 20260314

1. 私たちが考えるみらい東北【アイデア提案】 

---

伝統は次の次元へ  
～祭りは、リアルを越える～


第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

2. 私たちが考えるみらい東北【ストーリーボード】 

---

<p>想定される困りごと</p> <p>過疎化 ↓ 参加者の不足 ↓ 祭りが廃れる</p>	→	<p>アイデアによる具体的な解決のイメージ</p> <p>メタバースを利用したPR</p>
<p>アイデアによる具体的な解決のイメージ補足</p> <p>①東北各地の祭りにいつでも参加できる ②実行委員になれる ③ゲームイベント ④飛ぶねぶた</p>	→	<p>解決によるハッピーな様子</p> <p>祭りへの関心が高まる ↓ 移住者が増える ↓ 地域活性化</p>

第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

3. アイディアの実現に向けて 

---

<p>ICT・デジタル機器を活用して出来ること</p> <p>①メタバース空間の作成 ②SNSでの情報発信 ③観光地の案内 ④ゲームイベントで連動する ⑤AIの利用</p>	<p>自分たちができること</p> <p>①地元の魅力の発信 ②イベントの体験をしている様子の発信 ③みらい東北高校生国際サミットの継続</p>
--	--

第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

科学②カテゴリー 東北工大913教室					
助言者	花田さん【バイオフードリサイクル】		山村先生【山形城北】		藤井久先生【仙台南】
生徒進行	鈴木あさひ【仙台東】				
生徒記録	三浦舞子【盛岡白百合学園】			相澤先生【仙台南】	
		高校	学年	名前	発表テーマ
	科学②A班	八戸工大第二	2	附田逸希	マイクロプラスチック
	科学②A班	仙南向山	2	長内夕	看護人材不足
	科学②A班	盛岡白百合	1	八嶋紅葉	歌を聴いた時の感情
	科学②A班	仙台南	2	菊地真緒	ジェネリック医薬品
	科学②B班	仙南向山	2	及川拓人	AIによる自動運転
	科学②B班	八戸工大第二	2	阿部楓磨	マイクロプラスチック
	科学②B班	仙台二華	2	田口撞真	モリンガ種子
	科学②B班	仙台南	2	中村颯和	ジェネリック医薬品
	科学②C班	仙南向山	2	田中康平	AIによる自動運転
	科学②C班	仙台南	2	三浦悠也	介護 工学技術
	科学②C班	仙南向山	2	猪股楓佳	思春期 ネガティブ
	科学②C班	仙台二華	2	今井拓心	モリンガ種子
	科学②D班	八戸工大第二	2	番沢元陽	鬼ごっこドローン
	科学②D班	仙南向山	2	阿部ゆりな	看護人材不足
	科学②D班	仙台南	2	山田希夏	トウホクサンショウウオ
	科学②D班	仙南向山	2	柴田真海	AIによる自動運転
	科学②E班	仙南向山	2	大井花里菜	看護人材不足
	科学②E班	仙台南	2	豊島啓太	介護 工学技術
	科学②E班	仙南向山	2	佐々木勇真	思春期 ネガティブ

科学の分科会では、「東北地方の強みを活かした〇〇〇プロジェクトを立ち上げよう」をテーマとして、  
について意見を交わした。全体として 東北の強みを活かした観光や新しい輸送方法 などのアイデアが  
発表され、大変に活発な議論の場となった。

#### <テーマ・課題>

- ◎テーマ：『みらい東北 2040 年の科学』
- 課題例①:バーチャル空間の実現とその問題点
- 課題例②:みらい東北 2040 年の観光
- 課題例③:食と健康


#### <改善策・解決策のアイデア>

- アイデアの例①：『バーチャル空間での旅行や買い物、ドローン配送』  
内容：足の不自由な方、遠出がしにくい高齢者に使ってもらう。地元の特産品などを売る。
- アイデアの例②：『自然を活かした観光地で若い世代を集める』  
内容：自然が豊かなところを観光地化して発信していく。
- アイデアの例③：『食品の安定した供給による健康な生活を送る』  
内容：工場化の推進、新たな輸送手段、ドローンを使った輸送、シュミレーションを用いて環境のリスクを検討する。

#### <助言・講評>

- アイデア①→どうしたらお金を出したいと思えるか。
- アイデア②→どうやったら具体化できるか。
- アイデア③→どういう風に安定させていくかという着目点が良かった。利用されていないところを利用するという視点も良かった。

<代表チーム発表スライド>


第3回 みらい東北 高校生国際サミット 発表資料 

---

午後の部 生徒ワークショップ

## みらい東北2040年の『技術活用』 Aメリカンドッグ班


〇〇〇〇教室 20260314

1. 私たちが考えるみらい東北【アイデア提案】 

---

### バーチャル空間の実現とその問題点


第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

2. 私たちが考えるみらい東北【ストーリーボード】 

---

<p>想定される困りごと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>交通の不便 →高齢者がショッピング🛒に行きづらい</li> <li>高齢者増加が著しく増加</li> </ul>	<p>アイデアによる具体的な解決のイメージ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>バーチャル空間（高度なAI技術の補助）</li> <li>ドローン配送</li> </ul>
<p>アイデアによる具体的な解決のイメージ補足</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>バーチャル空間による旅行、買い物ができるようになる。</li> <li>ドローンで高齢者に食べ物や物を配送できる。</li> </ul>	<p>解決によるハッピーな様子</p> <p>高齢者の怪我や病気が減る 高齢者になっても好きなものが買うことができる→精神的に満足できる。 東北のイベントなどが近くに感じて楽しむことができる→東北の魅力を全国に！</p>

第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

3. アイディアの実現に向けて 

---

<p>ICT・デジタル機器を活用して出来ること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>五感を感じることができるもの VR、プラットフォーム、ゲームエンジニア</li> <li>アシストスーツ</li> <li>自動運転</li> </ul>	<p>自分たちにできること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自動運転のいいところを言う</li> <li>VRで自分たちで実践して東北のイベントをPR。</li> <li>自分たちで東北の魅力を撮影</li> <li>アシストスーツを着て自分たちで実験してみせる</li> <li>知識を蓄えておく</li> </ul>
--	---

第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

文化・教育①カテゴリー 東北工大922教室					
助言者	渡邊先生【仙台東】		水谷先生【福島成蹊】		渡邊優先生【仙台城南】
生徒進行	大久保柚歩【東北文教大山形城北】				
生徒記録	兼下花【泉】		阿部優先生【仙台城南】		
		高校	学年	名前	発表テーマ
	文化・教育①A班	仙台城南	1	平野麗紗	インクルーシブ教育
	文化・教育①A班	仙台東	1	田口孔明	平等な教育
	文化・教育①A班	仙台向山	2	中村洸惺	日本文学と社会
	文化・教育①A班	仙台向山	2	渡邊秀人	学習意欲
	文化・教育①B班	仙台城南	2	馬場真優綺	時間の価値
	文化・教育①B班	仙台東	1	佐藤美優	平等な教育
	文化・教育①B班	盛岡白百合	1	畠山十和	アクティブラーニング
	文化・教育①B班	仙台向山	2	戸牧薫音	日本文学と社会
	文化・教育①C班	仙台城南	2	曾根智也	子供の多様な生き方
	文化・教育①C班	仙台東	1	残間聖蘭	教育環境
	文化・教育①C班	仙台向山	2	橋本凜	学習意欲
	文化・教育①D班	仙台東	2	川口夢登	ファッションと性別
	文化・教育①D班	仙台向山	2	石原珠那	学習意欲
	文化・教育①D班	福島成蹊	1	後藤優亜	教育の価値

文化・教育の分科会では、「東北地方の強みを活かした〇〇〇プロジェクトを立ち上げよう」をテーマとして、みらい東北 2040 年の『文化・教育』について意見を交わした。全体として AI を最大限に活用したアイデアやポイ活を導入するなどのアイデアが発表され、大変に活発な議論の場となった。

#### <テーマ・課題>

◎テーマ：『①AI を活用した健康寿命を延ばすシステム』

『②作ってみたいを継いでみたいに』

『③教員を増やそう！』

○課題例①：少子高齢化により現役世代の金銭的負担が増加してしまう

○課題例②：子どもが外に出る機会が減ったことで伝統に興味を持たなくなる

○課題例③：学校教員が減少していることから教育の格差が生まれたり、不登校者の増加、教員の負担が大きくなる

#### <改善策・解決策のアイデア>

○アイデアの例①：『ゴミ拾い東北ランキングの実施』

高齢社会の現在、健康寿命を延ばす一つの取り組みとしてゴミ拾いから運動不足を解消できるというアイデア。自分たちにできることとして、計量ができたりこのプロジェクトと連動できる専用ゴミ袋の開発、まずは自分たちからゴミ拾いを始める。このプロジェクトから、健康意識が向上するだろう。

○アイデアの例②：『食事管理システム』

地元の食材から健康的な食事を提案したり管理するシステムから地産地消につながったり、これも健康寿命を延ばすことにつながる。

○アイデアの例③：『塾を作る』

やってみたい！と思ってもなかなか始められる機会はないため、やりたい！を実現できるような塾をつくる。子どもが個性を发表或裏、オンラインでも学べる形がとれる。また、正しい知識を身につけて語り部になることで伝統を継ぐことができる。


○アイデアの例④：『学校の雰囲気やイメージをよくする』

内容学校の雰囲気やイメージをよくすることで教員を志望する人が増えるだろう。また、生徒の意見を積極的に取り入れることで教員への信頼に繋がり、こんな先生になりたいにつながるだろう。生徒も教員も充実した学校を作ることが大切。また、生徒との交流の場を増やすことで楽しい！を増やす。

#### <助言・講評>

内容としては、短時間だったにも関わらず現実的でおもしろい解決策が多く出されていたが、それを本当に実施するとなった場合に高齢者などの参加者は本当に参加してくれるのか、どうすれば参加してくれるか、までを考えると良い。また、生徒という立場から当事者として何ができるのか具体的な内容、カテゴリーに分けた解決方法が考えられるとさらに良い。SNS の具体的な活用方法やポイ活の方法などをさらに具体化し、当事者の意見もあればよりよい解決策になるだろう。

<代表チーム発表スライド>


第3回 未来東北 高校生国際サミット 発表資料 

---

午後の部 生徒ワークショップ

## 未来東北2040年の『文化・教育』 A班


〇〇〇〇教室 20260314

1. 私たちが考える未来東北【アイデア提案】 

---

### AIを活用した健康寿命を伸ばすシステム！

第3回 未来東北 高校生国際サミット 20260314

2. 私たちが考える未来東北【ストーリーボード】 

想定される困りごと

- ・現状、少子高齢化により現役世代の負担が増加
- 金銭的負担
- ・仕事や介護など若者の負担が増えている

アイデアによる具体的な解決のイメージ

- ・食事管理システム（食生活の改善）
- AIを活用して、メニューや作り方の提案・食材の配送などを行える。地産地消とか


アイデアによる具体的な解決のイメージ

- ・ゴミ拾い東北ランキング（運動不足解消）
- 専用のゴミ袋でゴミを拾いその重さを測る
- ポイ活(AIによる職業の減少)

解決によるハッピーな様子

- ・みんな健康
- ・キレイで環境に優しいまちづくり
- ・現役世代の負担の軽減

第3回 未来東北 高校生国際サミット 20260314

3. アイデアの実現に向けて 

ICT・デジタル機器を活用して出来ること

- ・AIを活用して健康的な食事の献立を考える
- ・ゴミを拾った量を測り、ランキング化
- ・SNSを活用し、健康意識の大切さを広める

自分たちができること

- ・専用のゴミ袋を作る
- ・ゴミ拾いをする
- ・健康意識の向上

第3回 未来東北 高校生国際サミット 20260314

文化・教育②カテゴリー 東北工大923教室					
助言者	小泉先生【仙台城南】		高橋和先生【仙台城南】		小野先生【仙台向山】
生徒進行	杉翠月【泉】				
生徒記録	黒澤理子【東北文教大山形城北】			佐藤寛先生【仙台城南】	
		高校	学年	名前	発表テーマ
	文化・教育②A班	仙台城南	1	小山内希音	インクルーシブ教育
	文化・教育②A班	仙台東	1	松岡栞那	平等な教育
	文化・教育②A班	盛岡白百合	1	小澤花絵	子供らしく
	文化・教育②A班	仙台向山	2	沼下あさ陽	学習意欲
	文化・教育②B班	仙台東	1	澤田美和	平等な教育
	文化・教育②B班	仙台向山	2	村井愛	学習意欲
	文化・教育②B班	仙台東	1	熊谷優汰	教育環境
	文化・教育②B班	仙台城南	2	菅井梨々花	時間の価値
	文化・教育②C班	金沢大附属	2	喜多輝	ボードゲーム
	文化・教育②C班	仙台向山	2	吉田光輝	学習意欲
	文化・教育②C班	仙台東	1	吉川佑	平等な教育
	文化・教育②D班	仙台城南	2	齊藤士温	子供の多様な生き方
	文化・教育②D班	仙台東	1	五戸希帆	教育環境
	文化・教育②D班	仙台向山	2	永沼薫子	日本文学と社会

文化・教育の分科会では、「みらい東北 2040 年の文化・教育」をテーマとして、若者の都市への流出や祭りの後継者不足、農家の減少などについて意見を交わした。

全体として若者に注目されるような工夫や認知度を高めるためのアイデアが発表され、大変に活発な議論の場となった。

#### <テーマ・課題>

◎テーマ：『みらい東北 2040 年の「文化・教育」』

○課題例①：若者が都市へ行ってしまい、経済が発展しなくなる

○課題例②：お祭りの後継者不足

○課題例③：お祭りの認知度の低下

○課題例④：農家の減少からくる食糧問題

#### <改善策・解決策のアイデア>

○アイデアの例①：『スローライフ系のゲームを作る』

内容：東北出身の配信者から PR してもらう。東北の文化や郷土料理を内容に取り入れる。

○アイデアの例②：『おしゃれな屋台を作る』

内容：流行のものとコラボレーションし、若者に注目されるような工夫をする。

○アイデアの例③：『SNS での発信』

内容：広告なども出しつつ、認知度をどんどん増やす。

○アイデアの例④：『AI を活用した農業』


内容：農業用ドローンや水分量の管理を自動で行う装置、意図的に雨を降らせる新技術の活用。

#### <助言・講評>

○全体として問題解決の糸口にたどり着けたことが素晴らしいと思った。

○東北は間違いなく人口減少の一途を辿っていくことが予想されるため、AI を活用した取り組みをもっと掘り下げていくとよいと思った。

<代表チーム発表スライド>

第3回 みらい東北 高校生国際サミット 発表資料 


---

午後の部 生徒ワークショップ

みらい東北2040年の『文化・教育』

**A班**


〇〇〇〇教室 20260314

1. 私たちが考えるみらい東北【アイデア提案】 

---

オンラインスローライフゲームin東北


第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

2. 私たちが考えるみらい東北【ストーリーボード】 

---

<p>想定される困りごと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・文化、自然の衰退</li> <li>・若年層の都市への流出</li> <li>・経済発展ができない</li> </ul>	<p>アイデアによる具体的な解決のイメージ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・過疎化地域に関心が向く</li> <li>・海外の方などにも東北に興味を持ってもらえる</li> <li>・テーマパークの衰退を救う</li> </ul>
<p>アイデアによる具体的な解決のイメージ補足</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地方出身の方にprしてもらおう</li> <li>・通信プレイ</li> <li>・郷土料理や地域ものを登場させる</li> <li>・学校での授業でも活用できる</li> </ul>	<p>解決によるハッピーな様子</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・過疎化問題の解決</li> <li>・伝統的な職業の担い手不足の解消</li> <li>・売り上げを東北地方の発展に向けての募金にあてる</li> </ul>

第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

3. アイディアの実現に向けて 

---

<p>ICT・デジタル機器を活用して出来ること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他のゲーム機器でも配信してプレイできる年齢層を広げていく</li> <li>・テレビなどで高齢者向けに発信する</li> </ul>	<p>自分たちができること</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校生が主体となってアプリ開発や当事者としての立場でサポーターとなり過疎化問題と向き合っていく</li> </ul>
--	--

第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

まちづくりカテゴリー 東北工大914教室					
助言者	櫻井さん【日本旅行】 阿部先生【聖霊学園】 横橋先生【泉】 小野先生【仙台城南】				
生徒進行	石川咲妃【盛岡白百合学園】				
生徒記録	佐藤大世【福島成蹊】		表先生【仙台城南】		
		高校	学年	名前	発表テーマ
	まちづくりA班	仙台城南	2	徳田一心	空き家の再利用
	まちづくりA班	山形城北	2	石川直桜	学生と地域
	まちづくりA班	盛岡白百合	1	佐藤好	大型商業施設と商店街
	まちづくりA班	山形城北	2	松浦茉生	バリアフリー
	まちづくりB班	山形城北	2	荒川知歩里	学生と地域
	まちづくりB班	仙台城南	2	大村颯	交通弱者
	まちづくりB班	山形城北	2	村川武蔵	バリアフリー
	まちづくりB班	福島成蹊	1	武田真歩	フィリピンの都市とスラム
	まちづくりC班	仙台城南	2	中村太誠	空き家の再利用
	まちづくりC班	仙台東	2	高橋昊生	おばちゃんリサーチ
	まちづくりC班	山形城北	2	横山凱弥	バリアフリー
	まちづくりD班	仙台城南	2	佐藤雄真	交通弱者
	まちづくりD班	山形城北	2	近野和佳奈	バリアフリー
	まちづくりD班	盛岡白百合	1	柳瀬心結	私たちがつくる故郷

まちづくりの分科会では、「東北地方の強みを活かしたまちづくりプロジェクトを立ち上げよう」をテーマとして、人口問題やインフラについて意見を交わした。  
全体として、自動運転、ロボットの活用などのアイデアが発表され、大変に活発な議論の場となった。

#### <テーマ・課題>

- ◎テーマ：『2040年の東北のまちづくり』
- 課題例①：災害が多い
- 課題例②：人口減少
- 課題例③：一極集中
- 課題例④：人口の流出


#### <改善策・解決策のアイデア>

- アイデアの例①：『高齢者が素早く避難できるバス』  
内容：災害時に遅れをとってしまう高齢者が無事に避難できるように災害時用のバスをつくる
- アイデアの例②：『ロボットの活用』  
内容：農業に関わる人が減っていることから、人間ではなくロボットに農業をさせる
- アイデアの例③：『中心地から程よく離れた場所に大型ショッピングモールを建てる』  
内容：都市部への一極集中が問題となっているため、都市部ではない場所にも人を集める
- アイデアの例④：『小中高大一貫の学校を作る』  
内容：同じ学校に長く通うことでその地域からの人口流出を防ぐ

#### <助言・講評>

- 全体として学校をつくる、商業施設をつくるなど、人口減少を防ぐようなアイデアがたくさん出されたことが素晴らしかった。
- 人口問題に対する理解を深めることによって、より東北のまちづくりに貢献できるのではないか。

<代表チーム発表スライド>


第3回 みらい東北 高校生国際サミット 発表資料 

午後の部 生徒ワークショップ

みらい東北2040年の『働き方』


まちづくりB班

〇〇〇〇教室 20260314

1. 私たちが考えるみらい東北【アイデア提案】 


人口が減っていく中でどのように働いていくか

第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

2. 私たちが考えるみらい東北【ストーリーボード】 

<b>想定される困りごと</b> 働く人がいなくなる 農業が衰退	⇒	<b>アイデアによる具体的な解決のイメージ</b> 外国人の雇用を増やす 機械化
<b>アイデアによる具体的な解決のイメージ補足</b> 企業との連携 助成金の拡充	⇒	<b>解決によるハッピーな様子</b> 仕事が楽になる

第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

3. アイディアの実現に向けて 

<b>ICT・デジタル機器を活用して出来ること</b> ネットで外国人を募集 農業の機械化	<b>自分たちにできること</b> 英語話せるようにして、外国人が住みやすくなるようにする
---	--

第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

国際理解カテゴリーー 東北工大935教室					
助言者	島田さん【JICA東北】 成田先生【盛岡白百合】 鈴木堅先生【仙台城南】 脇坂先生【仙台城南】				
生徒進行	星はるか【仙台東】				
生徒記録	戸田裕綺【福島成蹊】		佐藤悠先生【仙台城南】		
		高校	学年	名前	発表テーマ
	国際理解A班	仙台東	2	櫻井涼斗	日本の食料高騰
	国際理解A班	仙台城南	2	柏木涼昊	国際協力
	国際理解A班	仙台城南	2	山下悠	教育格差
	国際理解A班	聖霊学園	2	武藤陽菜乃	災害支援
	国際理解B班	盛岡白百合	2	安部花音	Language Barriers
	国際理解B班	仙台城南	2	高橋心花	国際協力
	国際理解B班	聖霊学園	2	鈴木菜々	災害支援
	国際理解B班	仙台城南	1	佐藤弘晃	インクルーシブ教育
	国際理解C班	福島成蹊	1	片平采	スイスの隠れた貧困
	国際理解C班	仙台城南	2	根井優奈	国際協力
	国際理解C班	聖霊学園	2	佐々木暖乃	災害支援
	国際理解C班	仙台城南	1	後藤琉聖	インクルーシブ教育
	国際理解D班	仙台城南	2	浅野公哉	国際協力
	国際理解D班	福島成蹊	1	小池智香子	スイスと日本
	国際理解D班	金沢大学附属	1	内田知一郎	グラフ理論

国際理解の分科会では、「東北地方の強みを活かした多文化共生プロジェクトを立ち上げよう」をテーマとして、文化の相互理解について意見を交わした。  
全体としてデジタル技術の活用などのアイデアが発表され、大変に活発な議論の場となった。

#### <テーマ・課題>

- ◎テーマ：『多文化共生による東北の発展』
- 課題例①：言語の壁
- 課題例②日本のマナーと地域ルール
- 課題例③SNS に頼りすぎない
- 課題例④地域文化の発信


#### <改善策・解決策のアイデア>

- アイデアの例①：『VR と地域文化体験』  
内容：東北の伝統文化を VR やゲームで体験できるようにし、楽しみながら日本の魅力やルールを学んでもらう。
- アイデアの例②：『地域参加型の多文化交流 祭り、イベント』  
内容：SNS の発信だけでなく、実際の「祭り」に外国人が参加し、直接触れ合うことで「人とのつながり」を強固にする。
- アイデアの例③：『旅行会社、自治体と連携したルールの啓発活動』  
内容：アンケート調査を実施し、外国人の困りごとを把握する。ホームページや旅行サイトを通じて正しいマナーを周知する。
- アイデアの例④：『若者による伝統文化の世界発信』  
内容：まず自分たちが地域の伝統を学びなおし、その価値をデジタルの力で世界中へ拡散する。

#### <助言・講評>

- 全体としてデジタル技術とリアルな体験を融合させるなど、多角的で実践的なアイデアがたくさん出されたことが印象的であった。
- 地域の文化や現状に対する理解を深めることによって、より持続的な多文化共生社会を実現できるのではないか。

<代表チーム発表スライド>


第3回 みらい東北 高校生国際サミット 発表資料 

午後の部 生徒ワークショップ

みらい東北2040年の『新しい形』


D班

〇〇〇〇教室 20260314

1. 私たちが考えるみらい東北【アイデア提案】 


外国人の観光客と移住者を増やし、  
人口の増加に努める

第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

2. 私たちが考えるみらい東北【ストーリーボード】 

<p>想定される困りごと</p> <p>マナーをまもらないオーバーツーリズムにつながる行動のおそれ →東北はまだ起こっていないので、他の地域の反省をいかして、マナーの啓発などを行う</p>	<p>アイデアによる具体的な解決のイメージ</p> <p>祭りや食文化など、独自の文化で外国人をひきつけて、徐々に地域への親しみを育んでいき、最終的に移住につながる。</p>
<p>アイデアによる具体的な解決のイメージ補足</p> <p>祭りは実際に体験もでき、食文化は日本海と太平洋の双方に接する漁業がある。(東北には人気アニメの「聖地」も多い)発信にては、SNSに頼りすぎず小さくても直接的な交流を大切にす。</p>	<p>解決によるハッピーな様子</p> <p>自分たちにはなかった新しい意見、発想が出てきて、まちの活性化や、より良い東北地方の発展につながる</p>

第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

3. アイディアの実現に向けて 

<p>ICT・デジタル機器を活用して出来ること</p> <p>ICTなどで働ける環境を整備して、海外の人が東北において働きながら滞在し、文化を体験できるようにする。</p>	<p>自分たちにできること</p> <p>仙台城南高校が台湾の高校と姉妹校となっているような小さいつながりを大切にして、交流を拡大していく。焦らず、最終的な成功を目指す。</p>
--	---

第3回 みらい東北 高校生国際サミット 20260314

## アンケートへのお願い

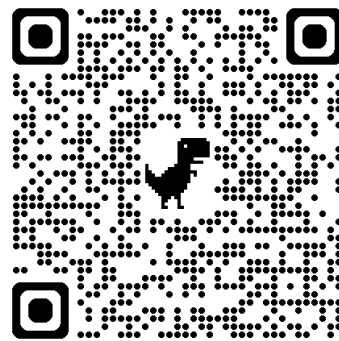
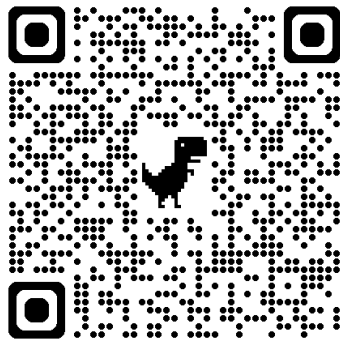
みらい東北高校生国際サミットへご参加いただき誠にありがとうございました。  
よろしければ、アンケートへのご協力をお願いいたします。

今後の開催時に参考にさせていただきます。ご記入いただいた内容は仙台城南高等学校で管理いたします。ご回答方、どうぞよろしくお願いいたします。

回答〆切      :   2026年3月16日（月）

《教職員用アンケート》

《生徒用アンケート》

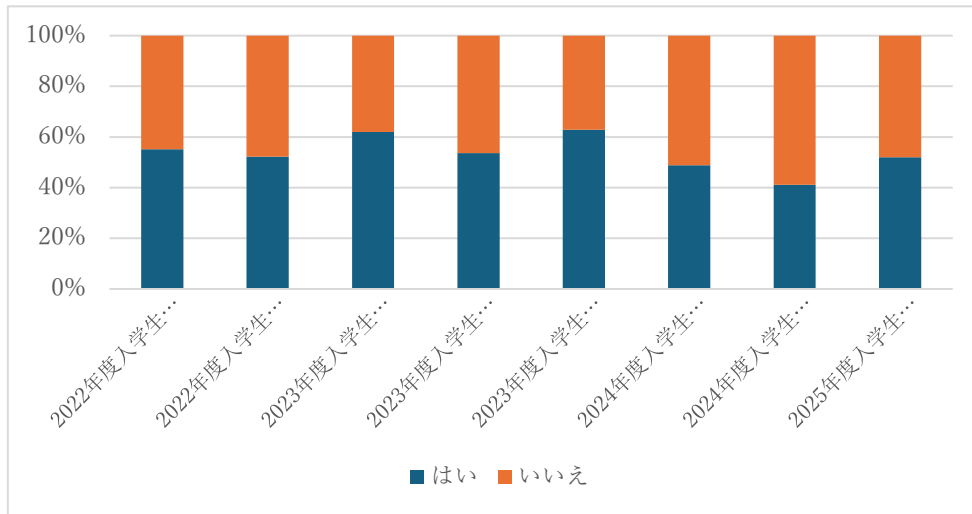




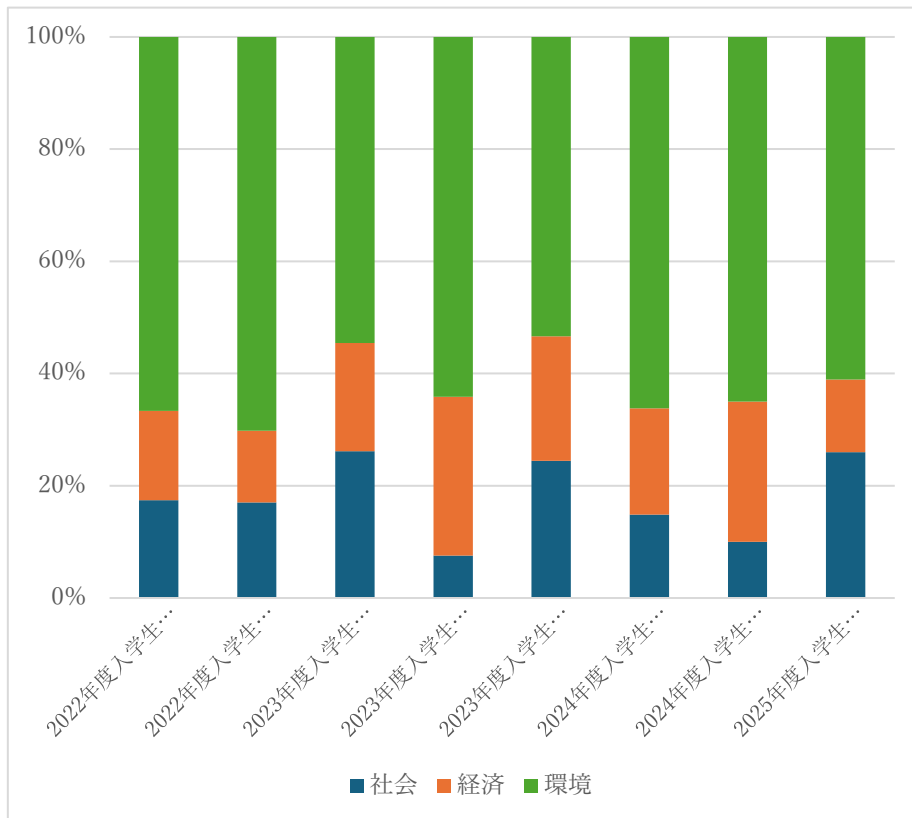
## 7. 令和7年度WWLに 関するアンケート結果

## サステナビリティ理解

### 1. あなたはSDGsについて興味や関心がありますか？

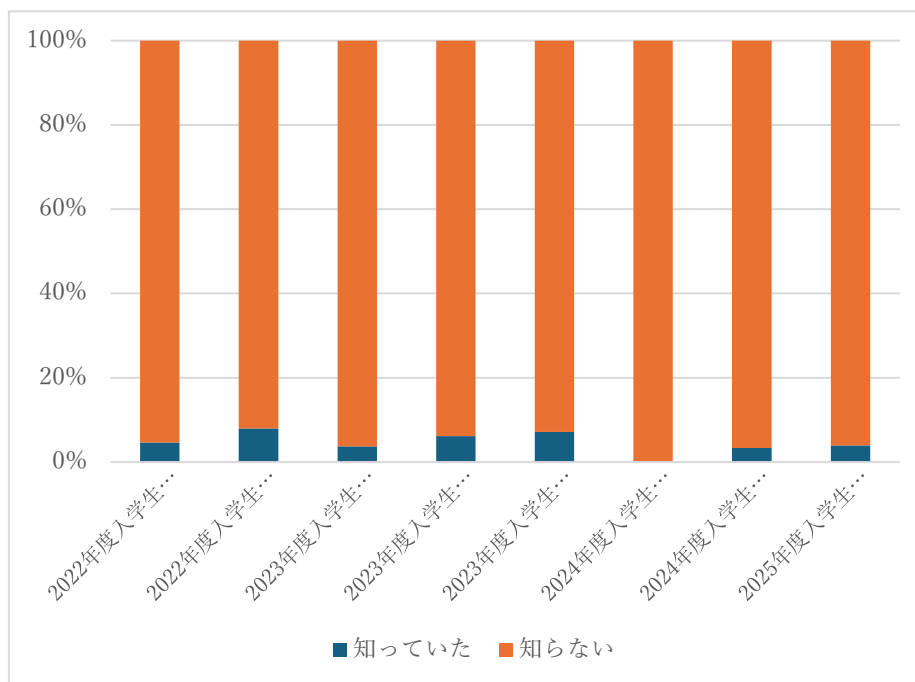


### 2. 1で「はい」と答えた方は、SDGsの「社会」「経済」「環境」の3分野で一番関心の高い分野を教えてください。



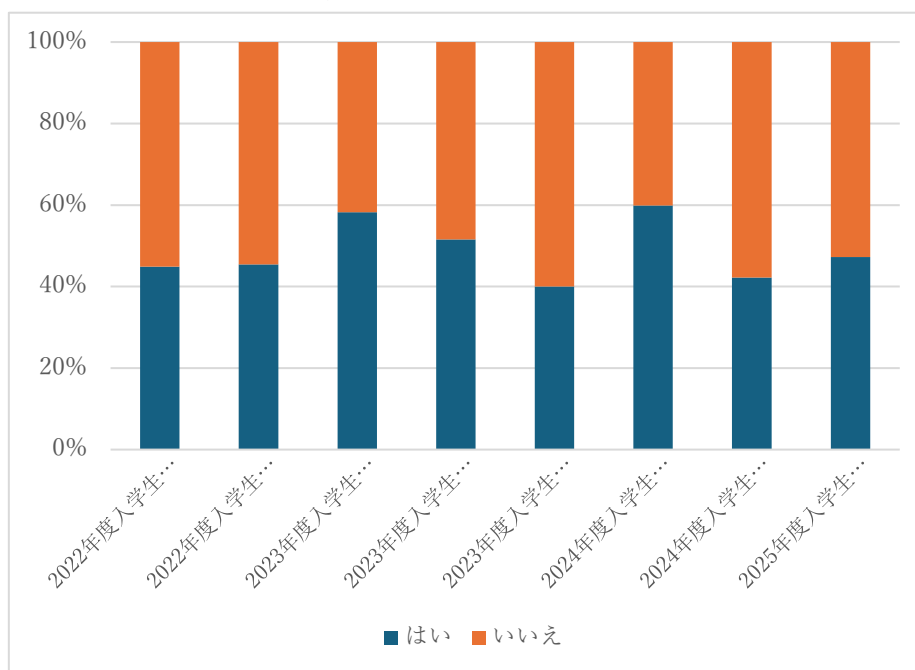
## DX（デジタルトランスフォーメーション）理解

### 5. DX という言葉について知っていましたか？

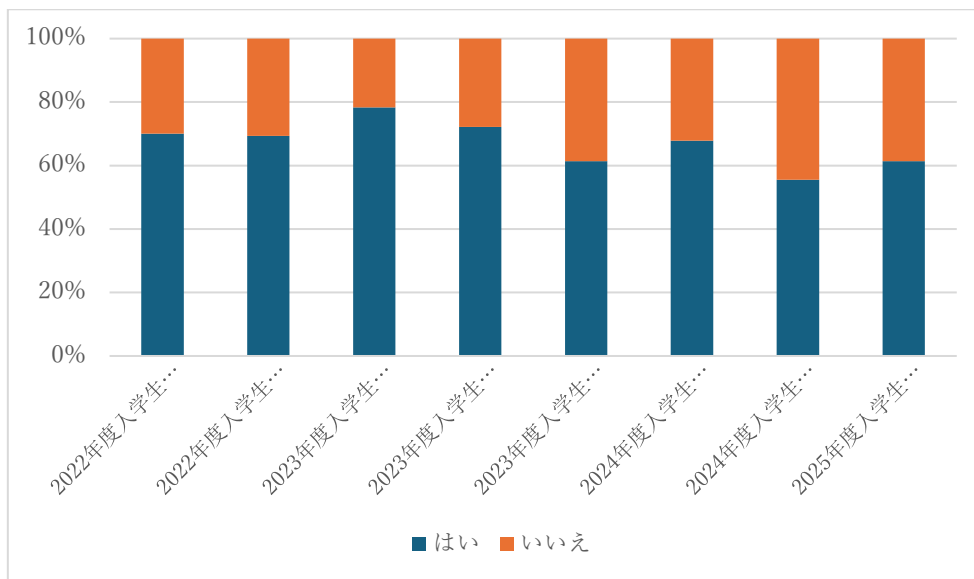


## デジタル技術 関心・関わり

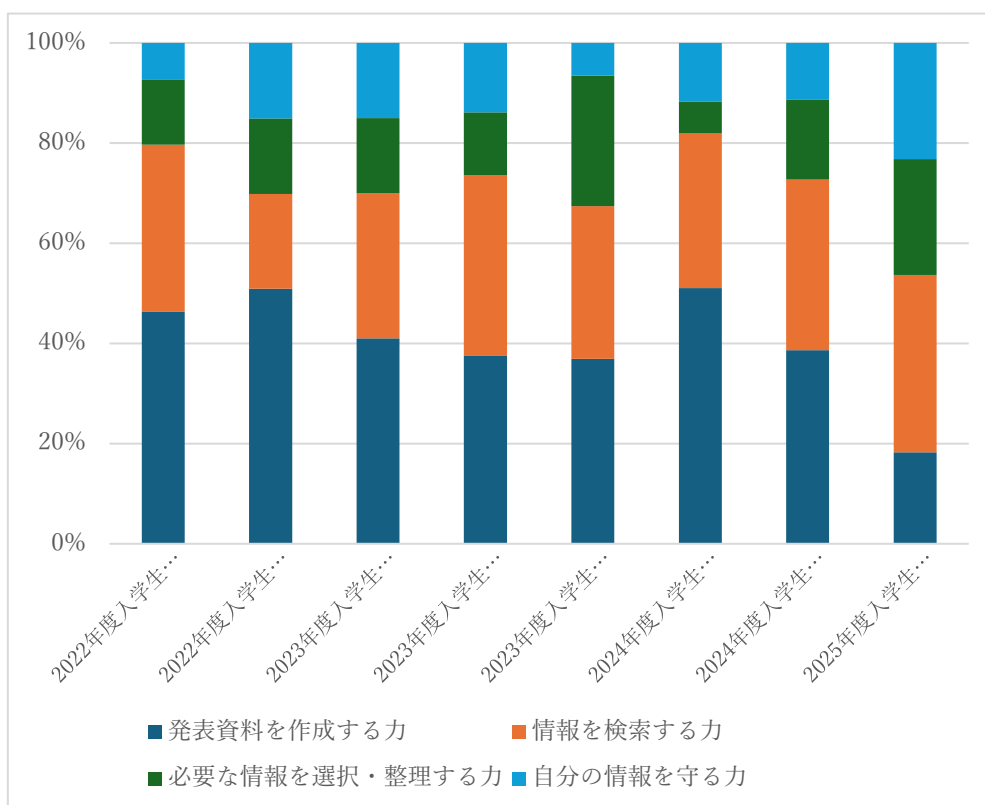
### 10. 昨年度と比べて学校で ICT を使う頻度は増えましたか？



12. ICT 機器の活用によって、教科の学習において自分の力を伸ばすことができましたか？



13. 12で「はい」と答えた方は、ICT 機器を活用する中で、伸ばすことができたのはどんな力ですか？



## アンケート結果を受けて

令和5年度普通科総合進学コース1年生を対象に本事業を行ってきた。本事業構想概要「みらい東北のサステナビリティとDXを牽引する人材育成」を目標に活動を進めてきた。アンケート結果から、以下の傾向が見られた。

### 1. サステナビリティへの関心度

「サステナビリティ」に関する関心度は、学年が上がるにつれ低下していく傾向が見られた。また関心の高い分野の順位は「環境」「経済」「社会」の順で、昨年度と同様の傾向が見られた。一方で、学年が上がるにつれ、「環境」分野から「経済」「社会」分野への関心が移動していっていることが読み取れる。

これは最初に与えられた「サステナブル」というキーワードから「環境」について関心が強まり、学習を進め進路選択をしていく中で、個人の関心が「経済」や「社会」に移っていったのが原因だったのではないかと推察される。

### 2. DX（デジタルトランスフォーメーション）への理解度

「DXという言葉について知っているか」という質問では、「知っていた」と回答した割合が昨年度よりわずかに増加していたが、ほとんどの生徒にとって「DX」という言葉は身近では無い事が窺える。

また「ICTを使う頻度は増えたか」という質問では、これも学年が上がるにつれ減少する傾向が顕著であったが、普段の生徒の様子を見ていると、様々な場面でプレゼンテーション資料を作成し発表したり、各種情報をDocumentsへ格納したり取り出したりと、学年が上がるにつれそのスキルは格段に上がっていているように感じられる。

### 3. ICTを活用して伸ばせた力

「ICTを活用して伸ばせた力」に関する回答では、これまでと同様に「発表資料を作成する力」「情報を検索する力」の順で高かった。ただし、「自分の情報を守る力」と「必要な情報を選択・整理する力」の順位に変化が見られ、今年度は「必要な情報を選択・整理する力」がわずかに「自分の情報を守る力」を上回っていた。

これらの結果から、サステナビリティへの関心の変化や、DXやICTの活用に関する生徒の意識やスキルの向上が一定程度見られたことが分かった。

アンケート結果をふまえ、以下の3つの課題が考えられる。

1. サステナビリティへの関心度の低下
2. DX（デジタルトランスフォーメーション）の理解の浅さ
3. ICT活用スキルの偏り

## 4. 課題と解決に向けて

### 【課題1】 サステナビリティへの関心度の低下

#### (1) 多分野の関連性を学ぶ探究活動の導入

- ・「環境」「経済」だけでなく、「社会」分野（貧困、ジェンダー、福祉、教育など）の課題も取り上げ、サステナビリティの多様な側面に触れる機会を増やす。
- ・各分野が相互に関係していることを理解させる教科横断型の学習を推進する。

#### (2) 社会・経済分野との関連づけ

- ・身近な社会問題（地域格差、ジェンダー不平等など）をテーマとした事例分析やグループディスカッションを取り入れ、社会分野への関心を喚起する。

#### (3) グローカルな視点で物事を捉える力を養う

- ・グローバル→ローカルだけでなく、ローカル→グローバルの視点で物事を捉え、自分たちの身の回りで起きていることが、いかに世界につながっているかを実感させ、社会課題を自分事として捉えることが出来る視点を育む

### 【課題2】 DX（デジタルトランスフォーメーション）の理解の浅さ

#### (1) DXの活用事例の紹介と体験学習の機会拡充

- ・企業や自治体がDXを活用して課題解決した事例を紹介し、生徒に具体的なイメージを持たせる。
- ・探究活動でのフィールドワーク等で、AI、IoT、ビッグデータなどの技術を活用する体験型学習の機会を得る。

#### (2) 身の回りで既実践している事がDXに繋がっている事を理解する

- ・ICT機器（本校では1人1台のiPad所有）を活用し、データ・情報の収集をし（Web検索、写真・動画の撮影、アンケートの実施・集計）、プレゼン資料の作成・発表・サーバーへのデータ提出等をする過程で、生徒たちは知らず知らずの間にDXの恩恵を受けている。それらの活動の一つ一つが、未来のDX活用に繋がっていることを自覚させるべきだ。

### 【課題3】 ICT活用スキルの偏り

#### (1) 情報リテラシー教育の強化と論理的な情報整理の指導

- ・現代の生徒たちはスマートフォンに始まりPCやiPadなどICT機器には日常的に触れており「調べる」能力に関しては非常に長けている。ただしそれが信頼性のある情報かどうかの見極めや、その情報を基に自分たちで「考察する」事が非常に苦手である。調べた情報を自分たちで検証し、時には批判的思考で物事を捉え、論理的に情報を整理する力が必要だ。
- ・グループワークやディスカッションを通じて、複数の情報を比較・整理する力を身につけさせたい。

#### (2) データ活用・整理スキルの実践機会の提供

- ・ICTを活用したデータの収集・整理・分析の機会を探究活動で増やし、情報の選択・整理スキルの向上を図る。

(3) プレゼン資料作成だけでなく、発信する力まで含めた指導

- ・「発表資料を作成する力」だけでなく、いかに自分たちの探究活動が社会に貢献できるのか、中身を伴った資料の作成と、聴衆の心をいかにして掴むかまで考慮した発表ができるかを指導していく必要がある。

これらの対策により、生徒のサステナビリティへの関心の幅を広げ、DXへの理解と実践力を高め、そしてICT活用スキルのバランス向上と生徒の主体的なICT活用姿勢を育んでいきたい。

## 10. WWL事業3年間の成果

**令和6年度 みらい東北高校生プレサミット 生徒実行委員会委員長**  
**仙台城南高等学校 総合進学コース3年 山田 舞桜**

私は、「令和6年度 第2回みらい東北高校生プレサミット」で生徒実行委員長を務めました。実行委員長として最も大変だったことは、慣れない立場で皆をまとめ、前に立って指揮を執ることでした。また、当日のプレサミットを成功させなければならないという責任の重さや緊張感もありました。しかし、各高校から集まった生徒の皆さんと何度も話し合いやシュミレーションを重ね、協力しながら準備を進める中で、仲間と共に1つのものを創り上げていくことの楽しさや達成感を得ました。

その過程で、積極性やコミュニケーション能力などの自分の中の新たな一面を知ることができたり、さらに伸ばすことができました。この経験は、今後の大学生活においても大いに活かしていきたいと考えています。また、日常生活の中でも積極的に挑戦を続けていくことで、まだ自分も気づいていない自らの可能性を広げていきたいです。

私はこの活動の中で、本来知り合うことのできなかつた仲間と出会い、貴重な時間を共に過ごせたことに大きな喜びを感じています。後輩の皆さんにも人との繋がり、出会いを大切にしたいです。大変なことや難しいこともいっぱいあると思いますが、この場に選ばれた優秀なみんななら大丈夫です！頑張ってください！応援しています。

**令和6年度 みらい東北高校生プレサミット 生徒実行委員**  
**令和7年度 みらい東北高校生国際サミット 生徒実行委員会委員長**  
**仙台城南高等学校 総合進学コース2年 草薙 奏**

私が実行委員長として活動する中で、最も難しさを感じたのは、正解がない中で方向性を示すことでした。多様な意見が出るたびに迷いも生まれましたが、その都度、私たちの活動の目的に立ち返り、「何を実現したいのか」を軸に判断するよう努めました。全員を完全に納得させる答えを探すのではなく、互いの意見を尊重しながら一つの形を創り上げていくことを心がけました。

また、実行委員長は単に前に立ち、指示を出す存在だけではなく、周囲の声に耳を傾けながら全体を支える存在であると学びました。意見をまとめていく上で様々な不安がありました。しかし、一人で抱え込むのではなく、仲間と共有することを意識しました。さらに役割を分担し、それぞれの強みを生かすことで、活動はより良い方向へと進むことができました。

今後はWWLで培った主体性を大切に、失敗を恐れず自ら考え、行動し続けることができるよう成長していきたいと思っています。そして自分の短所である「周囲に流され自我がない」という部分を自ら問いを立て、考えを発信できるように変化していきたいです。

これからWWLの活動に関わる後輩の皆さんには、正解がないからこそ遠慮せず意見を出してほしいです。一つ一つの意見は小さく見えても、積み重なることで大きな形になります。自分たちなりの東北の未来の答えを見つけ、WWLという環境で、たくさん自分の個性を溢れさせてください。

**令和6年度 みらい東北高校生プレサミット 生徒実行委員**  
**令和7年度 みらい東北高校生国際サミット 生徒実行委員**  
**仙台城南高等学校 総合進学コース 2年 中村 太誠**

生徒実行委員に選ばれて大変だったことは、他校とのコミュニケーションを取ることです。他県の高校から来るのでまったく相手のことを知らない状態で実行委員が始まるので話すことがとても大変でした。しかし、対面で集まった時に行ったゲームや話し合いなどで距離を縮めることができ、コミュニケーションを取ることができました。また、自分から積極的に話しかけることによって相手も話しやすくなりコミュニケーションが取りやすくなりました。この実行委員を通して学んだことは、新しいコミュニティを作ることができ、繋がりが増えるということです。県外の他校と行うためたくさんの人と関わることができ、繋がりを増やすことができます。今後この実行委員の経験を将来の夢に繋げていきたいと思います。積極的に相手とコミュニケーションを取りに行き、安心、安全で立派な家を設計できるようになりたいです。

最後にまったく知らない人とコミュニケーションを取ったり作業したりすることは難しいと思いますが、気持ちを楽にして思いっきり楽しめばいいと思います。これからも頑張ってください。

**令和7年度 みらい東北高校生国際サミット 生徒実行委員**  
**仙台城南高等学校 総合進学コース 1年 佐藤 凜**

高校に入学してからの一年間、WWLの活動を通して自分がしたことのない経験や責任を伴う場面が多いことを実感する機会が多くありました。また、他校の生徒の方たちとのコミュニケーションの取り方、グループワークの際に課題に対しての自分の意見を考える力や意見を発言する勇気を得ることができました。

その一方で大変だったことは、どんな活動をしているのか把握し、自分がやるべきことを明確にすることです。何もかもが体験したことのない光景や活動だったので慣れていくのにも必死でした。そんな私は、先輩方が行っていたリモート会議での発言や司会の仕方などを見て学んでいました。私がある場で一緒に活動に取り組むようになったときに困らないように、先輩方に原稿などの書き方や去年の活動内容などを聞いて対処していました。

また、年に何回か行う他校の生徒のときには、自分では考えられないような意見を耳にし学ぶことが多くありました。

今後の抱負は、今までの経験を活かし三月にある発表を頑張り、力を入れていくことです。また、WWLの活動を先輩方に頼りすぎているなど感じるが多かったため、今後は自ら行動するように意識していきたいと思います。

最後に、私がぜひ後輩へ伝えたいことは、WWLの活動は自分の今後の生活やプレゼンテーションでの発表にも役立つということです。

令和5年度 全国高校生フォーラム参加  
仙台城南高等学校 総合進学コース3年 野村 宏豊

私は、英検を受験するなど英語学習に取り組んでいた過程で、学校から勧められたことをきっかけに、WWL 全国高校生フォーラムでの探究活動に参加しました。活動の中で最も大変だったことは、英語力が十分でなかったため、発表内容を英語で理解し、暗記することでした。周囲には英検2級や準1級を取得している生徒が多く、ディスカッションのスピードや表現力の差に圧倒され、自分の語学力不足を強く実感しました。ディスカッションでは、学校の制服が男女によって分けられていることをテーマに、ダイバーシティについて話し合いました。学校によって違うだけでなく国や文化によって考え方が異なることについて話し合いました。また、英語で共有する中で、多様性を尊重する姿勢の重要性に気づきました。発表では、フィルムを剥がすことで下の容器をリサイクル、再利用できる「リリパック」について説明し、環境問題と企業の工夫を結びつけて考える力を養いました。これらの経験を通して英語力の必要性を強く感じ、3年次には英検2級に合格しました。今後は留学という目標の実現に向け、英検準1級やIELTSの学習に取り組み、より実践的な英語力を身につけていきたいです。また経営学に興味があるので英語という分野と結びつけて勉強を頑張っていきたいと思います。

仙台城南高等学校 総合進学コース 3年 中村 心海

私たちは、食堂で販売されているお弁当容器を、リサイクル可能なリ・リパックに変えることで、どれくらいリサイクルに回せるのか探究活動をしました。全国高校生フォーラムの発表に向けて、探究のテーマを考えた際、まず私たちの周りにはどんな課題があるのか調査しました。そこで、私はクラスで捨てられているゴミに着目し、清掃員さんにインタビューをした結果、各クラスで捨てられているゴミのほとんどがプラスチック製のお弁当容器であり、その全てがリサイクルされずに処分されているという現状を知りました。

この課題を解決するために、企業様と協力して、リ・リパックを使うことでどれくらいリサイクルに回すことができるのか検証をしました。これらの活動で特に大変だったことは、対話です。自分たちの力で企業にアポ取りをしたり、食堂で使用しても良いか目上の方と話し合ったり、初めての経験が多く、緊張や不安が常にありました。また、発表も質疑応答も全て英語であり、英語で話すことに対して苦手意識を持っていた私にとって、逃げ出したい時もありましたが、手などを使って諦めずに伝えようとする力を身につけることができましたと思います。

全国高校生フォーラムでは、私は発表する際に使用するポスターのデザインを担当しました。高校生入学からスライド制作の勉強をし続け、前例がないため白紙から作り上げたポスターですが、ピクトグラムや写真を貼り、表現を工夫することで分かりやすいポスターを作ることを意識しました。

高校生フォーラム全体を通して、苦労した部分もありましたが、その分多くの学びや身についた力がありました。英語が苦手な私でも、他校との交流することの楽しさを知り、英語をもっと学びたいという意識が芽生えました。今後はこの経験を活かして、たくさんの人とコミュニケーションを取りながら課題解決に取り組みたいと考えます。

## 仙台城南高等学校 総合進学コース3年 妻 敏貞

私たちは、WWLの全国高校生フォーラムにリリパックを題材に参加しました。リリパックを題材にした理由は城南高校のゴミの排出について興味を持ったからです。そこで、清掃員さんにお話を聞きどのゴミが多いのかを調査しました。お話によると食堂からのお弁当のゴミが多いのが問題と言われました。

そこで、試験期間を用いてリリパックという容器を再利用することができる物を使用してみました。リリパックの製造会社の方とお話を交え、メリットやリリパックの仕組みなどを伺いました。試験期間を経て、使用した人からアンケートを取り、使用感を聞いたり、様々先生や生徒さんからも意見を貰うことができ、改善する点などを確認できました。

大変だった点としては、リリパックの使用を説明する過程です。フィルムを剥がして容器を再利用するのですが、準備不足でポスターや放送のみすることができました。準備不足が改善点であると考えました。そして、全国高校生フォーラムの本番では、英語で発表をする必要があり、さらに英語でディスカッションも行う必要がありました。他校の人とのディスカッションでは、多様性や協力性を学ぶことができました。ですが、自分の英語の能力が足りないと自覚しました。英語ができなければ意見の交換や主張を説明できないと感じ、英語に力を入れるべきだと改めて感じることができました。

このような機会をくださった先生方、一緒に発表をした仲間たちに感謝をしたいと思います。

## 仙台城南高等学校 総合進学コース3年 星 大耀

今回、私たちは校内でリリパックを活用し、実際にどれだけリサイクル率が向上するのかを確かめる探究活動を行った。活動のきっかけは、学校内のごみを少しでも減らしたいという思いからである。ただ分別を呼びかけるだけでなく、仕組みを変えることで行動がどう変わるのかを検証したいと考えた。回収状況を調べ、数値で比較する作業は手間がかかり大変だったが、データをもとに考える大切さを学ぶことができた。

英語での発表では、文章をそのまま丸暗記するのではなく、意味ごとに区切りをつけながら覚える工夫をした。また、身振り手振りを加えることで、言葉だけに頼らず伝えることを意識した。実際のディスカッションでは会話の速さについていけず苦労したが、知っている単語を必死に出し、何とか自分の考えを伝えようと努力した。

他校の生徒の中には、日常的に英語のみで会話している学校もあり、継続的に英語に触れる経験の大切さに気づいた。同時に、語彙力だけでなく、伝えようとする姿勢そのものが大事だと実感した。

今回のフォーラムを通して、挑戦してみることでしか見つけられない課題があることを知れた。今後はさらに多く英語に触れ、実践の場を増やしながらか力を伸ばしていきたい。そして将来は、困っている外国人と日本人をつなぐ架け橋となれるよう、語学力と伝える力を磨いていきたい。

令和6年度 全国高校生フォーラム参加  
仙台城南高等学校 総合進学コース2年 阿部 結衣

私たちは、全国高校生フォーラムでヤングケアラーについての発表を行った。先輩方が作成したヤングケアラーの診断サイトを引き継ぎ、ヤングケアラーについて多くの人に理解してもらうために、このテーマを選択した。繊細な話題のため、ヤングケアラーの支援を行っている団体へのインタビューや、実際にヤングケアラーについての授業を中学生に行い、より理解を深めるとこに力を注いだ。

高校生フォーラムはポスター、原稿ともに全て英語での製作だった。長文の英語の原稿を作ることが初めてのことで、難しい単語も多く大変だったが、先生方に確認しながら、発音なども何度も繰り返し練習した。本番はとても緊張したが、練習の甲斐があり、忘れることなくはっきりと発音し、最後まで発表することができた。

ディスカッションでは、留学経験のある参加者が多く、自分の英語の実力を知り、英語学習に真剣に取り組むきっかけになった。

全国高校生フォーラムに参加したことで、ヤングケアラーなどの様々な知識を身につけることができた。普段の生活では体験することのできない大きな大会に出られたことで、緊張の乗り越え方や協力して取り組むことの大切さがわかった。たくさんの時間をかけ、大変なことも多くあったが貴重な経験になった。今後の生活にもこの経験を活かしていこうと思う。

仙台城南高等学校 総合進学コース2年 大泉 春菜子

私たちは、先輩方のヤングケアラーに関する活動内容をふまえ、それを引き継ぐようにして探究活動の内容を考えた。全て英語でポスターにまとめなければならなかったのが大変だったが、図や写真を活用し、見やすいポスターを完成させることができた。英語の発表では、英文を暗記して4人で分担するということが初めてで良い経験になった。これまでは英語の授業でプレゼンを英語で発表するということがあったが、英文の量も内容も多く、かなり練習が必要だった。覚えるだけでなく、先生に発音を教えてもらいながら練習したことで、英語の発音の意識も上がった。また、ワークショップやディスカッションでは留学経験のある人も多く、英語ができる人がほとんどだったため、英語の勉強を頑張りたいと思うきっかけになった。休みの日にも学校に行ったり、発表を時間内におさめるために繰り返し練習したおかげで、本番は内容が飛ぶこともなく無事に発表することができた。

調査やポスター制作から発表に至るまで、4人で準備したことは全国高校生フォーラムに参加しなければ得ることのできなかつた経験だった。同じ学年の英語が話せる人をたくさん見て、私も頑張ろうという気持ちになった。これからもこの経験を活かして英語の勉強に取り組みたいと思う。

私たちは全国高校生フォーラムでヤングケアラーに関する発表をしました。一個上の先輩方がヤングケアラーに関するwebサイトを作成して発表していたので、それを引き継ぎました。大変だったことは英文を覚えることです。単語を覚えるのとは違い、何行もある英文を覚えるため、みんなで集まった時だけでなく、家に帰って親の前で練習したり、お風呂に入っている時もひたすら声に出して覚えたりしました。発表をする際に工夫した点はジェスチャーをいれたり強弱をいれたりすることです。ジェスチャーをいれることで言葉だけでは伝わらない思いも伝わります。さらに強弱をいれることにより相手に一番伝えたいことを伝えることができます。ですが、それ以上に大変だったことがあります。それはすべてに意識をとばすことです。上記でも言ったように発表するにあたり英文を暗記しました。ですが、そこにプラスしてジェスチャーや強弱をいれたり目線もあげなくてはいけないため、英文の方を意識しすぎるとジェスチャーなどを忘れてしまいます。ですが逆にジェスチャーなどの方を意識しすぎると覚えた英文が一部とんでしまうため、すべてに意識をとばすことが本当に大変でした。

全国高校生フォーラムの全体を振り返り、とても貴重な経験をする事ができたと感じました。中学校まではあまり英語に深くは関わりがなく、授業で学ぶくらいでした。ですが、高校に入学し英語と深く関わる経験をする事ができ、とても楽しく、さらに他の言語にも興味を持つようになりました。今後は英語がスラスラ読めたり話したりまでとは言いませんが、日常会話で使える程度まではなりたいです。さらに他の言語にも興味を持つ事ができたため、いろいろな言語を話せるようになりたいです。そうすれば、言語という壁を難しい色んな人たちとコミュニケーションを取ることができ、自分だけでなく相手にも良い影響を与えることができるかもしれません。

私たちはヤングケアラーの現状や支援の仕方をこの探究活動を通して理解し、考えていき、全国高校生フォーラムで発表しました。私たちがこのヤングケアラーというテーマを掲げ活動したのは、先輩の作成したヤングケアラーの診断サイトを引き継ぎ、更に多くの人にヤングケアラーを知ってもらい、考えてもらいたいという想いを持ったためです。活動の中でヤングケアラーに対する声の掛け方が難しいということが分かり、それをどう発信するかというところに大変さがありましたがチームで考え、ヤングケアラーがしている仕事や家族のことを否定せず寄り添うことが大切だという意見を出すことができました。

全国高校生フォーラムでの発表では、早口になりすぎず暗記してきた英文を日本語の意味も理解しながら相手に伝えるという意識を持って発表しました。これは練習の時から意識していて、本番ではいつもと違う環境に緊張しましたがしっかり伝えることができたと感じました。

発表後に行われたワークショップ、ディスカッションでは県外の高校生との交流を楽しみながらも「社会的な幸福」というテーマに対して意見を持ち発表、共有できました。

最後にこの全ての活動を終えて、活動中はたくさん時間を削り大変なことも多かったが、誰にでもできることではないと感じたので、大学や社会に出てから自信を持って意見を出したり発表したりすることに繋げていけると良いと感じました。

令和7年度 全国高校生フォーラム参加  
仙台城南高等学校 特別進学コース1年 佐藤 弘晃

私たちは「インクルーシブ教育」をテーマに活動を行った。誰もが同じ場所で学ぶことは、多様性尊重の一つであるが、実際は個々の特性によって学習機会に格差が生じている。そこに強い疑問を持ち、国内での理解を広め、誰もが同じ学びを受けられる環境作りを目指したいと考え、この活動をすることにした。探究の過程で大変だった点は、理想と現実の差異をどう埋めるかという点である。私たちはICT活用により効率的な支援を理想としていたが、現場の先生へのインタビューにより、予算や運用体制など、技術導入が必ずしも現実的ではない実情を知った。理想論だけでは解決できない複雑さを痛感し、実効性のあるものを考えるのに苦労した。

英語での発表において、説得力を高めるために二つの工夫をした。第一にインタビューで得た「現場の意見」を引用し、現状を提示することでリアルさを持たせた。第二に聴衆の関心を引くため、重要な箇所や抑揚を大きくつけることを意識した。発表では複雑な内容を時間内に伝えきることに苦心したが、表現を変えることで乗り越えた。

「教育の未来」をテーマとしたディスカッションでは、AIやICTの活用に多くの生徒が行程的であるのが印象的だった。しかし同時に、ICTを活用する上での倫理的課題や環境格差といった「留意すべき点」についても意見が交わされた。ICTの活用は学習の効率化だけでなく、個々の特性に合わせた学習の実現につながると考えた。

この活動を通じ、専門的な内容を英語で発信し、議論できた経験は大きな自信となった。また、現地調査や他校との議論を経て、物事を多角的に捉え、理想と現実の差異を埋めるための思考力が養われたと感じている。今後は英語力の向上を目指すとともに、複雑な社会課題に対して、自らの意見を簡潔かつ論理的に届ける「伝える力」を磨いていきたい。

仙台城南高等学校 特別進学コース1年 後藤 琉聖

今回、私が高校生フォーラムに参加した主な目的は二つあります。

一つ目は、ワークショップ等のプレゼンテーションを通じて、未だに解決されていない社会および教育に関する課題について深く考え、自らの思考力を培うためです。学習面における思考力を高める目的もありますが、社会に出た際に、様々な問題解決のために熟考しなければならない機会が訪れると感じ、思考力の向上を志しました。

二つ目は、英語でのディスカッションを通じて、英語のスピーキングスキルを高めるためです。英語で思考し、他者と英語で話すという経験をほとんどしたことがなかったため、今回の活動はとて貴重なものとなりました。

この活動で最も苦労したことはプレゼンテーション発表の内容を覚える過程です。元々、私は記憶力があまり良くなく、覚えることがなによりも苦痛でした。苦手ながらも練習を重ね、本番当日には完璧といえる程まで覚え、スラスラと暗唱できました。

英語でのプレゼン発表というのは初の試みで、最初は上手いいかないことが多くありました。しかし、台本に書かれている英語の表現をより簡単にし、話しやすくするなど工夫を加えました。掲示用のポスターにはオリジナルのピクトグラムやそれらを元にクラスメイトにアンケートを取っ

たりと、発表をより良いものにするための努力を欠かさず、本番では最初に練習した時とは見違えるほど、良い発表が出来たと自負しています。

ディスカッションでは、他県の生徒の多種多様な考えを聞くことができました。県ごとに、考え方や価値観も違うことに驚きを感じました。

今回の活動に参加したことは、私にとって、確実にプラスになったと言えます。この活動の過程で、失敗や成功、そして努力は、私の成長の糧になりました。これからも自分の成長に向けて挑戦し続けたいです。

#### 仙台城南高等学校 総合進学コース1年 小山内 希音

今回、全国高校生フォーラムに参加し、私はインクルーシブ教育について探究した成果を、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターで発表した。

私たちがこのテーマを選んだ理由は、インクルーシブ教育がまだ十分に広まっておらず、その大切さを多くの人に知ってもらう必要があると感じたからだ。誰もが違いを認め合い、共に学べる環境をつくることは、これからの社会に必要不可欠だと考えた。

発表は英語で行われたが、私は英語が得意ではないため、原稿を何度も読み、発音や間の取り方を意識して練習を重ねた。さらに、聞き手に伝わりやすいように見振り手振りを加え、笑顔で話すことを心がけた。本番では、とても緊張したが、これまで練習してきた自分を信じて話し始めると、少しずつ落ち着いていき、最後までやり切ることができた。

他校の生徒とのグループディスカッションでは、自分の意見を自身を持って話す姿に刺激を受けた。自分にはまだ足りないことが多いと感じ、もっと勉強しないといけないと改めて感じた。

この経験を通して、挑戦することの大切さを実感した。また、自分の考えを発信することで、新しい意見や価値観に出会えることも学んだ。これからは学校生活の中でも積極的に発信し、友達と協力しながらより良い環境づくりに関わっていきたいと思った。そして、将来は多様な人が安心して学べる社会の実現に貢献していきたいと思う。

#### 仙台城南高等学校 総合進学コース1年 平野 麗紗

私は今回のWWLの活動でインクルーシブ教育について調べ、ポスターを作成し、英語による発表を行った。活動を始める前、私は英語の発音に強い苦手意識があり、英語でコミュニケーションを取ることに自信が持てなかった。そのため、授業で発言する際も声が小さくなったり、間違いを恐れて発言をためらい、黙ってしまったりすることが多かった。こうした自分を変え、英語を話すことに少しでも自信を持てるようになりたいと考え、この活動に参加した。本番では、流暢な英語を話す他校の生徒とディスカッションを行い、その高い語学力と豊かな表現力に大きな刺激を受けた。同時に、自分の知らない単語や聞き取れない表現があっても、身振り手振りを交えて意思を伝えたり、言いたいことを頭の中で整理してから落ち着いて話したりするなど、できる限りの工夫を重ねた。

その結果、自分の意見を述べるだけでなく、相手の考えを理解しようと意識しながら議論に参加することができた。この経験を通して、完璧でなくても積極的に挑戦する姿勢の大切さと、努力を

続けることで成長できるという手応えを学んだ。今後は、日常的に英語に触れる機会を増やし、自ら進んで発言することを心がけ、さらなる向上を目指して努力を重ねていきたい。

**13. WWLコンソーシアム構築支援事業  
カリキュラム開発拠点校としての  
指定3年間の総括**

## WWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム構築支援事業 カリキュラム開発拠点校としての指定3年間の総括

### 1. 研究開発課題

みらい東北のサステナブルとDXを牽引する人材育成ネットワーク

### 2. 研究開発の目的・目標

[目的]

みらい東北のサステナブルを題材に、DXによるビジョンメイキング型課題解決アプローチを探究する。

[目標]

ア SDGsに重点を置き、ICTを活用した探究型学習で地域課題の理解を深める。

イ 東北から世界で活躍するイノベティブでグローバルリーダー的人材を育成する。

ウ 大学や企業の先進的な研究開発を通して必要な資質を育む。

エ 同一法人に設置されている東北工業大学のDX&GX教育と連携し、より高度な学びを深める。

オ 学習効果を連携校と共有し、「みらい東北ALネットワーク」によって、東北から世界で活躍するリーダー的人材の育成とネットワーク拡大を図る。

### 3. 研究開発の内容と主な成果とその波及

#### A. 教科横断的な学びと探究活動の深化

社会課題の解決に向け、サステナビリティの視点を育成する具体的なカリキュラムとして、事業拠点校ではサステナビリティについて教科横断的に考える「SDGs DAY」を2021年度より実施している。1年生では「プラスチックスマート」について、2年生では「フードドライブ」について学び、それぞれの考え方をもとに生徒が主体的に地域の課題解決に向けた行動を起こす取り組みを行っている。この2つの活動について教科横断的な指導を行うことで、より深い学びを追究している。

「総合的な探究の時間」では、「社会貢献」をテーマとしている。「探究基礎」前期は「ライフデザインプログラム」にて、社会の把握と自己分析、後期は調査や探究の基礎を学ぶ。「探究IA」前期は、フィールドワークでNPOやボランティア団体を訪問し、後期は、研修旅行先の「台湾」と「日本」をSDGsの観点から比較する。「探究IB」では、前期は「ミニカレッジ」にて各大学の先生からの講義を聴講する。後期はゼミごとに分かれ、大学や企業フィールドワークを行い、自分たちで関心を持った課題について探究する。教科「探究」では、今までの活動を整理し、前期は進路研究、後期は卒業論文作成を行っている。

このように社会貢献を基盤とした、従来の教科の枠組みを超える学びによって、生徒は学習への探究心や社会参画への意識を向上させている。その結果、社会課題の解決を展望したキャリア形成へとつなげている。

また今年度、国際サミットを開催する一方で、科学技術科の1・2年生は拠点校にて台湾進学に関する講演を聴講した。続いて、海外研修で台湾を訪れた2年生の代表生徒と1年の「言語文

化」で台湾について調べた生徒が、それぞれスライドを用いて発表した。

これまで、自ら調査しスライドにまとめて発表する活動は主に総合進学コースが中心でしたが、今後は科学技術科の生徒も資料作成や発表、さらには他学年の発表を聴く経験を重ねることで、より視野を広げる機会を増やしたい。

## B. 東北から世界で活躍するリーダー的人材を育成する取組

全校生徒対象に、学校設定科目「Global Competence Program I・II・III」にて、新たに学ぶ6つのコンテンツ（Communication Skills、Multilingual Skills、Intercultural Skills、Thinking Strategies、Emotional Intelligence、Global Action）修得を目標に、異文化理解やグループワークを通じて地域やグローバル社会との関係性を深めている。また、2年に行う研修旅行先では「台湾」を訪れ、SDGsの観点から現地を探索し、現地の大学生と共に研修を行っている。この学びを通して、生徒たちがグローバル思考を身につけ、広い視野で課題解決に取り組む姿勢を養うことは、将来地域から海外で活躍するグローバル・リーダーを育成することにつながる。

2024年度から始めたアメリカ デラウェア州訪問には、継続して生徒が参加し、その他の海外研修にも参加希望をする生徒が増えている。また、2026年度には、アメリカ デラウェア州生徒が仙台を訪問する際に、本校がホームステイの受け入れ先の一つとなる予定である。本校卒業後の進学先として、2024年度卒業生の中には、イギリス マンチェスター大学ファウンデーションコースに進学した者もいた。

## C. 先取り履修システムの構築

事業協働機関である東北工業大学が提供するGX科目「グリーン・テクノロジー」については、令和6年度度12月から受講を開始している。オンデマンド型受講システムにより、生徒は場所を問わずに受講できる。全8回から成る講座を受講後、確認テストを受けて2/3以上「正解」することでその回の講義「合格」とする。全8回の講義において6回以上「合格」することで単位修得を認める。最後のテストをオンライン上で受験して合格とする。

## D. AL ネットワーク形成

### ①運営指導委員会の運営

管理機関1名、運営指導委員3名、事業拠点校10名（教頭、主幹教諭、事務担当等）、その他、連携校からも参加者を募っている。

### ②カリキュラム・アドバイザー

課題研究に関連する教科（探究）や高大連携科目に関する意見・見解、そして国際会議へ向けての助言を依頼している。

### ③検証委員会

管理機関1名、検証委員2名、事業拠点校10名（教頭・主幹教諭・事務担当等）。ただし、3月開催分については、運営指導委員およびカリキュラム・アドバイザーも同席した評価会として実施予定している。

#### ④みらい東北ネットワーク

事業2年目となる令和6年度からは、連携校の生徒から構成される「生徒実行委員会」を中心にプレサミットや国際サミットを推進している。

事業拠点校ではWWL事業におけるALネットワーク運営のために「連絡協議会」を年に3回実施した。事業連携校の担当者のみならず各委員の先生方にも「連絡協議会」に可能な限り出席してもらい、国際サミットのありかた、運営方法等について、的確なアドバイスをいただいている。また、事業協働機関にはその結果を伝達しており、各企業や団体からは、プレサミットや国際サミットへの講師参加について、了承を得た。

#### 4. 今後の活動と課題

活動の持続性を確保し、さらなる発展を目指し、School・Local・Globalの各Social Capitalの連携をより強固なものにしていく。連携校の担当教員間で「探究活動」指導に関する課題について共有し、解決に向けて具体的に掘り下げる機会を多く持ち、国際サミットに向けて連携校担当教員間で指導のコンセンサスを図りたい。また、生徒の提言を世界へ発信するプラットフォームの構築や、生徒実行委員会による企画・運営への卒業生メンター制度の導入を進め、教員だけでなく生徒自身によるフィードバックも取り入れたい。

## 12. カリキュラムアドバイザーからの 報告

### (1) 令和7年度のWWLコンソーシアム構築支援事業の総括

令和7年度の本事業の活動で特筆すべき点は、昨年度から始められた生徒実行委員会の取り組みであろう。オンラインと対面を合わせて8回の生徒実行委員会が開催され、その中で各学校での探究活動の共有や「みらい東北高校生サミット」に向けた準備だけではなく、本事業終了後の生徒実行委員会の活動についての具体的な検討も行われた。これらの活動を通して生徒実行委員会の生徒同士が親交を深め、公式 Instagram を開設するなど具体的な形で結実している。この生徒実行委員会の取り組みが「みらい東北高校生国際サミット」だけではなく、本事業全体の大きな推進力となった。

3月13日(金)と14日(土)の二日間にわたって東北工業大学で行われた「みらい東北高校生国際サミット」は、「未完成レール～正解のない未来へ走る～」をテーマとして開催された。今年度は、最終年度にふさわしく充実した内容であった。各学校の探究活動の成果発表では、特に発表資料や発表の仕方の質が高く、質疑応答も円滑に行われた。また、科学、文化・教育、まちづくり、国際理解のテーマに分かれて2040年の未来の課題とその解決策を考えるワークショップでは、異なる学校の生徒でチームが編成され、活発な話し合いが行われた。チーム内での話し合いでは地域ごとに異なる意見が出され、地域の企業・団体の方から助言をもらうことによって、生徒の視野の広がりにも寄与したと考えられる。

### (2) 3年間のWWLコンソーシアム構築支援事業の総括

本事業は、将来における持続可能な社会発展を担うイノベティブでグローバルな人材の育成と、そのための「みらい東北ALネットワーク」の構築を目指した取り組みであった。グローバル人材の育成に関しては、東北から世界へという「グローバル」な人材の育成を志向したのは慧眼であった。東日本大震災や少子高齢化による地域の衰退といった共通の課題を抱える東北地方で学ぶ高校生たちがグローバルに活躍するためには、逆説的なようにも感じられるが、地域に根差した視点が不可欠である。この観点から「みらい東北高校生国際サミット」を「プレサミット」も含めて3年間実施したことは、本事業を堅実かつ実質的なものとしたといえる。また、「みらい東北ALネットワーク」の構築に関しては、「みらい東北高校生サミット」と各校の代表生徒からなる生徒実行委員会の活動を通して、事業連携校との間で生徒間の交流と活動の共有が積極的に図られた点は高く評価できるだろう。

WWLコンソーシアム構築支援事業としては今年度で終了ではあるが、今後も同様の活動を継続していくとのことなので、そのさらなる発展に向けて、カリキュラムアドバイザーの立場から2点助言を行いたい。1点目は、本事業を通じた各学校の探究活動の質の向上への貢献である。サミットでの探究活動の成果発表を見ると、生徒のプレゼンの質は年を追うごとに向上した。一方で、発表の内容からは、何を探究活動の目的とし、それに向けてどのように指導するのかについて、各学校がまだ模索の途上にあることが窺われた。多数の高校の探究活動の成果が結集するこの事業は、そうした各学校の探究活動の改善にさらに寄与するものとなってほしい。2点目は、連携校の教員間の交流をより活発にすることである。1点目に挙げた探究活動の課題の解決のためにも、生徒間の活発な交流と同様の交流が教員間においても行われることが必要であると考え。探究活動の指導やカリキュラムの編成は容易ではないからこそ、学校を超えたネットワークにおいて教員間で課題や対策を共有していくと良いのではないかと。以上の点を踏まえ、今後の活動がさらに発展していくことを期待したい。

東北工業大学 総合教育センター(教職課程部門) 准教授  
カリキュラムアドバイザー 中島夏子

## 14. あとがき

仙台城南高等学校 教頭 遠藤 吉夫

この3年間、授業以外のところで、この東北、この日本、この世界の未来を担う高校生の活動を、このWWL事業を通じて、間近に見ることができた。ある意味、幸せな時間だった。昨今、ケータイ・スマホのせいで、人間関係の希薄化が叫ばれているのは、もちろん承知。しかし、この3年間、見てきた高校生の、なんと生き生きとしていることか。自校の友人間で閉じてしまうわけではなく、昨日まで見も知らなかった他校の仲間と瞬く間につながり、笑顔で友情を育む姿に心を躍らせてきた。SDGsという、なかなかそう簡単には答えの出ない課題に対して、ひるむことなく、正面からその課題解決に向けてアイデアを仲間とワイワイ話し合いの末、提言していく姿は、感動的ださえあった。

「幸せの企画術」。敬愛する小山薫堂氏のその本が手元にある。モノ・カネをどんなに手に入れたとしても、それが本人を幸せにするとは限らない。おのれの際限のない欲望をモノやカネで満たそうとしても、必ず飽きが来る。賢人は早くからそこに気づき、他者とのつながりに幸せの拠り所を求めようとした。薫堂先生曰く、「人を笑顔にすること」、「人を笑顔にすることができて、それを自分が幸せと感ずること」。それはきっと人がこの世の中を生きていくときの拠り所となるに違いない。

なんのために学ぶのか。お金を稼ぐとか、モノを手に入れるとか、地位を手に入れるとか、そんなことよりも、究極的には幸せになるため。そしてその幸せはヒトを笑顔にすることからもたらされる。とすれば、人的なネットワークが何故必要か。その答えはすんなりと見えてくる。

本事業の構想図の最上部には「みらい東北のサステナビリティとDXを牽引する人材育成ネットワーク」とある。サステナブルな地域社会を形成していくためにはどうしたらよいのか。DXは魔法の玉手箱になるのか。大人でも、後ろ向きにならざるをえない解決困難な諸課題に対して、彼ら、彼女らが嬉々として解決に取り組む姿に対して我々大人はもっと驚嘆のまなざしを向ける必要がある。

2026年になって、世界情勢はますます不透明さを増しつつある。そういう状況下でも、未来をたくましく切り開いていくパワーを持っているのは、この目の前の若者かもしれない。幸い「自走」の形をおぼろげながらも提示することで、この3年目を終えることができそうである。問題を先送りするようで申し訳ないが、みらい東北、みらい日本、みらい世界のもろもろの課題に対してたくましく立ち向かう高校生を少しでも育てることができたと信じて、このWWL事業指定3年間を閉じたい。ここまで一緒になって走ってくれた連携校や協力校の先生方、心温まる助言をいつもかけていただいた運営指導委員、検証委員、そしてカリキュラムアドバイザーの先生方、各企業や大学の先生方、関係するすべてのみなさまに感謝申し上げ、結びとしたい。

## 15. 御礼

編集に協力いただいた運営指導委員、検証委員、カリキュラムアドバイザー、及び各連携校の先生方

所属	役職	氏名
宮城県 総務部 私学・公益法人課 副参事	運営指導委員	千葉 忠幸
東北大学 教育・学生支援部 特任教授		山内 民
金沢大学附属 特別支援学校長		中澤 宏一
ゆずりは法律事務所 弁護士	検証委員	北島 みどり
ベネッセ東北支社 学校事業統括責任者		大竹 裕貴
東北工業大学 総合教育センター 准教授	カリキュラムアドバイザー	中島 夏子
仙台南山高校	教頭	佐々木 良彦
	主幹教諭	早坂 晴子
仙台東高校	教頭	齋藤 貴弘
	主幹教諭	渡邊 哲
泉高校	教頭	佐藤 匠
	主幹教諭	横橋 裕介
八戸工大第二高校	教諭	田代 誠
	教諭	久保 圭慧
盛岡白百合学園高校	教頭	菅原 浩
	教諭	成田 奈穂
聖霊学園高校	教諭	工藤 啓之
	教諭	阿部 那津子
東北文教大学山形城北高校	教諭	山村 美和
	教諭	伊豆田 亮爾
福島成蹊高校	教諭	水谷 朋之

お忙しいところ、ご協力いただき、ありがとうございました。

拠点校のWWL事業担当スタッフ

仙台城南高校	主幹教諭	鈴木 理恵
	教諭	相澤 茂紀
	教諭	千葉 俊哉
	教諭	藤井 久美
	教諭	佐藤 悠
	教諭	表 潤一
	教諭	高橋 和輝
	事務主任	大學 麻子
	事務主任	伊藤 まり子
	事務職員	佐藤 ひなた

令和7年度指定

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム

構築支援事業

活動報告書

発行日：令和8年3月25日

編集・発行：学校法人東北工業大学 仙台城南高等学校

グローバル教育推進部

〒982-0836 宮城県仙台市太白区八木山松波町5-1

TEL 022-305-2111

FAX 022-305-2114